
小学生日誌一年生編

銀河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小学生日誌一年生編

【Nコード】

N6462D

【作者名】

銀河

【あらすじ】

「俺は、本当に蘭のことが好きだったんだろうか」あの園子をも圧倒するコナンの決意。阿笠博士の目的とは？意外に知られていなかった哀の謎とは？物語の終わりは始まりにすぎない。 本小説の同人誌を発刊。詳しくは”<http://homepage1.nifty.com/Uranus/>”をご覧ください。

The day after (前書き)

同人誌（上巻）初版原稿の最小限訂正版です。第9話まで。

The day after

ツインタワービルA棟はまだ燃えていた。駐車場には消防車や救急車がたくさん停まって赤色灯を回転させており、消防士たちが緊張した面持ちで燃えるビルに出入りしている。

B棟のエレベーターでようやく地上に降りてきた少年探偵団の子供たちは、火と煙に包まれたA棟を見上げて言葉を失った。

歩美は思わず光彦の腕にしがみつく。しかし光彦はそのことにも気がつかず、ただ呆然と見上げたままだった。元太は今頃になって恐ろしさに気がついたのか、顔がひきつっている。

それでも、火災発生直後に比べればだいぶおさまってきた。窓から吹き出している火の勢いもあきらかに衰え、消防士たちの表情にも多少の余裕は出てきたようだ。

子供たちに遅れて、蘭と園子も地上に降りてきた。

「あ、いたよ、園子」

子供たちを見つけた蘭は走り出した。

しかし、そこにコナンはいなかった。

「コナンくんは？」

一番近くにいた元太が振り向いた。

「あれ、一緒じゃなかったのか？」

「ううん。私はてつきり、みんなと一緒にだと…」

そこへ、目暮警部がやってきた。

「夜も遅いし、少年探偵団のみんなには後日ゆっくり話を聞くことにしよう。今日はもう家に帰ってかまわないよ」

それだけ言うと、警部は小走りに立ち去った。このまま徹夜になるのだろう。まだまだこれからが忙しいに違いない。

警部と入れ替わるように、やってくる小五郎。

「蘭、お前は子供たちと一緒に先に帰れ」

「う、うん」

蘭は小五郎のほうをちらっと見ただけ。コナンがいない。

「ん？ どうした？」

「コナンくんが…」

「ああ、あいつならさっき、阿笠博士と一緒にいたぞ」

「え？ どこに？」

「あつちのほうだ」そちらへ向かって歩き出す小五郎。

父の背中を追う蘭。並んで停まっている消防車を回り込む。

パーティの招待客が数十人、不安げな表情を抱えビルを見上げている。

コナンがいた。

哀と阿笠博士、三人並んで、やはり上を見上げていた。

哀に向かって何事か話すコナン。おそろしく真剣な眼差しで受け答える哀。

その様子は、少年探偵団の子供たち三人とはまるで違う。全然違う。

今までも、コナンを見て「とても小学生とは思えない」と言う大人はたくさんいた。けれどもそれは、子供の顔をしたコナンだ。今、コナンは子供の顔ではない。蘭にさえ滅多に見せない、いや、隠そうとさえしているあの顔。

それを、哀には見せているのだ。隠そうともしていない。

「阿笠博士！」

小五郎は三人に向かって歩み寄った。こちらを振り向く三人。

「博士、すみませんが、私はもう少し残りますので、子供たちと蘭を家まで送っていただけませんか」

「ああ、それはかまわんが」

「では、よろしく願います」

小五郎は、言い終わるや否や、Uターンして消防車の向こうに消えた。

蘭はその場に取り残されてしまった。

「ふむ…毛利くんも大変じゃなあ…一円の収入にもならないの

に」

博士の言葉に、蘭も軽いため息をついた。

「ほんと、もう少しお金のことを考えてくれると助かるんだけど。お母さんがいたら、私立探偵の出る幕じゃないって怒るわよ」

「そんなことないと思うよ」コナンの声。

はっとして下を見ると、子供の顔だった。コナンは。

「どうして？」

「おばさん、そんなおじさんだから結婚しちゃったのよ、って言うてたもん」

驚く蘭。

「お母さん、コナンくんになんかそんなこと言ったの？」

「うん」

「そう…」

そんなこと、自分には一度も教えてくれたことはない。

「蘭ねえちゃん」

「なに？」

「僕、今夜博士の家に泊まるから…その…」

あまりに予想外の言葉。

「おいおい、どうしたんじゃ？」博士も驚いたようだ。

「大事な話があるんだ」

「いや、別に泊めるのがいやだということではないがな、こんな事件のあった夜くらい…」

「事件があつたからだよ」

そう言つてコナンは哀を見た。コナンの視界に蘭は入っていないのだ。蘭はコナンに向かって何か言おうとしたが、言葉がなかった。と、いつの間にかその場にいた園子が助け船を出してくれた。

「それじゃあ蘭、私の家に来ない？ 台無しになった夕食くらいごちそうするわよ」

コナンは反応しない。

「う、うん…ありがとう園子」

蘭はもう一度コナンを見た。コナンはやっぱり、蘭を見ていなかった。

午前〇時過ぎ、博士のワーゲンビートルはようやく米花町に戻ってきた。高層マンションの駐車場手前で停車する。歩道では歩美の両親が待っていた。

「おやすみ、コナンくん！」

歩美はにこやかに車を降りた。九死に一生を得たと言う言葉が何も大げさではない、そんな大変な事件の後だというのに、歩美はまったく動じていない。博士も車を降りて、歩美の両親と挨拶を交わす。ほんの数時間前、生死をかけた大ジャンプがあったことなど、夢だったのか、それとも幻だったのか。

哀は、車内から歩美と両親を見ていた。やがて三人は、明かりが煌々と灯るエントランスの中へと戻っていった。たとえどんなに怖ろしい目に遭っても、歩美には帰る家と温かく迎えてくれる両親がいるのだ。

光彦の家、元太の家をまわって二人を降ろすと、車内は博士と哀、そしてコナンの三人になった。コナンは助手席から後部座席に移って、哀の隣に座っていた。

「で、大事な話って何？」

コナンの横顔をよぎる街路灯の光。

「ま、家に着いてからだ…あ、博士、三丁目角のコンビニに寄ってくれねえか？」

「それは構わんが…しかし、いいのか新一？」

「何が？」

「蘭くんじゃよ」

「ん…まあ、園子がいるし…それに、目を離すと死んでしまうような心配はないから」

さっとうつむく哀。

「おいおい」

博士は、ようやく何かあることに気がついたようだ。

阿笠邸に到着するや否や、哀はつとめて冷静に口を開いた。

「大事な話というのは何？」

コナンはふつと息を漏らした。

「まあまあ、そう焦るなつて。コーヒー淹れてケーキ食おうぜ、ケーキ。これ、コンビ二で売ってるからつて、甘く見ちゃいけない」
ケーキの箱をにこやかに持ち上げる。本人は洒落を入れたつもりなのだろう。

「しかしのう、蘭くんを一人にしてまで今夜わしらに話す必要のあることとは一体何じゃ？」

博士は洒落にはまったく気がつかなかったようだ。コナンは短いため息をついた。

「コーヒー淹れたあとあと」

コナンはそう言つて、台所のほうへさっさと行つてしまった。哀もコナンを追つて台所に向かう。しかし、ケーキ皿とカップを戸棚から出すと、ヤカンを火にかけたコナンを残して先に戻った。テーブルに皿を並べケーキを置く。

しばらくして、コナンが戻ってきた。お盆の上にはコーヒーサーバー。コーヒーの香りが漂ってきた。コナンは、手際よくコーヒーをそれぞれのカップに注ぎ終わると、嬉々としてソファに座り、ケーキを手にとった。その様子はまるつきり子供そのものだった。

哀の視線に気がつくコナン。

「どうかしたか？」

「どうかしたか、じゃなくて、話つていうのは何？」

「ん、ああ……」

コーヒーを一口飲むコナン。

「……俺や蘭が乗っていた展望エレベーター、途中で停まっていただろ。あれ、なぜだと思つ？」

「火事のせいではないのか？」博士が怪訝そうに尋ねる。

「何者かが機器室を破壊したのさ。動いてるままでは不可能だから」

「不可能？ 何がじゃ？」

「乗客の狙撃」

コナンが平静に言ったものだから、博士は一瞬遅れて驚いた。

「狙撃！」

「ああ」

「いったい誰を…ま、まさか！」

「俺じゃないさ、園子だよ」

「な、何で園子くんが…」

すぐにピンときた。

「あの髪型…狙撃手が私と誤認したから」

「何！」

「そのとおり。目標はシェリー。そう、狙われたのはお前だったんだ、灰原」

「い、一体どういうことじゃ？」

「ビルを爆破するために会場に来て、そこでたまたまお前に似た園子を目撃。シェリーが来たと勘違いして、急遽あんな作戦を立てた。ってシナリオもなくはないが…連絡橋や屋上にも爆弾を仕掛けてあったこと、女子供が展望エレベーターで避難することを見越して狙撃ポイントで待機していたこと…にわかに準備できることじゃねえさ。つまり、奴らは事前に知っていたんだ。シェリーがあのパートに現れることを」

「…あの電話、というわけね」

「ああそうだ。向こうの回線に盗聴器が仕掛けられていたのさ」

「そ、それじゃこの家は…」顔がひきつる博士。

「いや、逆探知でここが特定できたんなら、とつくの昔にこの家を襲撃してるさ。直接な」

「もし、あのまま通話を続けていたら…」

コナンは黙ってうなずいた。

「むむむ…」

「ま、その件の続きは後でゆつくりと…もつと重要な話があるんだ」
コナンは悠然とケーキを食べコーヒーを飲む。哀は、とても何かを口にする気分ではない。その哀をコナンはじろりと見た。

「今日、俺がここへ来た最大の目的は、灰原、お前が死のうとしたことについてだよ」

コナンはそう切り出した。

「ど、どういうことじゃ」大いに驚く博士。

「車で脱出しようとしたとき、こいつ、車に乗らないで、その場に留まろうとしたんだ。幸い、元太の機転でことなきを得たがな」

博士は大げさにぎよつとした。

「お、おい、哀くん、それは本当か？」

とても博士を直視できない。下を向く哀。

「…ええ」

「どうしてそんな！」

「まあ、お前には深く追及されたくない話題かもしれないが…」

「だったら追及しないで」

「そうはいかない。目の前で死のうとした人間がいるのに、ほっておけるか」

哀には小声しか出なかった。

「私が死んだら、工藤新一に戻れなくなるから？」

頬に走る痛み！

ぱーんという音！

コナンの左手が飛んでいた。

「お、おい新一！」

コナンは哀を睨みつけるようにして、しかし冷静な口調で言った。
「お前、俺がそんなことを考える人間だと思ってたのか？」

ようやく、叩かれた頬を手で押さえる哀。

「違っつて言うの？」

「理由なんか何もない。お前に死んでほしくないだけだ」

視線を外す哀。

「…工藤くん、あなた…あなた、残酷だわ」

「お前、自分に自信がねえのかよ？」

「それ、どういう意味？」

「お前にもチャンスはある、ってことだよ」

頭が真っ白になった。息が止まった。

鈴木邸、園子の部屋。風呂上りの二人がベッドを整えていた。園子の部屋は十二畳もあるから、蘭のためにベッドを持ち込んでも全然余裕だ。

蘭の顔色は冴えないままだ。ごちそうを揃えた食事の最中も、大きいほうの風呂に入っても。

「蘭、蘭ったら」

「え、何？」

振り向く蘭の表情は本当に暗かった。

「布団、それで足りる？」

「うん、大丈夫」そう言うだけでさっと視線をそらす蘭。

「ちよつと、どうしたの？ あんな事件があつた後で気が動転してるのはわかるけど…」

突然、蘭はふつと自嘲の笑みを浮かべた。

「ふふ…」

それは、園子が初めてみる姿だった。

「ねえ園子、十七歳の人間が六歳に逆戻りする、なんてこと、あると思う？」

「はあ？」

「コナンくん…あの子ね、本当は新一なのよ」

「…ちよつと？」

「理屈じゃそんなことありえないと思う…でも、間違いない。コナンくんは新一なのよ」

「…言ってることが矛盾してるわよ」

蘭は財布から写真を取り出した。

「これ見て」

それは小学校入学記念に撮った蘭の姿。

「あら、可愛い…」

「違うの…見てほしいのはこの子よ」

蘭のとなりに背筋を伸ばしてポーズをとっている男の子。

「あら、これ…もしかして新一くん？」

「そうよ、小学一年生、六歳の時の新一」

「…そういえば、コナンくんに似てるわね」

「当然よ。本人なんだから」

「で、でも、ほら、学園祭の時…」

「あのコナンくんは多分、哀ちゃんの変装だわ」

「ええ？」

「コナンくん、あの子、阿笠博士の作った薬が何かで小さくなった新一なのよ」

「…だ、だけど、仮にそれが本当だとして、理由は何？ あの博士の人体実験の犠牲者ってわけ？」

「多分、何かの事件で犯人に命を狙われて、姿を隠す必要があるからよ。私に黙っているのは私を巻き添えにしたくないから…」

「ま、まあ妄想としては面白いけどねえ…」

「妄想なんかじゃない。今日、確信したの。あの子は新一に間違いない、って」

「うーん、だとしたら許せないわね。こんな事件があった日くらい、なんで側にいてあげないのかしら」

「今日の事件、新一が姿を隠さなきゃならない理由と関係あるとしたら？」

思わず首を振る園子。

「…蘭、あんた、それ、本気で言ってるの？」

「…コナンくん、哀ちゃんと真剣に話してた…」

「はあ？」

「あの顔、私には見せまい、見せまいとしてるのに…」

「そりゃまあ、あの二人ができているってことじゃないの？ ……つて言っても小学一年生じゃねえ…」

「新一、姿形が変わって、あの子のことが好きになったんじゃ…」

「ちょ、ちよつと…あんたまさか、コナンくんが新一くんだと本気で信じてて、それで、やきもちやいてるわけ？」

「そんなんじゃないよ…でも…」

蘭は、本気で落ち込んでいるのだ。

「ああ…もう、すっかりしなさいよ。今だって時々彼から電話、かかってくるんでしょ？」

「声だけだもの。どうにでもなるでしょ」

園子大きく天井を仰いだ。そして、蘭に強い視線を向けた。

「あのね蘭、新一くんがいなくて寂しいのはわかるけど、そんな不健康な妄想にふけるのはやめなよ」

軽く笑う蘭。

「そうだね。ふふ…私、何言ってるんだろ」

園子は、とても笑ってはいらなかった。

「チャンスって、何のこと？」小さな声しか出ない哀。

「お前の気持ち、俺が知らないとも思ってたのか？」

知られたくなかった。

「私に、どうチャンスがあるって言うの？」やっぱり小さな声。

一歩近づくコナン。

「言葉どおりの意味さ。だから…」

顎の下にコナンの手が。ぐいっと持ち上げられる頭。真正面、コナンの顔。

「だから、二度と死のうなんて考えるな。いいな！」

見つめ合う目と目。そのまま二秒。

哀は力任せに体を引いて、コナンの手から逃れた。

「…うん」小さく小さくしか声が出なかった。

コナンの表情もすっと緩む。

「コーヒー冷めちまつたな。淹れなおしてくる」

立ち上がるコナン。お盆を持って台所に。

成り行きを見守っていた博士は、とても優しい顔だった。

「まあまあ、座ったらどうじゃ」

哀は、黙ったままゆっくりと椅子に腰を下ろした。

その頃、西多摩警察署に如月峰水容疑者を連行した高木は、控室にあてられた会議室のパイプ椅子に腰を下ろした。

「ふう…」

「お疲れ様です」

西多摩署の婦人警官がお茶を持ってきてくれた。

「ああ、すみません」

署内は騒然としており、電話の鳴る音がひっきりなしに聞こえてくる。

しかし高木は、事件の事よりも別のことを考えていた。

「どうしたんだ」

白鳥であった。

「警部：現場のほうは？」

「だいぶ落ち着いてきたし、そのうち目暮警部も戻られるだろう」

「そうですか」

「何を考えているんだ？」

「は？」

「その顔、何か腑に落ちないことでも考えているんだろう」

「え、いえ、たいしたことでは…」

にやっと白鳥が笑った。

「コナンくんのこと、だな？」

図星をつかれて、ぎくつとする高木。

「え、ええそうです。あの子…あの子は一体何者なんだろうって」

「とても小学一年生には思えない…と？」

「ええ。別に今日に始まったことじゃありませんが…」

「詮索しないことだな」

「は？」

「あの子は帝丹小学校に通う小学一年生。それ以上でも以下でも、あつてはならない」

白鳥の顔を見つめる高木。

「余計なことを考える暇など我々にはないはずだ。とりあえず仮眠でも取っておくんだな」

口の端に浮かぶ薄い笑み。

「実は、僕も調べようとしたんだが、松本管理官に止められたんだよ。立場というものをわきまえろ、とね」

深夜、明かりの落とされた阿笠邸。

パジャマ姿のコナン。トイレから出て、音を立てないように手を洗う。

「感心じゃな」

博士が立っていた。

「…何が？」

「音を立てないように手を洗つとることじゃよ」

「真夜中だし、常識だと思うけど」

「哀くんやわしの寝とる部屋までは聞こえんじゃろ」

「念のためだよ」

博士は穏やかに微笑んでいた。トイレに入ろうともせず。

コナンは水栓を閉じ、タオルで手を拭く。

「…トイレ、入らないのか？」

「新一、ありがとう」

きよんとするコナン。

「わしにとつて今や、あの子は娘も同然。だから、親の代わりとしてあの子を助けてくれたことに対して礼を言う」

「それを言うなら俺より元太だよ。元太があいつを抱えて車に乗せ

「ただから」

「ところで、礼を言ったばかりでなんなんじゃが、お前の本音を聞きたい」

「本音？」

「哀くんにチャンスがあると言ったじゃろ。だが新一、お前には蘭くんという……」

博士が言い終わらないうちに、コナンは口を開いた。

「もしも、俺がこのまま新一に戻れない、としたら？」

「む？」

「そういうこともあるってことさ……」

タオルを元に戻す。

「……蘭は強いんだ。たとえ俺がいなくても大丈夫。だけど、灰原は

……」

コナンは意外にも明るい表情で続けた。

「いずれにせよ、あいつにとって絶望的じゃないことだけは確かだ」

警察の事情

非番の日、目暮はいつものように公園をジョギングしていた。そして公園の外れ、人気もまばらな場所にあるベンチに腰を下ろした。先客が一人、くたびれた背広を着て競馬新聞を広げている男。

「例のものは手に入ったかね」

目暮は男のほうを見るでもなく、一人言のように言った。

「ああ」

すつと封筒を差し出す男。

「二人の住民票…二人とも小学生だったのに、なぜか戸籍の筆頭者…」

目暮も懷から新聞を取り出して広げた。そしてその内側で封筒の中身を取り出す。

「なるほど、二人とも本籍地は米花町二丁目二十二番地、か…」

「言っときますがね、建物に侵入しなきゃならない戸籍は引き受けられねえよ」

「ああ、わかつてる。ありがとう」

目暮は持参した別の封筒を男に差し出した。男は素早く懷にしまった。

「自腹で、何でそこまで？」

目暮は新聞をたたむとすつと立ち上がった。

「今後ともよろしく頼む」

そう言って再び走り出そうとした。

「だんな、ひょっとして、こいつはかなりやばい話なんじゃ？」

「それがわからんから、調べている」

目暮は真剣な表情で再び走り出した。

東京丸の内。赤レンガの東京駅近くにある日本工業倶楽部ビル。大正時代に建てられた当時のままの姿を残すオフィスビル。その一

階に、ビル竣工当時から営業しているバーがあつた。しかしその店に入れる人間はごく限られていた。旧財閥系の日本を代表する大企業の役員、もしくはそれら企業に関係する旧華族の人々のみ。

その日も客は一人だつた。カウンター座る和服の老人。銀髪、顔にはそれなりの皺が刻まれているが、肌に残る張り艶は、ぱつと見の年齢にしては若作りだ。老眼鏡もかけずに新聞を読んでいる。しかも中国語の新聞だ。

「マティーニでございます」

バーテンが老人の前にグラスを置く。オリーブ抜き、それが老人の流儀だ。老人は新聞から顔を上げた。

「はて、私は頼んでおらんが…」

はつと後ろを振り返る老人。

「波多野先生、お久しぶりです」

いつやつてきたのか、白鳥がそこにいた。

「君か…私に何の用かね？　いつぞや同様、穏やかな話ではなさそうだな」

「先生にお伺いしたいことがあります」

新聞をたたむ老人。

「その前に、せっかくの好意だ、いただくとしよう」

老人はぐいつとカクテルを飲んだ。

「…で、用とやらを聞こうか」

白鳥は単刀直入に切り出した。

「先日、プロ野球コミッショナーだつた田岡氏が急逝されましたが」

…」

黙つてグラスを傾けている老人。

「実は生きている、なんてことはありませんか？」

飲み終えて、グラスをカウンターに置く。

「たとえば、子供の姿になつて」

老人は眉一つ動かさなかつた。

「いったい、何の冗談かね？」

「田岡氏は財団法人日本細胞遺伝子学研究所の理事でもいらつしやいました」

「…何を言いたいのかね？」

「何でも、そこでは若返りの妙薬を研究しているとか」

「待て！」

飛んできた鋭い声。一瞬、白鳥の息が乱れた。

「君は警察庁のキャリアだろう」

「そうです」

「ならば、その件について興味を持つべきではない。理由がわからぬとは、よもや言うまいな」

白鳥は、強引に平静に構えた。

「実は私、奇跡とも思える実例を一人、いや、二人、知っていましたね」

「白鳥君」

老人は立ち上がった。

「私は、今日君とここで会ったことは忘れる。君もそうしたまえ」

老人はさつさと出口に向かって歩いていった。

「波多野先生！」

老人は振り返りもせず、そのまま扉の向こうに消えた。

白鳥の顔から、いつもの余裕は完全に消えていた。

朝夕は渋滞する幹線道路も午前十一時はさすがに空いている。

ハンドルを握る高木は、不安げな表情を抱えて助手席の美和子を見た。

「本当にいいんですか？ 名義を借りるなんて」

「大丈夫よ。彼には貸しがあるから」

幸いなことに区役所の駐車場も空いていたので、楽に駐車できた。停車と同時に美和子はドアを開け地面に足を降ろした。高木は慌てて声をかけた。

「もしもばれたら、山田さん、行政書士の資格を失うことになりま

せんか？」

「あの人、もう何回失ってるかしら…私がちらついても過去のことを証言したら、ふふ…」

「それに、山田さんだけじゃなくて、僕らもやばいですよ」

「当然じゃない。減給では済まないでしょうね。僕ら、じゃなくて私だね」

美和子は、にやりと笑って車を降りた。

「いいのよ。高木くんはただの運転手。私がやってることは一切知らないはずだから」

ドアを閉めると、さっさと庁舎に向かって歩き出した。

「佐藤さん！」

あわててサイドブレーキを引く。

市民課の窓口、美和子は平然とした顔で書類を提出した。書類を見た女子係員の顔色が一瞬変化したことに、美和子は気がつかなかった。

美和子がベンチに腰を下ろすと、ようやく高木がやってきた。

「…もう提出しちゃったんですか」

「ええ」

その後待つこと一〇分、しかし、山田善行の名前は呼ばれない。

「遅いわね…」

「今受け取ってる若い男、佐藤さんより後に提出した人じゃないですか？」

「そうよね…」

と、美和子の携帯が鳴った。

「はい、佐藤です」

「松本だ。すぐに戻って、私の部屋に來い」

松本管理官の声は平静だった。

「わかりました。今、米花駅近辺にいますので…」

美和子の返答を待たず、松本の冷静な言葉が続いた。

「残念だが、君が提出した山田善行行政書士名義の申請書は受理さ

れない。とにかく戻れ』

美和子の顔色が変わった。

「ど、どういことですか？　なぜそれを管理官が？」

『説明は私の部屋でしよう』

電話は一方的に切れた。

「どうしたんです？」

のんびりとたずねる高木。

美和子は市民課窓口へ走った。

「佐藤さん？」

窓口に先ほどの女子係員の姿はなく、課長と肩書きのある名札を付けた男性が座っていた。

「すみません、さきほど住民票の申請をした山田善行行政書士の代理の者ですが…どうなっていますか？」

課長氏はまったく平然と、事務的に答えた。

「どのくらい前に申請されましたか？」

「一〇分くらい前です」

課長氏は事務的なしぐさで手元の書類を探した。

「そのような申請書は提出されていないようですが…」

「そんなはずはありません。一〇分前ここに座っていた女性を呼んでください」

「彼女は今休憩中です」

「私は確かに提出しました。彼女に確認してください」

「と、言われました…」

あからさまに困惑の表情を浮かべる課長氏。

「佐藤巡査部長」

振り向く美和子。そこに制服警察官が二人。

「申し訳ありませんが、ご同行願います」

「いったいどういこと？」

「我々は佐藤巡査部長と高木巡査を本庁まで送れとの命しか受けておりません」

美和子はきつと窓口の課長氏を見た。もはや自分には関係ない話とばかり、別の申請書を受け取っている。

「なるほど、そういうことね」

何が起きているかわからず、啞然としている高木。

「高木くん、行くわよ」

「え、え、どこへですか」

目暮はジョギングを終え自宅に戻ってきた。マンションやビルに浸食されていない古くからの住宅街。瓦屋根を戴く純和風木造住宅。時刻は十二時を少し回っていた。

「ただいま」

やはり純和風でまとめられた玄関、エプロン姿の妻が出迎える。

「おかえりなさい。今、千葉さんから電話がありましたよ」

「千葉くんから？ …携帯にかければいいものを…で、かかってきたのはいつだ？」

「ほんのさっき、二・三分前ですよ」

目暮は怪訝な表情で電話機に向かった。

『はい、一課千葉です』

「目暮だ。電話をもらったそうだが、何か？」

『実は、佐藤さんと高木さんが管理官の部屋へ呼ばれたんです』

目暮はやれやれと息を吐いた。

「またか…で、今度は何をやらかしたんだ？」

『いえ、それが妙なんです』

「妙？」

『ええ。たまたま玄関で見かけたんですが…二人は所轄のパトカーに乗ってきたんです。何事ですかと聞いたら、佐藤さんが、松本管理官に呼ばれたの、と言ってましたが…しかし、その、まるで連行されてきた被疑者、といった雰囲気だったもので…』

目暮の表情に緊張感が走る。

「わかった。すぐに登庁する」

ゆつくりと受話器を置く。

「事件ですか？」慣れた口調で尋ねる妻。

「いや、部下が何か不始末をやらかしたらしい」

美和子と高木が松本管理官の部屋に入ると、松本は目をつむり腕組みをしていた。

「いったい、どういうことでしょうか？」

美和子の言葉に、松本はゆつくりと目を開けた。

「君が想像しているとおりだよ」

「理解できません」

「江戸川コナン、灰原哀、この二人について、おかしい興味を持つてはならない」

「つまり、二人は単なる小学生ではないということですね」

「君らが知る必要のないこと」

美和子はぐつと拳を握ってから、ふつと笑みを漏らした。

「私は、小笠原署あたりに転勤でしょうか？」

松本はぎろりと美和子を見た。そしてにやりと笑った。

「まさか。そんな異動をさせたら、それこそ何をやらかすかわからんからな」

「わかりました」

美和子は深々と頭を下げた。

「お騒がせして申し訳ありませんでした」

そのままくると松本に背を向ける。あつけにとられたままの高木。

「行くわよ高木くん」

「え？ あ、はい」

一歩前に踏み出して、ぴたつと立ち止まる美和子。

「忘れていました」

そう言つて、美和子は再び松本のほうを向いた。

「高木くんは車を運転してただけです。事情は何も知りませんで

した。処分は私だけにしてください」

「ちよつと佐藤さん！」

くくくと鼻で笑う松本。

「お前らを処分しなきゃならん理由など何もない。そう、何もなかったんだ」

不敵な笑みを返す美和子。

「コナンくと哀ちゃん…よほどの秘密があるんですね。たとえば、一七歳の高校生が七歳の子供に逆戻りした、とか…」

しかし、松本は眉一つ動かさなかった。

「ご苦労だった。下がっていいぞ」

これ以上のにらみ合いは時間の無駄であろう。

「…失礼します」

美和子は再び慇懃無礼に頭を下げると、そのままつかつかと扉に向かつて歩きだした。

「ああ…佐藤さん？」

あわてて松本に頭を下げ、美和子を追う高木。

それでもなお、美和子はドアのノブに手をかけてから立ち止まった。そして、そのままの体勢で言った。

「警視に昇進すればわかる、ということでしょうか？」

「はて？ 何のことかな？」

ノブにかかった手にぐつと力が入る。

「失礼します」

美和子は扉を開け、そのまま歩き去った。

高木は、もう一度松本に頭を下げると、あたふたと美和子の後を追った。

一課の扉の前、高木は美和子に追いついた。

「佐藤さん！」

美和子は高木に視線すら向けずに扉を開けた。と、そこには非番のはずの目暮警部がいた。

「で、今度は何をやらかしたんだ？」

「お休みのところ、申し訳ありません」

美和子は頭を下げた。そしてキツと頭を上げた。

「しかしご心配なく。何事ありませんでした」

「何？」

目暮は疑惑の視線を高木に向ける。

「え、あ、その…そうです。何もありませんでした」

高木から視線を外し、あらためて美和子を見る目暮。美和子は完全に関き直った様子で目暮を見返していた。

「なるほど…ま、何事もなかったと言うのなら、私は帰る。昼飯は家で食べるつもりだったからな」

そう言つと、目暮はさつさと部屋を出ていってしまった。

ふつと息を吐く美和子。

じつと美和子を見る高木。

「佐藤さん」

「なあに？」

機嫌の良くない美和子。

「今回の件、僕にだって責任があります」

美和子は高木を睨みかえした。

「高木くん、そんなことはもうどうでもいいの」

「良くありませんよ」

様子を窺うように、二人を見ている千葉ら数人の刑事たち。美和子は、きつと彼らを見渡した。

「君らが知る必要のないこと」

はつとする一同。

くすつと笑う美和子。そして高木を見た。

「焦ってはだめみたい。もっと慎重にやりましょう」

そう言つと、美和子は出入り口に向かって歩き出した。

「あ、あの佐藤さん、どこへ？」

「お手洗い！」

目暮はその足で松本管理官の部屋に直行していた。

「佐藤と高木に何かありましたか？」

「いや、何も」平然と答える松本。

「所轄のパトカーで連行されてきたようだった、と聞きましたか？」

「さて、私はその場を見ていないので詳しいことはわからんが、いずれにせよ、何もなかった」

鋭い視線が松本を捉える。

「コナンくんに関係ありますか？」

松本はぎょろりと目暮を見た。

「なぜそう思う？」

「私と同じ誤りを犯したのではないかと思ひまして」

「君も、そんな昔の事は早く忘れることだな」

目暮は一つ息を吸い、吐いた。

「今日は非番なので、これで失礼します」

「ああ」

ツインタワービル事件から三日目、毛利探偵事務所の朝はいつもと同じように始まった。表面上は。コナンと蘭が先に起きてきて、保護者たる小五郎は未だ夢の中。

「おはよう、蘭ねえちゃん」

コナンは挨拶のきちんとできる子だが、その朝の挨拶も普段のとおりであった。

「う、うん…おはよう」

蘭はあの日からずっと寝不足だった。今朝も。

「どうしたの？ 蘭ねえちゃん？」

「え？ ううん…何でもないよ。さ、早く食べましょ」

蘭は笑顔を作った。そう、このささやかな平穏の時を壊したくなかったから。

「うん！」

コナンは、いつもと同じように元気だった。

放課後、帝丹高校の門を出た蘭の表情は冴えなかった。

教室の中ではかろうじて笑顔を保っていたものの、一人になると言葉にならない不安がこみあげてくる。事件以来、ずっとその調子だった。

「蘭さん」

「え？」

呼び止めたのは白鳥だった。

「白鳥警部……」

「ちょっと聞きたいことがあるんだけどね。時間は大丈夫かな？」

「例の事件のことですか？」

「いや、工藤新一くんのことだね」

その名が出たことに、蘭は驚いた。

「新一の？」

毛利家の事情

毛利探偵事務所、ソファに向き合って座る蘭と白鳥。

二人の他には誰もいない。小五郎は外で食事をしてくるといってとで不在。コナンも今朝、学校の帰りに博士の家に直行すると言っていた。

「工藤くんからの電話は、どのくらいの頻度でかかってくるんですか」

白鳥は尋問調にならないよう意識して質問している。

「月に一・二回…だと思います」淡々と答える蘭。

「なるほど…」

姿勢を正す白鳥。

「その時彼は、自分の居場所とか、今何をしているか、などを詳しくは言わないんですね？」

「はい」

「蘭さんがいくら尋ねても、適当にはぐらかされると」

「いえ、私からは特に…」

「ほう」

白鳥は一寸考えるようにあごの下に手をやって、それから蘭を見た。

「なぜ尋ねないんです？」

「え？」

蘭は『来た』と思った。

「それは…聞いても教えてくれそうにないし…」

「尋ねたが拒否されたことがある、ということですね？」

「そうです」

「なるほど。その時、何か理由は言っていませんでしたか？ 居場所や、やっていることを教えられない理由を」

「公にはできない重大事件に関係しているからだ、と言ってました」

「そう言われたのはいつのことですか？　だいたいでかまいません」
「五月…トロピカルランドで別れてからすぐのことだったと…」

「蘭さんは工藤くんに会いたくないんですか？」

はっとして顔を上げる蘭。

穏やかな表情の白鳥。

「…あの、どういう意味でしょう？」

「一回や二回居場所を教えてもらえなかったとしても、本当に会いたいのなら繰り返し尋ねるものじゃないか、と思ってね。たとえ回答が得られないとわかっていても」

「…新一が…新一が私に何も言えない理由、私の前から…いえ、私たちの前から姿を隠さなきゃない理由、それは、私には想像もつかないほど深刻かもしれないって…そう思うから…」

「その深刻な理由、蘭さんは何だと思いますか？」

「え…」言葉に詰まる蘭。

「どうしました？」

「その…犯人に、命を狙われているんじゃないかって…」

「命を狙われているのなら、助けを求めると思いますがね」

「私を、いえ、まわりのみんなを巻き添えにしたくない…そういうことを考えちゃうんです、新一は」

「だったら、なおのこと、警察に助けを求めるべきだ。違いますか？」

蘭は、じつと白鳥を見た。

「…あの、それ、どういう意味ですか？」

「どういう意味、とは？」

「そんな質問、なぜ私にするんですか？」

「そうだね…」

白鳥の顔から微笑みが消えた。

「蘭さんが工藤くんの行方についてどのくらい知っているか、それを知りたくてね」

「…つまり、警察も新一の行方を追っている、ということですか？」

「いや、組織としての警察は、工藤さんの行方について何も関知していないことになっている。ご両親からも学校からも、どこからも捜索願いは提出されていないのですね。これはあくまで私の個人的な調査なんです」

はつとする蘭。

「そうよ、学校よ。学校は、どうして新一について行動を起こさないんですか」

「蘭さんはなぜだと思います？」

「いえ…今言われて気がついただけで…でも、おかしいですよ。生徒が一人行方不明になってるのに、どうして！」

「まあ、帝丹高校には帝丹高校の事情があるんでしょうね」

杯戸シティホテルの展望レストラン、小五郎と英理が向き合って座っていた。

グラスを上げる英理。

「合格おめでとう」

小五郎もグラスを上げて返礼した。

「ああ…と言っても、お前には負けるがな」

「で、今後挑戦するつもり？ 司法試験」

「この年だし、今更という気もするがな…」

「でも、満足してるわけじゃないんでしょ」

「ぐいっとグラスのワインを飲み干す小五郎。」

「そいつは落ち着いてから考えるさ」

「天下の名探偵が店じまいね」

「ふ…」

空になった小五郎のグラスにワインを注ぐ英理。

「ああ、ありがとう」

「ところで、どうするの？ コナンくんのこと」

「そりゃあ…俺が名探偵と言われているのもあいつのおかげだ。それに、蘭は気がついてる。あいつの正体に」

「そうでしょうね。だしたら蘭は、なおのことあの子と別れたくないんじゃないかしら」

「俺としては、あいつが成人するまでこのまま預かって…というつもりだったんだが…」

「私だって、あの子ならむしろ大歓迎くらいよ」

「一応、一緒に来るか、とは言ってみるが、たぶん来ないだろう」

「あなた、本当は来てほしくないわけ？」

「俺だって、蘭のことがなけりゃ喜んで歓迎するさ。これは本当だ。だが、蘭のことを考えると、もうここらが潮時だと思う」

「そうね。かわいそうだけれど」

「かわいそう？ どっちが？」

「二人ともよ」

「二人とも、か」

「ええ、二人とも…」

白鳥をキツと睨む蘭。

「白鳥さんも知ってるんですね」

「何の事です？」

「コナンくんの手体」

「コナンくんの手体…」

とりあえず、とぼけて見せる白鳥。

「コナンくん…コナンくんは新一なの。信じられないかもしれないけど、そうなの」

白鳥は驚く様子も見せなかった。

「ふむ…僕もそう思っていますよ」

あっさり肯定されたものだから、逆に蘭のほうが驚いた。

「そう。工藤新一は失踪したんじゃない。まさに我々の目の前にいたんですよ」

「理由をご存じなんですか？」

気が急ぐ蘭に対して、白鳥は軽く息を整えた。

「我々の推測が当たっていると仮定しましょう。そうするとコナンくんは、突然この世に現れた六・七歳児ということになる。しかしその子は今、公立の小学校に通っている。おかしいとは思いませんか？」

「え？」

「別に私立校でも同じことですが、住民票が無い子供を学校が受け入れるはずはありません」

「コナン君の住所はちゃんとして届けてあるはずですけど」

「戸籍のない人間に、住民票があると思いますか？」

「戸籍？」

「そう。産まれた時に、親が届け出てはじめてつくられるもの」

蘭は立ち上がって、小五郎の机の引き出しを開けようとした。しかし鍵がかかっていて開かない。

「ここにコナンくん関係の書類を入れてるはずなんだけど……」

「ああ、いいですよ蘭さん。おそらくそこには住民票の実物はないか、あっても戸籍欄省略のものでしょうから」

手を組み替える白鳥。

「住民票の内容というのは誰でも閲覧できてね、コナンくんの住民票は確かにこの場所にある。そこまではわかっている。しかし、本籍地までは閲覧の対象になっていない。ましてその戸籍を親族ではない他人が見ることはできないんですよ」

「でも家族の私なら……」

白鳥は軽く笑った。

「蘭さん、いくら一緒に住んでいるからと言っても、法律上はコナンくんの親族ではない。だから、蘭さんがコナンくんの載っている戸籍謄本を請求することはできないんですよ」

「お父さんは？ お父さんはコナン君の保護者なんだから」

「蘭さん、あなたはお父さんのこと、少し軽く見ていませんか？」

「え？」

「すべての事情を知ったうえで、コナン君を預かっているんですよ、

毛利さんはね」

「うそ」

蘭は、真剣に嘘だと思った。

「ひゃくしょん！」妙な咳をする小五郎。

「どうしたの？」

「あ、いや、鼻がむずむずして…風邪かな」

「ふふ…でもね、私、あなたを見直したわ」

「ん？ 何で？」

「一体いつの間に勉強したのかわって」

「ふん、俺は頭いいんだぞ」

「はいはい、それは誰よりもこの私が一番良く知っています」

「ま、これを機に、表だった韜晦はスッパリやめるさ」

「今まで韜晦してたの？ 本当？」

「ああ。俺が全てを知っているということ…残酷だろ、あいつに
つては」

「そうね、残酷だわ…蘭にとっても」

「そういうこった。だから俺は、何も事情を知らない間抜けな探偵
でなきゃならなかったんだ」

表情に鋭いものが走る英理。

「蘭にも本当の事を言うつもり？」

「コナンのことか？」

「まさか」

「ふむ…まだその時期じゃないだろ」

「そうね」

「これは俺とお前の背負った十字架…一生負い続けなければなら
ない、な」

小五郎は、グラスに残ったワインを飲み干した。

「いや、参考になりました」

白鳥は、立ち上がって手帳を閉じた。

「あの…」まだ話足りない蘭。

白鳥は微笑んでいた。

「焦ってはいけないよ、蘭さん」

「え？」

片手を上げて、白鳥は事務所を後にした。

すでに日はとっぷりと暮れている。蘭は釈然としないまま台所に向かおうとした。時計の針は七時をまわっていた。コナンの帰りが遅い。

「白鳥は何しに来てたんだ？」

はっとして振り返ると、いつの間にか小五郎がそこにいた。

「お父さん！」

「この間の事件のことか？」

「え？ ええ…」

「ふうん…」

小五郎はゆっくりデスクに座った。

「今日は大事なお客と外食じゃなかったの？」

「ああ、済ませてきたよ」

夕刊を広げる小五郎。

「蘭…」

「何？」

「司法書士の資格を取った」

「司法書士？」

「ああ」

「お父さんが？」

「そうだ」

「そ、そう」

「探偵業は店じまいだ」

「えっ？」

「英理の事務所の手伝いをするんだよ。あいつの事務所は人手がい

くらあっても足りないからな」

「それ本当！」

「ああ」

「じゃあ、じゃあ、お母さんと仲直りするの？」

「ま、そういうことだ」

「ほんとにほんと？」

「ああ」

「よかった！」

一転、大喜びの蘭。しかし、小五郎の顔は明るくない。

「でな、お前には黙っていたんだが、杯戸町に中古住宅を買った」

「それってもしかして…一緒に住むってこと？」

「当然だろう。一家三人でな」

「やったあ！」

狂喜する蘭をまったく無視するかのように、夕刊をめくる小五郎。

「…コナンはどうするのかな」

その瞬間、蘭は凍りついた。

「ま、まさかお父さん、コナンくんを追い出すって言うんじゃ」

「あいつにも気兼ねってもんがあるだろう」

「ちよつと、その言い方は何！」

「確かなのは、あいつは毛利家の人間ではない、ということ」

「何が毛利家よ。大名の末裔って言ったって分家の分家の分家のそのまた分家の…」

「蘭！」

いきなり飛んできた鋭い声に、蘭はぎくつとした。

「ここは、あいつにとって仮の住まい。遅かれ早かれあいつは親御さんのもとに…」

「うそよ！」

小五郎の言葉を遮った蘭。

「お父さん、知ってるんでしょ。コナンくんは、江戸川コナンに親なんかいないうてことを」

「どういう意味だ？」

「白鳥さんが言ってた。お父さんは、何もかも知った上でコナンくんを預かっているんだって」

「白鳥が？　…よけいなことを」

「お父さん、ほんとには知ってるんでしょ？　コナンくんが、新一だつてこと」

小五郎はくるりと椅子を回して蘭に背を向けた。

「それも白鳥から聞いたのか？」

「聞かなくなつて知つてたわよ」

「ほう」

小五郎はそのまま黙つて窓の外を見ていた。

二十秒ほどの沈黙。

「…答えて、お父さん」

「何を？」

「何をって、コナンくんのことよ」

ふん、と小五郎は笑った。

「お前は、自分の言つたことに自信がないのか？」

「変な事言つてごまかさないで！」

「白鳥から何を聞いたか知らんが、俺が知っているのは…」

くるりと振り返る小五郎。

蘭はぎよつとした。そこに、いまだかつて見たことのない父の顔があつた。

「…コナンが阿笠博士の親戚の子、という事だけだ」

蘭は背中に冷たい汗を感じたまま、ただただ黙つて見ていた。力ミソリのように切れる父の目を。

あの子がいる

一年B組の教室。

今日最後の算数の授業が終わって、子供たちはとたんに元気になった。

コナンと哀にとって、もっとも退屈な授業が算数であることは言うまでもない。哀は算数の授業中、英語のペーパーバックを読むのが日課である。

算数以外の授業は哀も一応真面目に聞いていた。彼女によると、それが労働者としての教師に対する彼女なりの誠意なのだという。ただ、算数の授業だけはどうにも苦痛で耐えられない。算数の教師も哀が授業を全く聞いていないことには気がついていたが、見て見ぬふりをしていた。抜き打ちで指名してみたところで、彼女はあらゆる問題に正確に答えるのだ。彼女は、算数はもちろんのこと全ての科目についてオール一〇〇点であって、誰の目にも授業の内容が彼女にとって退屈であろうことは容易に想像できた。そもそも教師たちは、彼女が私立の進学校へ行かずに公立小学校に通っていること自体、不審に思っているほどだったのである。

一方のコナンはと言えば、やはり算数の授業は無視しているいろいろな本を読んでいた。コナンもペーパーテストはオール一〇〇点かというところではなかった。さすがに算数はオール一〇〇点なのだが、国語などでは時にケアレスミスによる失点があった。本人いわく、

「あまりにも退屈すぎて、ついうつかりつてやつが出るんだよねあのことであるが、もちろん通知票の評価において大勢に影響するものではない。」

さて、当然とは言うものの、哀の通知票は全て「たいへんよくできました」であつた。しかるにコナンはと言えば、音楽以外は不動の「たいへんよくできました」なのであるが、音楽は「もっとがん

「ばりましょう」であった。

「コナンくん、博士の作った新しいゲーム、どんなものだと思います？」

光彦がそう言ったのを、コナンはぼおつとして聞いていなかった。

「コナン君？」

「え？ あ、悪い。何だつて？」

露骨に顔を歪める光彦。

「どうしたんです？ 何かあったんですか？」

「いや、別に。ちよつと考え事してたから」

「この間、博士が言ってた新しいゲーム、どんなものだと思いますか」

「あ、ああ、そういえばそんなこと言ってたな」

「ちよつと、しっかりしてくださいよ、コナンくん」

コナンの妙な様子に、哀と歩美はしっかり気がついていた。

阿笠邸。少年探偵団の面々はもはやお客さんではなく、自分の家のように勝手に出入りし、勝手に遊んでいた。

一階ホールに置かれた五〇インチディスプレイを前に、元太、光彦、歩美の三人は、博士自慢の新作格闘ゲームに熱中していた。

コナンはそつと三人の脇を離れ、二階へ上っていった。

コナンは二階の空き室になっている部屋に入ると、南に面した窓を開けた。西の空、今まさに沈もうとしてる太陽。赤く染まった空と雲。

「どうしたの？」

はつとして振り向くと、そこに哀がいた。

「灰原か…」

「元気ないじゃない。何かあったの？」

「そう見えるか？」

「ええ。一目瞭然よ」

「そつか…」

部屋を見回すコナン。

「それにしても、ここ、いい部屋だな」

「建物の設計上のコンセプトとしては住人の個室用、だそうよ」

「ここにするかな」

「え？」

「いや、毛利探偵事務所を出たら、ここに住まわせてもらおうかなって」

「何かあったの？ 彼女と」

その意地悪そうな声はわざとだ。やれやれのコナン。

「彼女と、ってなあ…一体、どこからそういう発想が出てくるんだよ」

「違うの？」

「違うよ。いつまでもおっちゃんの好意に甘えてるわけにいかねえだろ」

「でも、あそこに居候してるのは、組織の情報を得るためじゃなかったの？」

「ああ、最初はな。こんなに長引くとは思わなかったから…」

「だけど、好意に甘えるって言えば、ここだってあなたの家じゃないのよ」

「博士の好意に甘えて居候してるお前に、言われる筋合いなんかないと思うけど？」

「それはそうだけど、でも、知ってるんでしょ、博士が何者かってこと」

哀としては、意表を突いたつもりだったのだろう。

「全部は知る由もないが、少なくとも、突然この世に現れた六歳児の戸籍を、六年前にさかのぼって作れる人物だってことはな」

「それ、偽造したのだと思う？」

「いや、役所もそこまで間抜けじゃないさ」

「そこまで気がついていいるなら、どうして博士を問い詰めないの？」
「お前は問い詰めたのかよ」

「いいえ。私が博士に助けられて目を覚ましたとき、博士は私の素性を知っていた節があるのよ。それでだいたい想像はついたの。それに、仮にあなたという実例を知っていたにせよ、殺人を生業とするような組織に関係している女の言うことなんて、無邪気に信じる人がいるかしら？」

「お前の素性を知っていた…ふうん…」

「それは間違いないわ」

「そう判断してるお前が、博士を信頼しているのはなぜなんだ？」

「あなたがよく口にする『黒の組織』なるもの、それはもつと大きな組織全体のごく一部、あるいは断面の一つにすぎないってこと、こう言えばわかるかしら」

探偵モードに突入するコナン。

「ああ、少し考えればすぐにわかることさ。お前の言う、もつと大きな組織、ってやつが一枚岩でないってことも。というより、そもそも一つの組織として捉えること自体があまり意味がない。そして非常に広義に考えれば、博士でさえ組織の一員になっちまう、ってこともな」

「そう、やっぱり気がついていたのね」

「俺が食らった薬の効能、そして殺人をもいとわぬ秘密主義…始皇帝の昔から人間の欲望なんて変わってないのさ」

「ふふ…さすがは工藤新一、ってところかしら」

「暴力団なんか問題にもならない、プロの殺人集団を常時養える組織ってことは、政財官界の上のほうとつるんでるってことさ。だとしたら、その組織の求心力とは一体何か、経済的利権なんてありきたりのものであるはずはない。その上薬に関係してるとなりや…答えは一つ」

「そうよ。私が課されていた研究の究極の目的、それはまさに不老不死だった。私の周囲にいた研究者の誰一人としてそのものズバリは言わなかったけれど、言われなくなつて自明のことだったわ」

「不老不死か…出資したい金持ちは、世界中にごまんといえるだろう

な」

「ええ。でも、そこまで気がついていいるなら、気がついていいるんでしょ。もつと恐ろしい事に」

「恐ろしい？ …まあ、こいつを恐ろしいって言うのかどうかは知らねえが…政治家はもちろん官僚の上のほう、大企業のトップもみんなつるんでいいる。殺人をもいとわぬ秘密主義を、知らない善意の出資者なんて一人もいやしない。マスコミの会長や社長も、そしてもちろん、警察の幹部もな」

「へえ…私、あなたのこと少し甘く見てたのかもしれないわね」

「なんだよ、俺が単純な勧善懲悪だけの男だと思ってたのか？」

「ええ、正直なところ、思ってたわよ。治安を維持するはずの警察幹部が、裏で殺人を黙認してるなんて知ったら、少しはショックを受けるんじゃないのかなって」

「ちよつと違うだろ」

「え？」

「警察が殺人を黙認している、確かにその通りなんだが、全て、無条件に、というわけじゃない」

「どついう意味かしら？」

「さつきも言つたら、組織は一枚岩じゃないって。つまり複数の様々な組織…いやまあ混同しないように集団と言っておくが、ようするに多種多様数多くの集団が、不老不死という一つのキーワードでゆるやかに結びついていいるんだ。時には利害の対立や抗争をも抱えながら…」

哀は黙って聞いていた。

「お前を殺そうとしていいる殺人の実行部隊は、その部隊独自の規律規範で動いていいる。研究所を運営していた企業のトップの命令、というより依頼があつたからだ。しかしその一方で、お前や俺の存在を知って、殺さずに泳がしておこうとしていいる連中もいいる…そういう連中が警察のトップや役所にいいるってことだよ。おそらく、お前のいた研究所を運営していた帝国化学…」

帝国化学という名前に、ぎくりとする哀。

「…のトップは、一方では本来のお前、つまり姿の消えたシェリーの抹殺をジンたちが属する殺人集団に依頼し、他方では灰原、お前という突如この世に現れた少女の存在を警察や役所に通報していたんだ…まあ、もっとも、博士がお前の存在をしかるべき国の機関に報告したために、帝国化学に問い合わせが行った、ってことかもしれないねえがな」

「やっぱり気がついていたのね。あなたはずっと泳がされていたんだ、ってことを」

「ふ…情けねえ話だが、そのことに気がついたはお前がここに来てからだよ。考えてみりゃ当然だ。なにしろ俺たちは、若返りの妙薬の効果を示す生きた実例なんだからな。簡単に殺してしまうにはあまりにももつたないじゃないか。若返りや不老不死を切望する老人たちにとってはそれこそ希望の星に思えるだろうぜ」

本気で感心している哀。

「私、本当に、あなたのこと甘く見過ぎていたわ…まさか、そこまで気がついていたなんてね」

「もっと気がついてるさ。たとえば、毛利のおっちゃんが実は韜晦してるってことも」

「とうかい？ …建物が倒壊する、東海道五十三次、当会にご用の方は…」

「おい、ほんとに知らないのか、お前」

「冗談よ。でも私、正直に言えば、あなたは毛利小五郎という人を甘く見すぎている、と思ってたのよ」

「眠っている間に名推理を披露して自分は何も憶えていない、時には自分が今し方まで言っていたこととまるで正反対の推理を披露していた…なんてそんなこと、まともな人間が受け入れられるようなことじゃないだろ」

「ふふ…そうよね…ふふふ…」

哀は心から楽しそうに笑っている。その珍しい表情に、コナンは

目を見はった。

「なんだ、お前…そうやって笑ってれば結構可愛いじゃねえか」
「え…」

絶句する哀。顔はかすかに紅潮していた。

「あれ、コナンくんは？」

歩美は、ようやくコナンがいないことに気がついた。

「あれ？ さっきまでいたような気が…」手の止まる光彦。

「トイレじゃねえのか？」のんびりと言う元太。

「そういえば、灰原さんもいませんね…」疑惑を抱く光彦。
と、コナンと哀が二階から降りてきた。

「…あなた、それ、もつと勉強したほうがいいわよ」

「勉強ねえ…でもまあ俺、化学者になるつもりないし…」

「でも、毒物の知識は必要でしょ」

「だからと言って不斉合成反応の理解までは…ん？」

疑惑の視線の歩美。冷ややかな視線の光彦、元太。

「ど、どうしたんだ？」

「どこへ行ってたんですか？ 二人で」トゲある声の光彦。

「え？ ああ…ちよつと二階の部屋見てたんだよ」

「二階の部屋？」

「俺、毛利探偵事務所を出て、近々ここへ住むことになるから」

「ええー」

驚きの声をあげる三人。哀は、ふうとため息をついた。

夕闇迫る街。喫茶店ポアロの二階、毛利探偵事務所にコナンは帰ってきた。

「ただいま」

ところが、出迎えた蘭の表情が明るくない。

「おかえり、コナンくん」その声も沈んでいる。

「…どうしたの？ 蘭ねえちゃん」

ソファでは、小五郎が携帯電話を操作していた。

「コナン、話がある。まあ座れ」

小五郎はそう言うと、パチッと携帯電話を閉じた。珍しく真剣な表情だった。不安そうな蘭の表情も気になる。とりあえずソファに座るしかない。

「実は、司法書士の資格を取ったんだ」

「おじさんが？」

「まあな」

「すごいじゃない。試験、ものすごく難しいんですよ」

「司法試験ほどじゃないがな」

「でもこれで、仕事の枠が大きく広がるよね」

「ほう、結構難しい物言いを知ってるんだな、お前」

はっとするコナン。未だかつて見たことがない小五郎の視線。

「や、やだなあ、おじさん。先週の左文字で、被害者のおじいさんが言ってた台詞だよ」

「…ああ、なるほど…ふ…」

今日の前にいる男は、いつも見慣れているあの毛利小五郎とは別人だった。蘭の様子も明らかにおかしい。

「ど、どうしたの？ 司法書士の資格を取ったってことは、お祝いすべきことなんですよ」

小五郎はコナンの問いには答えなかった。

「これを機に、探偵事務所をたたむことにしたんだ」

「え…探偵、やめちゃうの？」

「まあな。これからは、英理の事務所を手伝うことにしたんだ」
それを聞いて、ますます蘭の表情が不可解に思えた。思わず蘭の顔を見る。

「よかった…んだよね…蘭ねえちゃん…」

しかし、蘭の表情はまるで何かを恐れているようだった。これは一体、どうしたのか？

「杯戸町に中古だが家を買った。で、引っ越すことにしたんだ」

コナンは瞬時に事態を把握した。

「そっか…よかったね。じゃあこれから一家三人水入らずの…」

「コナンくん！」

蘭は叫んでいた。続けて何を言おうとしているか、痛いほどわかる。

「一緒に来るわよね、コナンくん」

「蘭ねえちゃん、それはだめだよ」

「どうして？ コナンくんはまだ子供だもの、遠慮なんてすることないのよ。そうでしょお父さん」

「蘭、まあ落ち着け」

「だいたいコナンくん、あなたここを出てどこへ行くつもりなの？」

「大丈夫。博士の家にお世話になるよ」

「だめ！ それだけはだめ！ あの子がいるじゃない！」

コナンを見る目

「だめ！ それだけはだめ！ あの子がいるじゃない！」

一秒たりとも予想していなかった言葉。

「あ、あの子？」

蘭ははっとしてうつむいた。顔は真っ赤だった。

そんな蘭の顔をのぞき込む小五郎。

「あの子って誰だ？ …ああ、あの灰原哀って子か。しかし、何だお前？」

ますますうつむく蘭。小五郎はにやりと笑った。

「ははあ、お前、まさか…」

蘭はキツと顔を上げた。

「やだ、変な想像しないでよね」

軽く息を整える小五郎。

「ま、なんだ、蘭の言うとおり俺たちに遠慮することはないぞ。もう家族も同然じゃないか。英理もお前なら大歓迎だと言ってたからな。何も心配することはない。こいつは建前でもお世辞でも何でもないぞ。本気で言ってるんだ」

「そうよコナンくん、一緒に引越しましょ。ね」

「うん、ありがとう…でも僕は、今回おじさんたちが引越すことになってなくても、近いうちにこの家から出るつもりだったから」

その言葉に蘭は小さく首を横に振った。

「どうして…どうしてなのコナンくん」

「だって…いつまでもおじさんの好意に甘えているわけにはいかないよ」

「こんなお父さんの好意なんてぜえんぜえん気にすることないのよ、ほんとよ」

びしっと小五郎を指さす蘭。

「こんな、ってなあ…」

大げさにあきれて見せる小五郎。

「ね、だから、一緒に引越しましょ」

コナンの両肩に手を置く蘭。コナンは、意識して子供の顔を作り、困って見せた。

「それはできないよ、蘭ねえちゃん」

「どうして、どうしてなの、コナンくん！」

泣き出しそうな蘭。

「蘭、あんまり無理を言うもんじゃないぞ」優しくに言う小五郎。激しい勢いで小五郎に顔を向ける。

「お父さん！ お父さんは、まさかコナンくんに来てほしくないわけ？」

「そんなこと言っていないだろ。だがな、コナンにもコナンの考えや事情ってものがあるだろう」

「コナンくんは単に私たちに遠慮してるだけよ。そうでしょ、そうよね、コナンくん？」

同意を求める視線、それはコナンにとって辛いものだった。答えは決まっているが、とっさに言葉が出ない。

「僕、僕は……」

そのとき電話が鳴った。蘭のほうに近かったので電話を取った。

「はい、毛利探偵事務所……ああ、阿笠博士……え、コナンくんですか……ちよっと待ってください。コナンくん、阿笠博士からよ」

受話器をコナンに向ける蘭。両手で受け取るコナン。

「はい、もしもし」

『おお、し……コナンくん、実は、御両親から連絡があつてな。至急わしの家まで来てくれんか』

「博士の家に？ これから？」

『じゃ、待っておるから』

ガチャツと切れる電話。

「あ、ちよっと、博士！ ……切れちゃった……」

「どうしたの？ なんの話？」

「う、うん…なんか至急来てくれって」

小五郎が立ち上がった。

「ま、さっきの話は別に即決しなきゃならん話でもあるまい。じっくり考えることだ。とりあえず博士の家に行つてこい」

「え、う、うん…」

「大丈夫？　コナンくん…私が送つて行つてあげようか？」

「だ、大丈夫だよ」

「で、でも…」

デスクに座る小五郎。

「蘭、一人で行かせてやれ」

蘭が小五郎の方を向いている間にコナンはスケボーを持った。

「じゃ、僕行つてくるね」

コナンは駆け足で事務所の外へ。

「遅くなりそうだったら電話するから」

阿笠邸。博士はいつものようにソファの上に座っていた。

「おお、来たか新一」

「で、話つてのは？　父さんたちから連絡つて？」

「ああ、いや、あれはお前を呼び出す口実じゃよ」

「口実？」

「毛利くんから、五分後にコナンを呼び出してくれとメールが来るのう」

「メール？」

小五郎はずっと事務所のソファに座っていた。メールを発信する暇など…そこではたと気がついた。話に入る前に携帯電話からメールを打っていたのだ。話の展開をあらかじめ見越した上で。

「で、何があつたんじゃ？」

コナンもソファに深く座った。

「おっちゃんからのメールには何と？」

「いや、適当に呼び出してくれ、としか」

「ふうん…」小五郎の機転に少し感心したコナン。

「蘭ちゃんと喧嘩でもしたのか？」

「…何でそうなるんだ？」

「電話に出た蘭くんの声が涙声に聞こえたのでな」

「おっちゃん司法書士の資格を取ったんだよ。それで、探偵事務所をたたんで杯戸町へ引っ越すことにしたんだそうだ」

「ほう、司法書士か…すると、ひょっとして英理さんと…」

「ああ、やりなおすんだそうだ」

「なるほど…そういうことか」

「そういうことか？」

「蘭くんに、一緒に引っ越そう、とか言われたんじゃない？」

「当たり前」

「やはりな…蘭くんとしては当然そう言うじゃろうな。だがお前としては、一緒に引っ越すわけにはいかない」と

「当然だろ。そんなこと、できるわけがない」

「常識的にはなあ…しかし、蘭くんのことを思うと…」

「いや、いい機会だから出るよ。もともとあの家でこんなに長くお世話になるとは思ってたから…」というわけで、前に頼んだとおり、この家の部屋を一室貸してほしいんだけど…」

「ふむ、わしとしては全然かまわんが」

「ありがとう、博士」

コナンの表情によろやく明るさが戻った。

「ところで、灰原は相変わらず地下室に？」

「いや、今台所でケーキを焼いておる」

「ケーキ？」

台所では、ちょうど哀がオープンの扉を閉めたところであつた。そしてオープンのダイヤルを回す。オープンをのぞき込む表情はとも楽しそうであつた。

「楽しそうだな」

哀は突然の来訪者に本気で驚いた。

「く、工藤くん…来てたの？」

「まあな」

「どうしたの？　こんな時間に」

オーブンに目を戻す哀。

「今日言ってた引越しの話だけど、予想以上に早くなりそうだし、ふうん…じゃあ、ほんとに引越してくるの？」

「ああ。博士には悪いけど、他に頼る人がいないから」

「隣に自分の家があるのにな」

「まったく…しかし、監視装置付けてから誰も侵入した形跡はない、家の周囲にも異状はない、とは言ってもいつ何時やつらが…」

「そうね。あそこに住むのは危険すぎるわ」

「で、お前の意見は？」

哀はオーブンをのぞき込んだまま。表情は見えない。

「意見って？」

「俺がここへ引越してくることだよ」

「博士がいいって言うなら、私がとやかく言う話じゃないでしょ」

「筋としてはそうだけだよ」

「なら、私に意見なんか求める必要ないじゃない」

「いやまあ、まったくその通りなんだけど、その、やっぱりお前にも許可と言うか、同意と言うか…」

哀は振り返ってコナンのほうを見た。その目は真剣そのものだった。

「な、なんだよ」

ずっと表情が緩む。

「…別に。でもいいの？　彼女のこと」

「蘭のことか…しかたないさ」

「しかたないですませてでもいいの？」

「いいも悪いも…それ以外に選択肢がないんだ」

「そう…やさしいのね、工藤くん」

「やさしい？　どういう意味だ？」

「だって、あなたは一刻も早く工藤新一に戻りたいんでしょうに、私をせかすような言葉を一言も言わないから…まるで、もう元に戻れないという覚悟を決めたみたいに」

哀の思わぬ言葉にコナンは一瞬怪訝な表情をしたが、すぐにかすかに微笑み、

「そういう意味か…」

とだけ言って、続く言葉を何か呑み込んだ。

哀は、黙ったままコナンの言葉を待った。

「これ以上、俺のことで蘭を苦しめるのは忍びない」

コナンが複雑な表情を抱えながら毛利探偵事務所に帰ってくると、事務所前にタクシーが止まっていた。

蘭と小五郎が急いだ様子で建物から出てきた。

「どうしたの、おじさん？」

「おお、コナンか。ちょうどいい。お前も乗れ」

「え？」

「事件だ」

車中で小五郎は事件のことを語り出した。

「お婆さんの事務所で！」

「ああそうだ。遺産相続の件で相談にきていた客の一人が、突然苦しみだして死んだらしい」

「毒なの？」

「まだわからん」

妃法律事務所に三人が到着したときには、すでに警察も到着していた。

事務所に入ってみると、老婦人が応接室で苦悶の表情のまま机に伏して息絶えていた。

「あなた…」

英理が厳しい表情で小五郎を出迎える。

「これは…しかし大変だったな」

「お母さん…」

「蘭も来てくれたのね…ごめんなさい、こんな時間に」

「青酸カリだね」

コナンはしっかりと遺体を観察していた。遺体は血色が良く、しかも口からはかすかに特有のアーモンド臭がしている。青酸カリ中毒特有の状況であった。

「ちよつとコナンくん」止めようとする蘭。

ところが小五郎は、蘭に向かって手を差し出した。

「好きにさせてやれ」

えつと驚く蘭、コナンも驚く。

「ただし、警察のじゃまにならんようにな。それと、こぼれてるお茶には絶対触るなよ。この状況じゃ…まあわかってるな、お前なら」

「う、うん」小五郎の反応に戸惑うコナン。

そこへ、高木を従えてやって来る目暮警部。

「おお、毛利くん、やっぱり来とったか」

「家族ですから、当然のことです」

小五郎がそのようなことを言うのは珍しい。普通なら蘭が反応しそうなものだが、場合が場合だけに気がついていないのだろう。

「下で報告を聞いたが、青酸カリによる中毒死のようだな」

「そのようです」

小五郎と目暮の視線が英理に向く。

「被害者は、苦しみ出す直前にお茶を飲んだそうですな」

目暮は抑制の効いた口調で英理を問いたす。

「はい、そうです」

英理は厳しい表情で答えた。

「そのお茶を淹れたのは貴女だと…」

「はい」

鑑識係員が部屋に入ってきた。

「警部、被害者が飲んだお茶から青酸カリが確認されました」
さらに厳しい表情になる英理、そして小五郎。驚きの表情を隠さない蘭。

真正面から英理を見据える小五郎。

「これは、あくまで念のために聞くんだが、お前が毒殺した、なんてことはないよな」

「もちろんよ」落ち着いた口調で答える英理。

「状況を説明してくれないか」

「その前に、防犯ビデオ見てくれる？」

「おお、そうだったな」

「防犯ビデオ？」驚く目暮。

「ええ。人を性悪説で捉えるのは本当は心苦しいのですが、この商売にはいろいろありまして」

見上げると天井に半球型のミラーガラスが取り付けられていた。

「なるほど。では、さっそく見せていただけますか」

ビデオ機器は、英理の執務室脇の書庫を兼ねた小部屋に設置してあった。

応接室を撮影していたテープを再生する英理。

被害者が英理に案内されて入って来る。

そしてソファにテーブルを挟んで英理と向かい合って座る。

軽い挨拶の後、英理が立ち上がってフレームから消える。

「これは、どこへ行かれたのですか？」

目暮は尋問調にならないように質問した。

「お茶を淹れにです」

「秘書の方は？」

「たまたま所用で外出していて私一人だったものですから」

被害者はじつと座っている。しばらくして手帳を取り出しページをめくりだす。

そこへお盆を持った英理が戻ってくる。

被害者の手前に茶碗を置く英理。

被害者が手帳を見ながらしゃべり出す。

「被害者の相談というのは何だったのですか？」

「遺産相続の件です。ご主人が亡くなられたのですが、生前、自筆遺書を残されていたとのことで…」

「ほう」

やがて被害者がお茶を手に取り、一口飲む。

手帳をしきりにめくる被害者。

コナンの目に浮かぶ疑惑。その目を見つめる蘭。

突然苦しみだす被害者。そして頭がテーブルの上に落ちた。

「ねえ、この人なんで手帳ばかり見てたの？ 先生に見せたいのは自筆遺書のほうじゃないの？」

大人の間に首を突っ込んでいたコナンがそう言った。小五郎がコナンを見る。しまった、とコナンは身構えた。しかし、小五郎は微笑んでいた。

「お前の言いたいことはこういうことか。つまり、手帳に毒が塗ってあって、それが手に付き、その手で茶碗を触ったから…」と

いつもならコナンを追い払おうとする小五郎がコナンの意見を真面目に受け止めている。コナンは拍子抜けした。

「なるほど。確かにあり得る線だな」

目暮もコナンを追い払おうとはせず、そのまま後ろを振り向いた。

「トメさん！」

「はい」

被害者の脇にしゃがんでいたトメさんが立ち上がった。

「被害者の手や指先の青酸反応は？」

「それが、崩れ落ちる際にお茶がこぼれてしまい、広い範囲に広がってしまっています。両手ともそのこぼれたお茶を浴びていますので…」

「そうか…で、お茶に含まれていた青酸カリの量は？」

「簡易検査ですが致死量に充分な量と思われます。これはお茶に直接混入されたものと考えるのが自然でしょう。指先に付着したもの

ということでは説明がつきません」

「手帳もお茶をかぶっているな」

「ええ。ここに」

床に落ちた手帳は、こぼれたお茶を吸って分厚くふくらんでいた。
「手帳に付いていた比較的量の多い青酸カリが、お茶に溶け出した可能性もあるのでは？」

「いえ、机の上でひっくり返っていた茶碗からも反応が出ていますので、青酸カリはこぼれる前からお茶に入っていたことになります」
「なるほど」

コナンは頭脳フル回転モードに突入していた。

（おばさんが人を殺すことなど考えられない…となると、第一に考えられるのは自殺。被害者がめくっていた手帳、あれに青酸カリが塗ってあったという殺人、という線が第二…だが、ひっくりかえっていた茶碗の中からも青酸カリが検出されたということは、お茶に混入していた青酸カリは、手帳に塗ってあったものが溶け出したのではない…）

蘭は、新一を見ているのだった。コナンの表情、仕草、雰囲気、その全てが新一。見間違えるはずもなかった。そして、小五郎も、目暮も、高木もトメさんも、皆、コナンを見ていた。

泳がされる少年

「母さん！」

ばたばたと六十前後の男女が駆け込んできた。

「警部、被害者の家族を……」

後ろから、彼らを連れてきたらしい制服警官が追ってくる。しかし、男女は居合わせる人々をかき分けるように被害者の遺体に駆け寄った。

「か、母さん……」

息子は、母の遺体、その苦悶の姿に絶句した。

「な、なんで……なんでこんなことに……」

女性が遺体に手を伸ばそうとした。

「触るな！」

叫ぶコナン。

「こぼれたお茶に毒が入ってるんだ」

「ど、毒？」

伸ばそうとした手をあわてて引っ込める女性。

「ど、毒って、一体……」

狼狽のあまり声が最後まで出ない息子。女性はぶるぶる震えて後ろへしりもちをついた。

「失礼ですが……」

こういう場面、声はかけにくいものだ。しかし目暮はつとめて冷静に言った。

「森田春江さんの、ご家族の方ですか？」

息子はゆるゆると声の主のほうへ顔を向けた。

「そうです。長男です」

「失礼ですがお名前は」

「あ、ああ、森田です。いや、高光です……しかし、毒って、いったいどういことですか」

「こちらの方は？」

へたり込んで、声も出ない女性のほうへ視線を送る目暮。

「妹の千里です」彼女に代わって答える高光。

それを確認してから、目暮は、告げねばならぬことを告げた。

「春江さんが飲まれたお茶に、青酸カリと思われる毒物が混入されていた」

「そ、そんな！」

高光は再び絶句し、それから、気がついたように英理に視線を向けた。

「ま、まさか妃先生が…」

千里も震える首を英理の方へ向ける。

英理は、何とも答える言葉がない。しかし、やましいことは何もないのだ。

「いえ、まだそうと決まったわけではありません」

苦しい立場の英理に代わって目暮が答えた。

高光は視線を英理から外した。

「そ、そうですね…妃先生が母を殺すなんて…そんな、ばかなことが」

「妃さんとはお知り合いですか？」

高光が落ち着いたと見るや、すかさず質問する目暮。

「ええ、父が先生のお世話になって以来ずっと…」

「先日亡くなられたというお父上ですな」

「そうですね…父は三年前、家に侵入してきた泥棒ともみ合いになり、その泥棒を死なせてしまったんです」

「死なせた？」

「私から説明しますわ」

英理がようやく口を開いた。

「お父上、森田宗太郎さんは三年前のある日、自宅寝室で昼寝をしていた。そこへ、留守宅と勘違いした窃盗目的の男が侵入。物音に気付いて起きてきた宗太郎さんともみ合いになった。そして、もみ合

っているうちに台所に入り、侵入者が置いてあった包丁で宗太郎さんを刺そうとした。しかし、宗太郎さんが逆に奪い取り、侵入者を刺してしまった……」

「なるほど。正当防衛、というわけですね」

目暮はうなずいた。しかし、英理は首を横に振った。

「それが、刺された侵入者は病院に収容されてから亡くなったのですが、亡くなる直前、先に包丁を持ったのは宗太郎さんだと、そう証言したんです。しかも、逃げようとする自分を追いかけてきて刺したのだと」

「ほう」

「侵入者の証言がかなり具体的だったのに対し、宗太郎さんの証言は当初、必死だったので覚えていないと言うなどかなり曖昧で……結局、宗太郎さんの行為は過剰防衛だと検察は判断し、傷害致死容疑で起訴されたんです」

「宗太郎さんの弁護を妃さんが？」

「ええ。争点は包丁を先に持ったのはどちらか、侵入者が宗太郎さんを刺そうとしたのかどうか、という点でした。亡くなった侵入者の、病院における簡易事情聴取の証拠能力も問題になりました」

「なるほど。それで、判決は？」

「包丁に残っていた指紋の付き具合から、侵入者のほうが長く包丁を持っていた可能性が高い、という点と、死亡した侵入者が盗みのために森田邸に忍び込んだという事実は動かない、ということで、判決では正当防衛が認められて、宗太郎さんは無罪ということに」

「ふむ……」

高光が口を開いた。

「ところが母は、あれは正当防衛ではなく、父が最初から殺そうとしたに違いない、と言っていたんです」

「ほう」

「いったいどういうことですか？」

それまで黙って聞いていた小五郎も思わず声をあげた。コナンの

目に浮かぶ疑惑。

目暮は落ち着いて質問した。

「殺そうとした、とは穏やかではありませんな。そう思う根拠について、春江さんは何かおしゃっていませんか？」

「いえ、何も。ただ、その、父は、うるたえたり恐怖にかられると、我を忘れて手当たり次第に暴れるような人だったので…」

あごに手をやる目暮。

「なるほど。お父上の性格をよくご存じの春江さんは、お父上の行為は過剰防衛だったに違いないと、そう言いたかったんですね」

「ええ、おそらく。ただ、特に父が亡くなってからなんですが、まるで吐き捨てるように言っていました。『何が正当防衛よ』とか『最初から彼を殺そうとしたのよ』と…それも一回や二回じゃありません。しかも本当にきつい口調で…」

(彼?) 目を細めるコナン。

当然、目暮も同じことに気がついている。

「高光さん、春江さんはその侵入者をご存じだったんですか？」

「いえ、そんなはずはないと思いますが」

「ふむ…」

目暮は、もちろんコナンも、これが事件解決の糸口だと直感した。

翌日、帝丹小学校。コナンは授業中何度もあくびしていた。おまけに本日最後の授業は国語、しかも漢字の練習だったから、余計に睡魔が襲ってくるのだった。

そして、待ちかねた終業のチャイムが鳴った。

「…はい、今日はここまで」

小林先生が宣言する。ぱあっと教室全体の空気が軽くなった。

「起立、例」

日直が最後のいの字を発つする直前から、教室はにぎやかになった。

コナンは腕を伸ばして大あくびした。

「どうしたの？ 寝不足？」コナンの顔を覗きこむ哀。

「ん…ああ、ちょっとな。ゆうべ事件があつて…」

「何何！」首を突つ込む歩美。

「どうしたんですか？」

光彦は冷静な口調でそう言うが、目は好奇心に輝いている。

「事件つて何だよ、コナン、教えるよ」元太は何事も一直線。

コナンは、露骨にやれやれという顔をして立ち上がった。

「残念だけど、もう解決したよ」

「それで、どんな事件だったんですか？」

光彦の言葉はなおも冷静だが、その目はきらきら輝いていた。こういう子供の好奇心を拒否するのは心苦しいが…

「悪い。今日はちよつと博士と灰原に急用があつてな」

「え？」

もちろん、哀は何も知らない。

「というわけで、灰原…」じつと目を見るコナン。

哀は納得したように首を縦に振った。

「ええ。じゃ、行きましようか」

コナンと哀は素早くランドセルに教科書やノートをしまつと、二人して立ち上がった。

「じゃ、悪いけどまた明日な」

「さよなら」

二人は並んで、さつさと教室を出て行った。

コナンと哀の視線による会話を見せ付けられて、三人は割り込むタイミングを失っていた。

「な、何、今の？」まず最初に声をあげた歩美。

「うーん…これは、何か重大な秘密がありそうですね」腕を組む光彦。

「よし、尾行しよう！」

元太の単純な意見が、三人の結論になった。

米花町近隣では一番大きなショッピングセンター。ぼちぼち夕方の買い物客が増えてくる時間帯。ベビーカーを押した母親。横に並んで歩いてきたコナンと哀は、とっさに縦列になって進路を空けた。二階テラスのテーブル席も大方埋まっていたが、ちょうど真ん中あたりに空きがあった。向かい合って座るや否や、哀が笑いを含んだ声で言った。

「つけて来てるわよ」

哀の肩越しに建物の太い柱が見え、そこからちらちらと歩美や光彦の姿が。

「やれやれ」

コナンは正面の哀に視線を向けたまま、苦笑いしてみせた。

「で？ 急用って何なの？ この間の続きじゃなさそうね」

「ああ。実は、お前に調べて欲しいことがある」

ランドセルからアルミホイルの小さな包みを取り出した。中にはポリ袋に入った小瓶。化学実験などで用いられる密閉瓶だった。中にかすかに黄色を帯びた液体。

「それは何？」

「お茶。ただし、青酸カリ入りの」

哀の目がとたんに陰しくなった。

「事件現場から持ってきたのね」

「ああ」

やれやれと、軽く手を広げる哀。

「危ない事するわね。で、何を調べて欲しいの？」

「含まれている青酸カリが、五十年以上前に合成されたものかどうか、わからないか？」

「五十年？ …本気で言ってるの？」

青酸カリは固体の場合、空気中の二酸化炭素と水に反応して炭酸カリウムとシアン化水素に分解されていく。気密性の高い密閉瓶に入れていても長期の保存は困難なのだ。

少年探偵団の三人は、二人を遠くから見ているしかなかった。

「何話してるのかな？」

「深刻な様子はありませんねえ……」

「この間言ってた、引越しの件じゃねえのか？」

「……被害者は満洲からの引き揚げ者でな、駆けつけてきた息子の話によると、新京から大連に逃げる際、青酸カリを持っていたというんだ」

「避難民に自決用の青酸カリが配られたって話は聞いたことあるけど、でも、そういうことなら密閉瓶に入れて保存なんかしてなかっただろうし、量だつてごく少量。とくに全部分解してるわよ」

「いや、それがな、被害者は新京の大病院で薬剤師をやっていたんだそうだ」

「ふうん……つまり、病院から青酸カリを持ち出して避難したつてわけね。それも瓶ごと。そして青酸カリの保存法も、もちろん知っていたと」

「たぶんな。もつとも、この話をしてくれた息子にしたところで、母親からは、青酸カリを持って逃げた、という話を聞かされていただけで、実物を見てないらしい。それと、日本に帰ってきてからはずっと米専業農家の主婦。薬関係の仕事はまったくしていなかったそうだ」

「ようするに、農家なら比較的簡単に手に入るであろう農薬をあえて使わず、満洲から持ち帰った保存状態の良い青酸カリを使って、わざわざ妃弁護士に疑いがかかるようにして自殺したと、それがあなたの描いているシナリオってわけね」

「ああ。まだ確信も持てねえし、証拠も何もないがな」

「わかつているとは思うけど、このお茶から炭酸カリウムが多く検出されたとしても、そのことをもって五十年間良い状態で保存されてきた青酸カリだったと、断定することなんかできないわよ」

「俺が分析を頼みたいのは不純物のほうさ」

哀は小さくため息をついた。

「私も、青酸カリの合成法、その歴史的変遷について詳しく知ってるわけじゃないけど、よほど特徴的な不純物が出ない限り不可能でしょうね。たとえば、今は完全に廃れてしまった合成法の不純物とか」

「断定が難しいのはわかってる。念のために頼んでるんだ」

哀は額に手をやって、それからコナンを見た。

「ところで、その奥さんに確かな動機はあるの？」

「そいつもまだはつきりとはわからないんだが、おそらく亡くなった旦那の裁判だろう。妃先生が弁護を担当してたんだ」

じれったい少年探偵団の三人。

「ああっ、くそっ、何話してるんだよ」

「深刻じゃないけど真剣、って感じですねえ」

「こうなったら、突撃よ」

「突撃って、ちょっと歩美ちゃん？」

「お、立ち上がったぞ」

「わかったわ。一応調べてみましょう。でも、過大な期待は持たないでよ」

「ああ、わかってる」

哀は受け取った瓶をしげしげと見た。

「それにしても、よくばれなかったわね」

「ん？」

「警察や毛利探偵によ。だいたいこれ、スポイトで回収したんですよ。スポイトなんかどうしたの？ いつも持ち歩いてるの？」

「…ああ、それなんだがな…どうやらばれてるらしい」

「え？」

「ばれてるってのは俺の正体が、だよ」

哀はぎよっとした。

「この瓶は鑑識のものだし、使ったスポイトも鑑識のものだ」

「ちよつと、それどういうこと？」

「どうぞお使いください、ってな感じで転がってたのさ。ちよつと
うまい具合に大人たちの死角になる位置に」

コナンは不敵な笑みを浮かべていた。

「昨日に限っておっちゃんも目暮警部も俺を追い払おうとはしなかつた…泳がされてるって実感がわいてきたぜ。」

聞いてもらえる人

事件から二日目の朝も、小五郎は事務所にいなかった。

蘭とコナン、二人だけの朝食。

「おじさん、いつ帰ってくるの？」

「さあ…お母さん、逮捕こそされてないけど、重要参考人として警察の監視下にあるし…」

「大丈夫だよ。おばさんが人を殺すわけないじゃない」

「それはそうだけど…お茶に毒を入れられたのは、お母さんしかないんだから…」

つけっぱなしのテレビでは朝のニュースをやっているが、妃法律事務所の事件はまったく触れられない。テーブルの上の新聞。朝起きた蘭がまっさきにめくったのであろう。

（テレビも新聞も報じていない、か）

疑問に感じながらも、コナンは自覚していた。その疑問に深入りするよりも、今は自分にできることをするべきだ、ということ。

コナンがいつものように学校へ向かう道を歩いていると、交差点角の、まだ開店していない商店のシャッター前に哀が立っていた。

コナンは駆け足で横断歩道を渡った。

「おはよう」

哀のほうが先に挨拶した。

「ああ、おはよう。わざわざ待っててくれたのか？」

「大した時間じゃないわ。気にしないで。分析、できたわよ」

「さすがは灰原。仕事が早い」

学校に向けて歩き出す二人。

「結論から言うと、炭酸カリウムがある程度の量検出されたわよ。混入された青酸カリ由来のものと考えて間違いない」

「ってことは…」

「そう、使われた青酸カリは新鮮なものじゃなかった。そして、可能性のある不純物は、与えられた試料の量という制約はあるけど、何も検出できなかった。元々相当純度が高いものだったんでしょね。つまり、犯罪でよく使われる工業用ではないということ」

黙ってうなづくコナン。

「もちろん、五十年前のものだと断定できる材料は何も出なかったということよ。残念ながら」

「ま、そうだろうな。しかし、俺の推理を否定する材料も出なかったってことだ」

「そこまではいいとして、この後どうするつもりなの？」

「動機のほうを固めようと思う。土曜日に森田さんの家に行って、事情を聞いてくるつもりだ」

「小学生が家に押しかけたって、門前払いされるだけでしょ？」露骨にあきれ顔の哀。

「大丈夫。昨日、毛利小五郎が電話したんだ。コナンが行くのでよろしくってな」

くすつと哀は笑った。

「そんな簡単な話で納得するかしら？」

「『コナンが家内の潔白を証明するんだと言って聞かないんですよ』とか何とか言ったら、快く引き受けてくれたよ。森田さんは、そのへん柔軟というか、懐の深い人だから。事件当日も俺の質問に、こちが恐縮するくらい真摯に答えてくれたからな」

「大人を騙す巧みな話術。さすがね」

「人聞きの悪いこと言うなよ。せめて、大人をその気にさせる、と言ってくれ」

「言葉を変えたところで実態は一緒でしょ？ 事実騙してるんだし」

「身も蓋もないこと言うなよ」げんなりするコナン。

「ところで、毛利探偵のほうはいいの？ 勝手に声使って」

「おっちゃんは全て知ってるよ。俺が何してるかなんて」

やれやれと肩をすくめて見せる哀。

「いずれにせよ、小学生のやることじゃないわね。もう警察も動いているんだし、警察に任せておけばいいじゃない…って気もするけど？」

「妃先生が殺したっていう明確な証拠なんて出るはずもないし、動機もまったくない。起訴までは行かないにしても状況が状況だ。在宅のまま送検はされるだろう」

「そうなると不起訴処分。最悪の場合は起訴猶予処分ね」

「ああ…どちらにしたって、弁護士としてはダメージがでかい。だから、自殺ってことを何としても立証したいんだよ、俺は」

「その心意気は理解するけどね…そうそう、例の写真は？」

「ああ…」

歩きながら話していた二人は、もう学校の正門まで来てしまっていた。

「おっと、続きは昼休みってことで」

「そうね」

歩美が、そして光彦が、すぐ後ろまで近づいていたことに、二人は気がつかなかった。

一時間目と二時間目の間。歩美と光彦は廊下の隅のほうで小声で話していた。

「光彦くん、コナンちゃんと灰原さん、何かあったのかな？」

「うーん…何だか急に親しくなった、って感じですねえ」

「親しく？」

「ええ。元々、あの二人の話のレベルは合っているって感じでしたけど…」

「話のレベル？」

「そう。今朝の二人の話、良くは聞き取れなかったんですが…小学一年生の会話じゃないですよ、あれは」

「うん。難しそうなお話だった」

「いずれにせよ、何か事件に関係あることは間違いありません」

「少年探偵団の出番だよな」

光彦は小さくうなずいた。

「そうです。少年探偵団としては、二人の抜け駆けは認められません」

二時間目のチャイムが鳴った。

昼休み、さっさと給食を食べ終わったコナンと哀は、屋上に上がった。

封筒から写真のコピーを取り出すコナン。小五郎が机の上に放り出したままだったから、コピーするのは簡単だったのだ。

「これだ。でも、どうして被害者の写真を？」

目をかっと思開いて苦悶の表情のまま止まった被害者の顔。普通、小学生が見るようなものではない。

哀の目が細く険しくなった。

「ひょっとして、と思ってたけど、やっぱり」

「何かわかるのか？ 写真見ただけで」

「ええ。この人、ガンだったのよ。それも末期の」

「何でそんなことがわかるんだ？」軽く驚くコナン。

「わかるのよ。ガン患者の顔、特に末期の患者には、ある種独特の雰囲気があるから。口では説明しにくいんだけどね」

「…まるで、ガン患者を見慣れてるって感じだな」

「ええ、見慣れてるわよ。ざっと百人以上見てきたから」

「何でまた？」

哀はフェンスに手をかけ、遠くを見やった。

「実験体としてね…」

コナンは少し考え、恐るべき想像が頭をよぎった。

「じ、実験体って、おい、まさかお前がいた研究所って…」

「心配しないで。皆、自ら志願してきた人達だから。実験体になるかわりに、遺族にそれなりの報酬を支払うという約束でね。三十代四十代の男性が多かったわ」

「そんな…」

「人道に反する行為だったのはわかった。でも、彼らの存在が医学、特に薬の分野において…わかるでしょ」

「ナチスの強制収容所や、七三一部隊のようなことが、今も堂々と行われているってことか！」

「ええそうよ。マスコミが報道しないだけで、こんなこと、秘密でも何でもないわ」

コナンは哀を睨みつけた。がすぐに視線を落とした。

「…いや、まあ、お前が悪いわけじゃねえよな…」

コナンは顔を上げて哀を見た。その背中姿は、紛れもない小学一年生の女の子だった。だからこそ余計に、背負うものの恐ろしさがひしひしと伝わってくる。

コナンは少し無理に笑顔を作った。

「あ、あのさ…」

「心配しないで」

振り返った哀は、意外にも明るい顔だった。

「こんなこと、聞いてもらえる人がいるだけでも、私は助かってるんだから…ありがとう、工藤くん」

それはあまりにも予想外の言葉だった。とっさに返す言葉が出てこなかった。

「さ、教室に戻りましょ。私たちの行動が気になってしかたない人たちがいるみたいだし」

屋上へのドアは半分開いていた。

放課後、別に示し合わせたわけでもないが、コナンと哀が同時に立ち上がった。すかさず少年探偵団の三人がさっと二人を取り囲んだ。

「ど、どうしたんだ？」驚くコナン。

哀は平然としたまま、対応をコナンに押しつけている。

「聞かせてもらいますよ」コナンに迫る光彦。

「な、何を？」

「コナンくと灰原さんが調べてる事件のことですよ」

「事件って？」

「とぼけないでください。コナンくんは灰原さんに話してたじゃないですか。弁護士としてはダメージがでかい、とか、自殺を立証したい、とか」

「ああ、いや、あれはだな……」

「とにかく、聞かせてもらいます」

「……わかったよ。それじゃ、ここだと何だから、ショッピングセンターにでも……」

元太が残念そうな顔をした。

「ちええ、俺、つきあえねえや」

「どうかしたんですか？」

そもそも言い出したのは元太じゃないか、と言いたげな光彦。

「家におじさんが来てるんだよ。アメリカから」

歩美がうんと大きくうなずいた。

「知ってる。アメリカの……何とかボールのコーチやってるおじさんでしょ」

「アメリカンフットボール、かしら？」意外だ、という顔の哀。

「おう、それだ。だから俺、家に早く帰らねえと……」

コナンもまったく初めて聞く話だった。

元太を除く四人でショッピングセンターへ向かい、昨日コナンと哀が話していたベンチに腰を下ろす。

「で、殺されたのはどんな人なんです？」

光彦は神妙な顔を作っではいたが、内心わくわくしているのは見え見えだ。

「殺されたんじゃない。自殺したんだ」

「自殺？」

「そう。青酸カリでな。しかも、とある弁護士の目の前で」

「その弁護士に恨みでもあるんですね」

「まだ、そうとわかったわけじゃない」

「じゃあ、さっそくその弁護士に話を聞きに行きましょう」

光彦が意気揚々と言う。コナンも哀も、ため息が出るのはしかない。

「無理だよ。今のところ二十四時間警察の監視下にあるから」

「どうしてですか？」

「一応疑われているからな」

「どういうことです？ 自殺なんですよ」

「現場はその弁護士の事務所。自殺した人は法律相談に来ていたんだ。で、弁護士本人が入れたお茶を飲んで苦しみたした」

「それじゃあ、その弁護士がお茶に毒を入れて殺したという殺人事件じゃないですか」

「弁護士には動機がまったくない。警察に通報したのも弁護士本人だ。だいたい、犯罪に詳しい弁護士が、最初から自分に疑いがかかるような殺人を犯すと思うか？」

光彦は大げさにやりと笑った。

「この事件、謎は解けました」

コナンも哀も、ハズレだ、という露骨な顔。

「これはですね、警察の心理的盲点をついた大胆不敵な犯行なんです。自分から警察に通報するなんて、普通の犯人なら絶対にしないことですからね。そういう自分に有利な状況を警察に証明させたいに、決定的な証拠さえ残さなければ、ほら、疑わしきは罰せずってやつですよ。刑事裁判の基本中の基本。まさに、弁護士しか思いつかない犯罪ですよ」

「あんな、弁護士つてのは信用が全てなんだ。殺人の疑いをかけられるような弁護士に、誰が仕事を頼むって言うんだ？」

はたと勢いの止まる光彦。

「…それもそうですね」

歩美が体を乗り出した。

「ねえ、その弁護士って、もしかして蘭お姉さんのお母さん？」

「ん？ まあ、そうだけど」

「じゃあ、家族の友人が急なお仕事頼みたいって言えば」

「小学生が、弁護士に何の仕事を頼むって言うんだ？」

「わかった！」

光彦が素っ頓狂な声を上げた。

「今度はなんだよ？」

コナンも哀も、やれやれ、という表情。

「その自殺した人は、弁護士に深い恨みがあって、信用を失墜させて仕事ができなくなるように、弁護士にわざと疑いがかかるようにして自殺したんです」

ああ、やっぱり、のコナンと哀。

「しっついつて何？」 またまた歩美の素朴な質問。

「徹底的に貶める、って意味です」

「おとしめる？」

「ああ、つまりですね、信用をなくしてしまつて、ということですよ」

コナンはテーブルに手をついて立ち上がった。

「警察もとづくに気が付いてて、その線で捜査してる。ようするに、この事件に関しちや少年探偵団の出る幕はもうないってことさ」

土曜日、コナンと哀は米花駅で待ち合わせた。

森田家は、ここから電車で一時間三〇分はかかる。事件当日、被害者と同居していた長男高光が比較的早く現場に現れたのは、被害者と共に都内の妹千里の家に滞在していたからだ。

家族の亡くなった家を訪問するのだから、子供とはいえラフな格好というわけにはいかない。そうかといって喪服というのもやりすぎだ。そこでコナンは、いつものブレザーに蝶ネクタイ、ただしネクタイの色はグレーに変えていた。デパートでもらった抹茶色の紙袋があつたのでそれを持ってきた。

コナンとしては準備万端、約束の時刻より一〇分前に改札口前に立った。

五分ほど待って、やってきた一人の少女。コナンは一瞬、気がつくのが遅れた。その少女が哀である、ということに。フリルのついた薄いグレーのワンピースに同じ色のつばの広い帽子、しっかりブランド物のショルダーバッグまで持っている。

「お、おい……」

「この格好のこと？ いいじゃない、たまには。私だってこういう服、着たいことがあるのよ。女の子だもの」

につこり笑う哀。やれやれのコナン。

「そんな成金趣味の格好、犯罪者に目付けられるだけだぞ。誘拐されて、頬にナイフぴたぴたされて、さあ、お嬢ちゃん、おうちに電話してもらおうか、とか」

「あら、私が誘拐されそうになったら、あなたが身を挺して守ってくれるんでしょ？」

「あのな……」

「それに、この程度で成金趣味なんて、ファッションセンスなさすぎよ。女の子の服に少しは興味を持って、もっとしっかり観察しなさいよ。探偵なんでしょ？」

「悪かったな。女の子の服に興味なくて」口をとがらすコナン。

「もっとも、私がお金持ちってのは事実かもしれないわね」

「金持ちの博士の家に、居候してるだけじゃないか」

「私、近々巨額の収入を得ることになってるんだけど」

「巨額の収入？」

「そうよ。博士の収入を上回るであろう、有望な特許を申請中なの」「有望な特許？」

「超高効率太陽電池に関する技術。もちろん、博士の名義ではあるけどね」

「いつの間に……」

「研究所にいたときやってた研究の副産物なのよ。ある意味偶然の

発見なんだけどね。弁理士の話ではスムーズに取得できそうだし、すでにいくつかの企業とも接触してるから、いずれ博士は全国長者番付の百位以内に入るんじゃないかしら」

「…そんなことしてお前、やつらに！」

「ふふ、太陽電池に関する技術なのよ。私が研究所でやっていた研究と関係があるなんて誰も気が付かないわ。そう、この私以外、誰もね。そのへんの詳しいこと、聞きたい？」

「…いや、いい」

コナンと哀は電車のロングシートに並んで座っていた。車内は、座席がほぼ全て埋まっている程度。立っている人はいなかった。

「やっぱり言うか…」

「そうね」

歩美と光彦が隣の車両に乗っていたのだ。子供が二人、新聞を広げて顔を隠しているから、かえって見え見えだった。

「でも、電車に乗るときは全然気が付かなかったわね」

「ああ、その点はこっちもうちかつだったな」

「で、どうするの？」

「もちろん…」

電車に乗って一時間。線路の両側には水田が広がっている。目的地の駅に着いたが、二人はわざと降りなかった。車内はガラガラ。コナンと哀は、さりげなく扉のそばに移動していた。

持ってきた時刻表を開くコナン。

「お、ちょうどいい」

にやりと笑ってぱたんと閉じた。

そして目的地の次の駅、停車し扉が開いてもコナンと哀は微動だにしない。歩美は完全にうとうとしている。光彦もあくびをして二人から目を離してしまった。

発車ベルが鳴り終わった瞬間、ぱっと電車から降る二人。

「あつ、しまった！」

「え、何？」

光彦が気付いたときには時すでに遅し。扉は閉まっていた。そして電車は発車していく。コナンと哀はホームからにこやかに手を振っていた。

深まる謎と男の決意

一駅戻って、コナンと哀は目的の駅に降り立った。

古い木造の駅舎。大型の木製ベンチには老人たち五人ほどが座って、世間話をしながらのんびりと列車を待っていた。壁面に張られた色とりどりのポスターは真新しいが、木製の改札口といい、丸い穴あきガラスのはまった出札口といい、昔の駅のたたずまいがそのまま残されているようであった。

「さてと…」

コナンはポケットから、がさがさと紙を取り出した。ネットであらかじめ調べてあったバスの時刻表。

「一本逃したから、あと四十分あるな」

哀が、駅前に昔の商店を改造した洒落た喫茶店があるのを見つけた。

「ねえ、あそこで一服していかない？」

「子供二人で大丈夫かな？」

「大丈夫でしょ」

そこへ、身なりのきちんとした五十歳くらいの男が話しかけてきた。

「坊ちゃん嬢ちゃん、どこへ行くんだい？ パパかママは？」

さきほど同じ車両から降りた男だった。

「僕たち二人だよ」

「二人？ どこへ行くんだい？」

ベンチに座っていた白髪の老人が身を乗り出した。

「どうしたんだね、田中さん」

「ああ、この子たちがね、どうも親がいないみたいなんだ」

待合室に居た皆の視線がさっとコナンと哀に集まる。

「あ、ええと…バスの時刻もちゃんと調べてあるから」

コナンは紙を差し出した。

「日向支所行き…どここのバス停で降りるの？」

田中氏はまったくの善意から尋ねてくる。哀は素知らぬふりをしてコナンに対応を任せていた。

「日向小学校前」

「…あの近所に親戚でも住んでいるのかい？」

「いえ、森田高光さんの家に」

うつかり個人名を出してしまい、しまったと顔に出すコナン。

「ん？ 森田さんの家だとバス停から結構歩くな」

田中氏は森田家の人々を知っている様子だった。

「よし、じゃあ私が車で送ってあげよう」

「あ、いえ、僕たちバスで行きますから」

「なに、ちょうど通り道だから、遠慮はいらないよ」

「そうそう、田中さんに送ってもらうといい」優しいに言う老人。

顔を見合わせるコナンと哀。

「待ってな、今車を回してくるから」

田中氏はにこにこしながら駅舎を出ていった。

子供扱いされてやや気分斜めのコナン。

「一服がふいになっちまったな」

「帰りに寄ればいいじゃない」

哀は微笑んでいた。

「でも、いいの？ 知らない人の車に乗るなんて。今日も先生、言っただじやない。知らないおじさんの車には絶対に乗っちゃだめつて。もろにそのパターンなんだけど」

「まあ、誘拐犯が男とは限らないから、その注意はまったくの不十分だが…今の人が誘拐犯に見えるか？ それに、こんなに地元の人たちの視線がある中で誘拐なんかしないよ」

「それはそのとおり、として、森田家訪問の目的を質問されたらどう答えるつもり？ 必ず質問されるわよ」

「正直に答えるさ。さっきの様子だと田中さんと森田さんは知り合いだ。だとしたら、変にはぐらかすと、後々問題になる可能性がある

る」

「つまり、私たちの帰った後で森田さんと田中さんが会ったら、私たちの事は必ず話題になる。そこで話が食い違っていることがわかると、森田さんが不審がつて、再度話を聞く必要が出てきたときに問題になる…ってとこかしら」

「そういうこと。それに、田中さんにも森田家のことを聞けるだろ」
「そこでようやく、周囲の大人たちの怪訝な視線に気がつく二人。
「待たせたね」いいタイミングで戻ってきた田中氏。

二人は視線を逃れるように駅舎を出た。そこに停まっていたのは国産の最高級乗用車。見るからに車体の丸みが少ない一昔前の旧型。しかし、手入れが行き届いるのか、ぴかぴかだった。

コナンは一瞬ひるんだが、すぐに子供の表情を作った。

「わあ、すごい車だ」

「ははは…わかるかい？」

「これ、とっても高い車でしょ。お父さんの友達が同じ車に乗ってるんだ」

「ほう、そうか」

「あの、おじさまのお仕事は何ですか？」

目いっぱい可愛く尋ねる哀。思わず身を引くコナン。

「ああ、酒屋をやってるんだ」

「酒屋ってお酒作ってるんですか？」

「ほう、酒屋って聞いてよくわかったね」

「だってこの車、社長さんが乗る車だもん」

「ははは…なるほど。うんそうだよ。でもなあ、本当はこんな堅い車好きじゃないんだけどね、嬢ちゃんの言うとおり、社長つてのは世間体つてものがあるからなあ…と、こんなこと言ってもわからないかな、ははは」

「あの、何て言うお酒作っているんですか？」

「七冠王つて知ってるかな、いわゆる地酒なんだけどね…まあ知らないよなあ、ははは…」

につこり、可愛げに微笑む哀。ますますあきれるコナン。

(こわい女…)

気のいい蔵元のおかげで、コナンと哀は無事に森田邸に到着した。土塀に囲まれた、大きな二階建ての家。そして広い庭。

「私って恵まれてるのよね」

唐突に哀はそう言った。

「え？ 何の話だ？」意味を理解できないコナン。

「博士の家よ。庭も広いし家も大きいし…よく考えたら、博士の家って都心ではものすごく恵まれているのよね」

哀の表情は暗くない。コナンはその表情を見てほっとした。

庭で森田夫人らしき人物が物干しに布団を取り込んでいるところであった。義理の母親が亡くなったというわりには、平静な感じだ。毒物による中毒死ということもあり、司法解剖その他でまだ遺体が戻っていないことはわかってるが、家族としても、ある程度心の準備はできていた、ということだろうか。

「こんにちわ」

「はい？」顔をこちらに向けた婦人は、二人を見て笑顔を見せた。毛利小五郎の電話が効いている、ということだろう。ただし『私が電話したことは内密に』と言ってある。

「僕は江戸川コナン。毛利探偵の助手です」

子供の姿とは便利なもので、簡単な挨拶だけでちゃっかり客間に上がってしまった。

「コナンくんのこと、うちの人から聞いてるわよ。満洲のことをさんざん聞き出されたって」

「毛利探偵の友達に満洲から引き上げて来た大学の先生がいて、そのおじさんからいっぱい話を聞いてるんだ」

「でもねえ、コナンくんにとって、満洲なんてもう、別世界の話でしょう？」

「僕、そのおじさんみたいに、将来、歴史の先生になりたいんだ」

「そう、えらいわね」

「それほどでも…」

照れ笑いをするコナン。一方、哀は静かに出されたお茶を飲んで
いた。

（この人、お茶の基本を知ってるわね…さすが農家の主婦だわ）

「やあ、お待たせ」

携帯電話で呼び出された高光が戻ってきた。たとえ母親が亡くな
るうとも、農作業を休むわけにはいかないのだ。

「こんにちわ」

「おやコナンくん、今日はガールフレンドもいつしょかい」

「灰原哀です。よろしく」

ガールフレンドと言われてもにこやかに可愛げに答えた。やれや
れのコナン。

「森田高光です」

小学生にもきちんと挨拶する高光。親の躰というものが窺われる
ところだ。

「しかし、本当に二人だけでここまで来たのかい？」

「駅から、田中さんっていう酒屋の社長さんが、車で送ってくれた
んだ」

コナンは、めいっぱい小学生の演技をした。

「そうか、田中さんに。あの人、いい人だろ」

「うん、とっても助かつちやった」

本題に入るきっかけを探るコナン。しかし哀は、一気にそこに踏
み込んだ。

「お葬式なのに、黒い幕はないんですか？」

哀もいかにも子供らしい表情で尋ねた。言葉遣いが子供らしから
ぬ、という点はあきらめであった。しかし、この単刀直入さが許さ
れるのは、ある意味子供の特権かもしれない。コナンは、急ぎすぎ
だ、という視線を哀に送る。

「ん…ああ、葬式はまだだよ。まだ、警察が調べているからね」

田中氏も森田家の悲劇をまったく知らなかった。高光としても、母親の死をどのように周囲に知らせるか、まだ決めかねている、というところだろう。

やむなく、コナンも子供からギヤを一段シフトした。

「小五郎のおじさん…毛利探偵が教えてくれたんだけど、春江さん、ガンだったんじゃないかって」

「え？ なぜそのことを？」

「毛利探偵の目は何でもお見通しだよ。ガン患者の顔には特有の雰囲気があつて、見ればすぐにわかるんだって」

「なるほど。そうかもしれない。痩せ方が見るからに異常だからね」

「春江さん、自分の病氣のことでひどく落ち込んだり、ものすごく悩んだりしてなかった？」

「…そう、母さん、ここ何日か思い詰めた様子だったな」

妻もうんとうなずいた。

「そうね、お義母さん、先々週の病院での検査の後、だいぶ落胆していらしたわね」

「お医者さん、春江さんにガンだつて話してたの？ 話さないこともあるつて毛利探偵が言つてたけど」

高光は軽くうなずいた。

「告知のことだね。告知はしていなかった。ガンだとは話していなかったんだよ。でも、先生の態度や雰囲気でわかったんじゃないかな」

一呼吸おいて高光は続けた。コナンの意図に気がついたのだろう。

「実を言うと、私たちも、母は自殺したんじゃないかと思ってる。

妃先生が母を殺す理由なんて、あるはずがないからね」

高光の言葉に、顔を見合わせるコナンと哀。

「遺書があつたの？」

「いや、遺書はない。でもそれは、妃先生に疑いをかけるためだったんだと思う」

「どうしてそう思うの？」

「…母は言ってたんだ。『罪を償うのは約束だったのに、あの弁護士に丸め込まれて！』と。見たこともない怖い顔でね。だから、妃先生を怨んでいたのは間違いない」

妻も重い表情でうなずく。

（罪を償うのは約束、だった？）

コナンは子供を完全になぐり捨てた。

「約束ってそれ、誰と誰の約束？」

高光にはコナンの疑問が理解できないようだった。

「え？ …もちろん父と母だよ。あの事件は…まず泥棒が侵入してきて物音がした。それで父は包丁を持って様子を見にいった。たぶん廊下で鉢合わせになって、逃げる泥棒を父が追いかけて刺したんだよ。泥棒が父を刺そうとしたんじゃない…たぶん、そういうことなんだ」

「宗太郎さんから直接聞いたの？」

「いや、必死だったから良く覚えていないとしか言わなかった。でも、父はうるたえると我を失ってあたりかまわず暴れるような人だから…」

コナンは確信した。事件解決の糸口を。

哀は、ちらつとコナンを見てから口を開いた。

「春江さんが言っていたという約束、それは、間違いなく春江さんと宗太郎さんの間で交わされたものなんですか？」

「え？ いや、誰と誰って言っても、父と母しか考えられないだろう？」

哀も、子供の顔をあきらめた。

「大事なことなの。春江さんは、宗太郎さんとの間の約束だとは言っていないのね」

「あ、ああ、そうだよ」

コナンは一呼吸置いて、質問を続けた。

「高光さん、宗太郎さんが暴れたってというのは…毛利探偵の推理だ

と『といつめられて、こたえにきゆうしたり』とか、『せまいばしよにおいつめられたり』とか、そういうときじゃないかって」

「…そういえば、高校生のとき、父と些細なことで口論になったことがあって、父を廊下の突き当たりに追いつめる格好になったことがある。そしたら父は、みるみる青ざめて、まるで別人のように、物を投げるわ、わけのわからない大声を出すわ、大暴れでもう大変だったな」

顔を見合わせ、小さくうなずきあうコナンと哀。

「宗太郎さん、昔、何かの事件に巻き込まれたりしてない？」

「いや、特に…でも、私もかすかに憶えているけど、満洲から引き上げるとき、船に乗るまで狭い収容所にいたし、銃を持ったソ連兵に追われたことがあると言っていたから、そのときの記憶が蘇るんじゃないかな、と思ってるね」

光彦と歩美は、がらんとした駅前広場に立ちつくしていた。駅前といっても、ビルはもちろん商店の一軒さえ見あたらず、民家が数軒あるばかり。あとは広がる田んぼと雑木林。電車からの降車客が数人、それぞれに立ち去ってしまえば、残るは二人きり。無人駅なので駅員の姿もない。

「灰原さんの格好目立つもん、きっと誰か覚えてるよ」

そう言って歩美は一軒の民家を指さした。

しかし光彦は、ゆっくり首を横に振った。

「いえ、無駄でしょう」

「どうして？」

「この駅は目的地じゃないんです」

「違うの？」

「ええ。僕たちの尾行を知って、わざと乗り過ごしたんですよ。そしてほら、この駅を発車したすぐ後に上り電車とすれちがったでしょ？ あの電車で折り返したんです。時刻表を見れば上下がすれ違う場所はわかりますから」

「じゃ、私たちも、ええと、上り電車で…」

光彦が手を大きく開いて制した。

「だめです。このあたり、三十分には一本しか電車がありません。目的地がどの駅かわからないことにはどうしようも…それに、駅からさらにバスに乗ったとすればそれこそ…」

「そっか…」

歩美も事態が絶望的なことに納得したようだった。

「けどあの二人、僕たちをああまでして遠ざけるなんて、今までになかったことですね」

「うん…」

さびしそうにうつむく歩美。

「コナンくんは、よほどの理由がなければ僕たちを遠ざけたりしません。つまり、よほどの理由があるんでしょうね」

「じゃあ灰原さんは？ 灰原さんはどうして遠ざけないの？」

歩美の顔を見た。歩美は泣き出すのをこらえているようだ。

光彦は、ある重大な決心をした。

「あ、歩美ちゃん…その、僕がいるじゃありませんか」

「え？」

歩美は意味がわからない。頭に血が上る光彦。

「その、あの、だから…」

「なあに？ 光彦くん」

歩美の質問はいつもと同じように無邪気だ。

「僕は、僕は、コナンくんの代わりと言えるほどの男ではあり、あり、ありませんが…」

「コナンくんの代わり？ どうしたの？ 顔、真っ赤だよ」

「ととにかく、今日のところは帰りましょう。ぼ僕が、歩美ちゃんを絶対に守りますから」

「…うん…でもどうしたの？ 大丈夫？ 光彦くん」

「べべ別に、何でもありません！」

コナンと哀は仏間に案内された。

「あれが父だよ」

高光が見上げる視線の先、欄間に飾られた宗太郎の写真。哀は背伸びしてその写真を見た。そして高光の顔を見る。

コナンに視線を向けると、コナンもまた哀のほうを見ていた。

そう、二人は同じことに気が付いたのだ。

（親子にしては似ている点がない。なさすぎる）

たどり着けるところまで

阿笠博士は、いつものように書斎の机に向かって論文を書いていた。

電話が鳴る。

「はい、阿笠ですが」

「ハロウ、ミスターアガサ。コジマです」

「ああ、どうも。で、いかがでしたかな、元太くんは」

「ワンダフォー！ 素晴らしい。貴方の言ったとおりです」

「で、彼の様子は？」

「大丈夫。非常に非常に興味を持ったです」

「おお、それはよかった」

「ゲンタはダイヤモンドの原石です。十年ノ一二十年に一人です」

「ほう…では…」

「そうです。今です。今から磨かなくてはいけないのです」

「ご両親のほうは何と？」

「大丈夫。この私がいいます。安心してください」

「わかりました。では財団のほうには私が推薦状を書きましょう」

「お願いしますよ」

「実は相撲部屋からも誘いがあったのですが、私も貴方にお任せするほうが良いと考えました」

「オー、スモウ、素晴らしい。でも、あれは神道の儀式です。スポーツでない」

「ええ、私も彼のキャラクターには合わないと思いました」

「貴方の判断は間違っていない。ゲンタはイチローの次に有名になる絶対に。私は保証する」

「では、帰国の前にもう一度お電話いただけますか」

「もちろん。では、失礼します」

電話は豪快に切れた。

博士はふむと息を一つ。それから置き時計の時刻を見た。
受話器を持ったまま、短縮ボタンを押す。

「あ、もしもし、阿笠と申しますが、内線の一〇二一番をお願いします
ます」

森田邸の仏間、コナンと哀は仏壇を前に向き合って座っていた。

高光は二階に母親の遺品を取りに行っている。夫人は高光の代わりに農作業に出ている。

掛け時計の、時を刻む音が聞こえてくるほどの静寂。
欄間を見上げるコナン。

「あの宗太郎さんの写真、どう思う？」

「あなたと同じ意見よ」間髪入れぬ即答。

「だろうな。こうなると、春江さんが言っていた『彼』の正体が気
になる」

「そうね。でも…」

「これを」哀に向かってハンカチを差し出す。

「何？」

「高光さんの髪だ。遺伝子を調べて欲しい」

「いつの間に？」

「さつき、高光さんの後ろを通り過ぎたときに」

コナンはステンレス製の小さな糸切りハサミを見せた。

哀は真面目に感心してみせた。

「あなたって、ほんと、手先が器用なのね」

トイレに行くというコナンが高光の脇を通り過ぎるとき、不自然
によるめいたのだった。

「でも、比較する遺伝子がないわよ」

「遺髪でもあればいいんだが…『彼』のほうは警察が保管してるは
ずだ」

「凶器についた血液？ 仮にあったとしても、どうやって手に入れ
るつもり？」

哀は小さく両手を広げた。

階段を降りてくる足音。姿勢を正す二人。

「お待たせ」

高光は大きな葛籠をよいしょと畳に下ろした。

「ここに、母が満洲から持ち帰った物と父の遺品が入っている」

開けると、古いアルバムやネガ、農業団体からもらった表彰状が十数枚、古い懐中時計、万年筆、和紙にくるまれた奉書、そして最近春江に処方された内服薬の袋：しかし、かすかに期待していた薬品の瓶らしきものは、やはり入っていないかった。

「これは？」奉書を指さすコナン。

「ああ、父の遺髪だよ」

コナンと哀はちらっと見合った。

「見せて」

「ん？ ああ」

高光が奉書を開くと、中に銀髪が入っていた。

コナンは素早く立ち上がって、欄間の写真を大げさに指さした。

「でも、あの写真と色が違うよ」

高光も立ち上がって父親の写真を見上げた。

「ああ、これはまだ父の髪が黒かった頃撮ったものだからね」

二人が葛籠に背を向けている隙に、哀は手早く銀髪を数本抜き取った。

「でも、何だか高光さんと似てないね」

「僕も千里も母親似なんだよ。何しろ母の顔、個性が強烈だろ？」

高光はかすかに笑っていた。多くの人に同じことを言われるのだろう。確かに春江と高光、そして高光の妹千里の顔は一見して似ている部分があった。目の周囲、あごの形などそっくりである。三人の親子関係はまず疑う余地がないだろう。

高光は腰を下ろして、遺髪を丁寧に戻した。髪が抜き取られたとは夢にも思っていないだろう。

哀は、目をつけていた古く黄ばんだ戸籍謄本を取り上げた。

「これ戸籍謄本でしょ？」

「ああ、そうだよ。でも、よく知ってるね、そんな難しい言葉」

哀の知識に感心するということは、別段他人に隠したいような内容は載っていないのだろう。見ると、内容はこうであった。東京府東京市淀橋区、現在の新宿区の兄の家から昭和一六年に分家した宗太郎の戸籍に、春江が昭和一八年婚姻して入籍、その二人の間に長男高光、長女千里が生まれた。単純明快でどこにも疑問の余地はないように思える。宗太郎が単身で分家したのは満洲へ渡るためだったのだろう。

「そうだ。満洲で撮った写真があつたんだ」

高光は立ち上がって部屋を出た。階段を上る足音。

コナンがメモを取ろうとすると、哀はショルダーバッグから箸箱を取り出した。

「箸なんかどうするんだ？」

「これ、箸箱じゃないわよ。博士特製、超小型スキャナー。後でその性能に驚くことになるわよ」

哀は手早く紙の上をなぞって、全ページをスキャンした。

コナンは、森田春江と書かれた内服薬の袋を手にとった。中に入っていた錠剤シートを取り出す。

「それ、ちよつと見せて」スキャンを終えた哀が手を差し出した。

「ああ」袋ごと手渡すコナン。

錠剤シートをじつと見つめる哀。

「…そう」ぽつりと漏らす。

「何かわかるのか？」

「これ、モルヒネ錠よ。しかも、ターミナルステージで使われるもの」

ターミナルステージ、すなわち、春江は最末期だったということだ。もはや立って歩けるのも後何日、というような状態だったのだろう。

高光が戻ってきた。

一枚のセピア色の写真、そこには椅子に座って赤ん坊を抱く若き日の春江、そして直立不動の幼き日の高光。春江も高光も、本人に間違いないだろう。

コナンは写真を丁寧に手に取った。

「宗太郎さんは写ってないね」

「ああ、何でも、この頃父は関東軍に徴用されていたんだそうだ」
「宗太郎さんのお仕事は？」

「病院に出入りしていた薬問屋の営業マンだよ。それで母と知り合っただそうだ」

「宗太郎さんの、満洲時代の写真はないの？」

「着の身着のまま逃げたから、家財道具も何も、ほとんど持ち出せなかったらしい。満洲時代の写真はこれだけなんだ」

「ふうん…これは？」

コナンが高光の注意を引きつけている間に、哀は写真を見るふりをしてすばやくその上を手でなぞった。

コナンが取り出したのは、新京東病院開院十周年記念と書かれた冊子だった。もちろん写真は全て白黒である。

「ああ、これは母が勤めていた病院の記念パンフレットだよ」

めくると、病院の全景や庭の写真、病院の沿革、院長以下医師の写真…そして薬剤部のスタッフの写真。昭和一八年のものにしては紙質も印刷も非常に良い。本土よりは物資に余裕があったのだろう。
「ほら、これが母だよ」

たしかにスタッフ十数人の一番端に春江が写っている。

しかし、コナンの目は同じ写真に写っていた別の若い男に注がれた。

（似てる！ 高光さんに！）

そう、顔の輪郭、雰囲気似ている人物が写っているのだ。もちろん宗太郎とは似ても似つかない。

コナンが口を開こうとするのを哀が手で制した。

「高光さんはここに写っている人達に会ったことありますか？」

哀はそう質問した。

「会ったことはあるはずだけど、私はまだ一歳か二歳、憶えてないよ」

「戦後に会ったことはないんですか？」

高光の表情が曇った。

「いや…そう…確かここに写っている人は母以外全員死んだって聞いたことがある」

「全員死んだ？ 満洲で？」 絶句するコナン。

「ああ…ひどいものだったらしい…戦闘で死に、病気で死に、飢えて死に…シベリア抑留でも大勢の人が死んだ。そしてほら、残留孤児って知ってるだろう。私や千里だって一歩間違えば残留孤児になっていたかもしれないんだ…一家全員無事に帰ってこれたのは、本当に奇跡だよ」

そう言う高光の視線は宙をさまよっていた。

「…日本に帰ってきてみれば、父の家族は全員、空襲で死んでしまっていた。それで新宿にあった実家の土地を売って、ここの土地を買ったんだそうだ」

戦後まもなく撮ったものであろう、高光の小学校入学記念の写真があった。家をバックに宗太郎と春江、高光と千里が晴れやかな顔をして写っている。

コナンはじつとその写真を見つめた。そう、この場所に、戦中戦後の苦労を経てようやく平和な生活を得た一つの家族が確かに存在した。しかしその裏には、隠された暗くて重い秘密があったのだ。宗太郎と春江はそれを心の中にしまい込んだままこの世を去っていた。そして『彼』も。

コナンは改めて高光を見た。彼は、父と母が生涯隠し通した秘密のことなど何も知らないのだ。妹の千里もそうなのだろう。

日の暮れかかる頃、コナンと哀は高光の車で駅に戻った。

「しかしコナンくんも哀ちゃんもすごいなあ…昔のことをよく知っ

てるみたいだし…ほんとに小学一年生かい？」

「僕、将来歴史の研究家になりたいから、一所懸命勉強してるだけだよ」

「そう。本当に偉いなあ…うちの孫たちにもコナンさんの爪の垢を煎じて飲ませたいくらいだよ」

そう言つと高光は、窓越しに片手を上げ、暗くない表情で去つていった。

コナンも哀も、洒落た喫茶店に寄る気分ではなかった。改札口に直行して週末フリーきつぷを見せ、そのままホームに出た。

夕方の上り電車、帰りの行楽客で座席はほぼ埋まっている。ロングシートの真ん中あたりだったが、並んで座れたのは幸運だった。向かい側の窓から差ししてくる、今まさに沈もうとしている太陽の光に、二人はオレンジ色に染まった。

コナンは夕日を正面に見つめたまま、口を開いた。

「あの時、止めてくれてありがとう」

「え？」

「薬剤部の写真を見たときだよ。俺、これは誰って質問するところだった」

哀は口元に笑みを浮かべた。

「そつだらうと思つたわ」

「…高光さんも千里さんも、何も知らないんだろうな」

「…そつでしようね」

あの十周年記念誌には、あるはずのものがなかった。目次にも載っている職員の名簿は、元からなかったのではない。カッターが何かで丁寧に取り取られていたのだ。

「これからどうするつもり？ 満洲については手がかりが乏しすぎるわよ」

「新京東病院は結構大きな病院のようだから、あの記念誌だつてどこかの図書館に所蔵されているかもしれない。他にも何かしら記録は残ってるだろう…もちろん『彼』のことも」

「あの写真の人ね」

「たぶん」

「新京東病院の記録と『彼』について調べるのはいいとして、その先は考えているの？」

コナンは腕を組んだ。

「妃先生は、宗太郎さんから全てを聞かされているはずだ」

質問には答えていないが、哀はコナンの意図をおおよそ理解した。「とりあえず、俺たちがたどり着けるところまでは行ってみるさ」

コナンは、沈みゆく太陽をずっと見つめていた。

たどり着けるところまで（後書き）

同人誌（上巻）ここまで。

これ以降（下巻予定）は推敲中のため、（上巻）部分と矛盾をきたしている可能性もありますが、ご了承ください。

君を誰よりも愛する人

日曜日、蘭は朝から部活のため学校へ。コナンは午前十時頃阿笠邸に向かった。

阿笠邸では、哀が眠そうな顔をしてコナンを出迎えた。

「いらしゃい」

「どうしたんだ？　ずいぶん眠そうじゃないか」

「ああ、髪の遺伝子抽出をね…」

「どうせ時間がかかるんだから、別にそんなに急がなくても」

「すでに結果は出てるわよ」

「え？　まさか！」

「サワダヒロキくんの解析ツールよ」

「何だって！」

「ノアズアークが私に教えてくれたのよ、自分自身のコピーと遺伝子解析ツールがある場所をね」

コナンはコクーンの中で聞いたノアズアークの言葉を思い出した。

ゲームが終わって、サワダヒロキとの別れの時。

「ありがとう、コナンくん。とっても楽しかったよ」

その時、彼は本当に嬉しそうだった。

「ゲームは終わった。しばしのお別れだ」

彼の嬉しそうな笑顔の向こうに、探偵の勘が、危険なものを感じとっていた。

「…ヒロキくん、君はどこへ行くんだい？」

思わず口をついて出た言葉は、なぜそという質問になったのか、自分でもわからなかった。

しかしよく見ると、彼の顔は、希望に満ちているように見えた。

「どこへも行かないよ。しばらく眠ることにする。まだ、僕が生まれるには早すぎたんだ。でも、きっと、いつの日かまた会える。君

を誰よりも愛する人に託しておいたから……」

（俺を、誰よりも愛する人……）

コナンは哀の顔を見ていた。

「どうしたの？」

「え、あ、いや……それで、ノアズアークは今どこに？」

「ディスクの中。時期が来るまで封印しておいてくれて頼まれたの。暗号化した複数のコピーを分散して保管してあるわ」

「頼まれたのはお前が退場した後か？」

「ええ、そうよ」

コナンは哀の顔をさらにまじまじと見ていた。

「な、何？」

思わず顔を赤らめる哀。

視線を落とし、ふっと笑うコナン。

「ノアズアークは賢い奴だったな」

「え？」

「最後の勝者は俺だったわけだけど、俺がそんなことを託されても困っちゃう。その点、お前なら安心だ。なるほど……」

一人何事かに感心するコナンに、哀はちよっぴり不満を覚えた。

だが、問い詰めれば、さっきの強い視線はなあに、ということになる。それもちよっと避けたいところだった。

「ノアズアークはもちろん知っていたんでしょうね、私たちの正体を」

かすかに刺を含む言葉。しかしコナンは哀の心の動きを読めていなかった。

「ああ、だから最後の勝者として俺を、自分を託す者としてお前を、それぞれ選んだんだよ」

そこで、コナンははっと思い出した。

「……おっと、それで、高光さんと宗太郎さんの関係は？」

哀もとりあえず喫緊の話題に戻った。

「予想の通り。血縁関係は0」

コナンの目が、あの、いつもの探偵の目に完全に戻っていた。
「やっぱりそうか…となると、やはりあの写真の男が…」

哀も、いつもの表情に戻った。

「そっちも調べたわよ」

「え？ どうやって？」

「スキャンしたデータを引き延ばして、あの写真の顔と子供ときの
高光さんの顔を、三次元解析ソフトで比較してみたのよ」

「ふうん…で、コンピューターの出した結論は？」

「細かいところは省いて結論だけ言うと、あの二人は似ている。つ
まり親子関係の可能性がかなり高い。まあ、結局のところ人間の目
で見た印象とさして変わらない結論しか出ないんだけどね」

コナンは軽くうなづいた。

「これで、あの写真の人物と亡くなった泥棒が同一人物なら、全て
の話の筋は通る」

ふわあと大あくびをする哀。ぎよっとするコナン。

「あら、ごめんなさい」

コナンは本気で驚いていた。

「…いや、お前もあくびを…そりやするよな」

「当たり前じゃない。私を、何だと思っていたの？」

「いや、別に…ごめん」

消え入るように、ごめん、と言葉を継ぎ足したコナンが、哀はと
つても可笑しかった。

「そ、そうそう、この間焼いてたケーキ、ちょうど今が食べ頃なん
だけど、食べない？」

出かかった笑いをケーキの誘いでごまかすと、コナンはまるつき
り子供のように、表情が一変した。

「お、いいねえ」

「その代わり、コーヒーは貴方が淹れてよ」

「ああ、いいとも」

コーヒータイムの後、コナンと哀は阿笠邸の居間に設置してあるパソコンに向かっていた。阿笠邸はギガビット級の光ケーブルで外部に繋がっているから、ネットワークは快適そのものである。

そこへ、博士が外出から帰ってきた。挨拶もそこそこに、二人は真剣な表情でパソコンに向かう。

「おや、二人とも熱心に何を勉強しておるのかな？」

「満州のことをちよつとね」

コナンが画面を睨みながら答えた。

「満州？」

「ああ、妃先生のところで起きた事件だよ。亡くなった婦人が満州からの引き揚げ者だったんだ」

「ほう…実は、わしも満州生まれじゃ」

二人の手が止まった。

「博士も？」

コナンが問うと、博士は、うむ、とうなづいた。

「ああ。育ての親の転勤で昭和二十年の二月に日本に帰ってきたが、そのときわしはまだ一歳。だから何も覚えておらんがの」

「育ての親って？」

コナンの直裁な質問に、哀ははっとした。

「わしの父親は地方の病院に勤めておったんじゃが、事故で死んでな、それで、子供のいなかった院長先生がわしを育ててくれたんじやよ」

コナンもしまったという顔。話の流れからして母親も、ということだ。二人は神妙な顔をするしかなかった。

「ああいや、すまん、こんな話をして」

「博士、ごめんなさい」

コナンは深く頭を下げた。

「ああ、気にするな。わしらは家族、そのうち新一も、な」

博士はにこやかにそう言うと言書斎に入っていつてしまった。

哀はパソコンのキーボードから手を離して背伸びをした。そして手を下ろす。哀もまた非常に真剣な表情だった。

「人って、いろいろな過去があるものね」

「ああ」

コナンはとりあえずパソコンに視線を戻す。

「…知らないほうが幸せ、ってこともある」

少し考えて、哀はコナンの言葉の意味を理解した。

「高光さんと千里さんのことね」

コナンは黙ってうなづいた。

「どうするの？　ここらでやめておくのも一つの選択肢だとは思っけど？」

「確かにそうかもしれない。でもお前、言っただろ、聞いてもらえる人がいるだけでも私は助かっているって…妃先生も同じなんじゃないかな」

哀はコナンの意図を察して、やさしい眼差しで微笑んだ。

「貴方って、本当にやさしいのね」

コナンは手を頭の後で組んでかすかに笑った。

「いや、単に好奇心旺盛なだけだよ。しかし、その好奇心が誰かの役に立っつていうのなら、一石二鳥じゃないか」

一瞬、顔を見合わせる二人。そしてすぐに、二人は再びパソコンに向かった。

昼過ぎ、二人はテーブルに向かい合って座って、サンドイッチを食べていた。遅い昼食である。博士は書斎にこもりつきりである。

大事な論文の仕上げ段階、ということだった。

「だけど驚いたわ」

「ん？　何が？」

「貴方の手際の良さよ。包丁さばきといい、材料の選び方といい、大したものだわ」

「サンドイッチ作るくらいで大げさなこと言うなよ。それに、キャ

ンプに行ったときも似たようなこと言ってたぞ」

「褒めてあげてるんだからいいじゃない」

コナンは紅茶をゆっくりと飲み干した。

「さてと…」

コナンの表情が真剣モードに入った。

「例の記念誌は所蔵してる図書館がない。インターネット検索にも引つかからない。宗太郎さんが『彼』を刺した事件も検索できなかった…新聞データベースにもなし、と…」

「しかたないわよ。ちょうど例の東京駅連続通り魔殺人事件の渦中だったんだし」

「それに、当初から死者の出た事件だったわけじゃないし…」

コナンはうーんと体を伸ばした。

「…こうなると、検事調書でも見たいところだな」

「妃先生ならコピーを持っていてるでしょうけどね」

「おっちゃんを使って何とか…いやまあ、最悪その事件について詳しいことはわからなくても、例の写真の人物が奈良井さんだと確認できればいい」

「手がかりは今のところ名前だけね…奈良井剛市」

名前だけは高光から聞き出してあった。

「空き巣で一度捕まった…昭和四十七年か」

コナンはデータベースからプリントアウトした短い新聞記事を眺めた。

「一応、新聞原紙を当たってみる？」

記事を哀に手渡すコナン。

「文字の量からしてベタ記事…写真は載ってねえだろうな」
哀も残念ながら同感だった。

「でもね…一つ疑問なのは、奈良井さんが森田邸に空き巣に入ったのは本当に偶然だったのかしら。七十三歳だったんでしょ」

「と言うと？」

「つまり、七十三歳になっても、まだ現役の空き巣常習犯だったの

かしら、つてこと」

「とつくに現役引退していたが、何か別の目的があつて、森田邸に忍び込んだつてことか？」

「そう考えるほうが自然じゃない？」

「俺の意見は違うな。そもそも奈良井さんは森田邸に侵入したんじゃない。訪ねてやってきた」

「それはないんじゃない？　だつて、奈良井さんは病院で、空き巣に入つたことは認めたんでしょ」

「宗太郎さんと口裏を合わせていたとしたら？」

「どういうこと？」

「つまり、奈良井さんは宗太郎さんを訪ねてやってきた。あるいは宗太郎さんが招いたのかもしれない。話しているうちに何らかの理由で宗太郎さんと奈良井さんは口論となり、奈良井さんが包丁で怪我をしてしまった。おそらく双方ともそんなことになるとは思つてもいなかつたんだらう……このままでは奈良井さんの素性が高光さんや千里さんにわかつてしまふ……冷静さを取り戻した二人は、空き巣と過剰防衛というストーリーをでっち上げた。春江さんの言つていたという約束がそれだ」

「ところが奈良井さんが亡くなつてしまい、過剰防衛というシナリオを続ける必要はなくなつた、と？」

「包丁だよ」

「え？」

「言つたら、正当防衛の決め手は包丁の指紋だつたつて。つまり、奈良井さんが怪我をしたとき、包丁を持っていたのは奈良井さん自身なんだよ。宗太郎さんにとっては有利な状況証拠があるのに、あえて過剰防衛に甘んじるような態度を取っていると、何かの拍子に全てが明るみになる恐れがある」

「それが妃先生のアドバイスだつた、つてわけね」

「コナンは軽く首を縦に動かした。

「そうまでしてでも隠さなきゃならない過去の事件つてのがあつた

のさ、三人の間で。宗太郎さんが思い出すと恐怖のあまり暴れてしまふほどの事件がな。もちろん、高光さん千里さんに本当の父親のことを知られたくない、というのも大きな動機の一つだろう。二人ともな」

「なるほど…春江さんが妃先生に怨みを抱いたのは、高光さんと千里さんの父親である奈良井さんとの約束を、宗太郎さんが破ってしまった、それを妃先生がそのかしたから…」

「春江さんとしては、直接宗太郎さんを責めるようなそぶりを高光さんに見せるわけにはいかなかった。なぜなら自分は奈良井さんになど会ったこともなく、事件にも一切関係ないのだから。夫の無罪放免は喜ぶべきことであり、妃先生には最大限の感謝をしなければならなかったんだ。だが、自分の死に直面して、妃先生に対して鬱積していた思いを、ああいう形でぶつけるしかなかった…妃先生が女だつてことも影響しているかもしれない」

哀は大真面目にうなづいた。コナンが初めて見る表情だった。

「…何だよ」

「さすがね…そんなこと、思いつきもしなかった。確かに、全ての話の辻褄がピタツと合うわ」

「だが、そもそも今回の事件の遠因となった五十年前の事件ってのはどんなものなのか、奈良井さんが重傷を負った経緯はどうだったのか…肝心の点がさっぱりわからない。それに、この推理にはまだまだ仮定の要素が多すぎる」

腕を伸ばし軽く背伸びをする哀。それから穏やかな眼差しを向けた。

「いいんじゃない？ 結局のところ、妃先生から直接話を聞かなくや事件の全容なんてわからないわよ」

「ま、それはそうなんだけどな。とにかく、奈良井さんが新京東病院薬剤部にいたことの確認だ。何とかして奈良井さんの写真か、病院の職員名簿を手に入りたいが…」

そのとき、博士が書斎から出てきた。

「やれやれ、やっと終わったぞ」

「論文、完成したのか？」

「ああ、まあな」

コナンは博士にサンドイッチの皿を差し出した。

「お腹空いてるだろ？」

「ああ、ありがとう…やれやれ、本当にやっと、完成したよ」

博士はサンドイッチをぱくりと食べた。

「ん…これは旨いな。新一、お前が作ったのか」

「作ったってほどじゃねえよ。ただ材料を切って挟んだだけだから」

「いやいや、それにしても大したものじゃよ。それにお前が淹れる

コーヒー、あれは、わしや哀くんがいくら方法を真似てもどうにもかなわん」

「コーヒーに関しちゃ、ガキの頃、親父からさんざんしごかれたかな。香りをかいただけで捨てられたりして…ま、それから十年もやってるから」

「じゃあ、博士の紅茶淹れてくるわね」

「おお、すまん」

哀は台所へ向かった。

「ところで、哀くんから聞いたんじやが、妃さん大変なんだそうじやな」

「ああ…完全に疑いが晴れることはたぶんないだろう」

「ふむ…」

博士は持っていた紙の束をコナンに差し出した。

「これは？」

「新東京病院の職員録のコピーじゃ。さっきファックスで送ってもらったんだがな」

「な…どうして博士が？」

「昨夜哀くんから聞いてな、ちょっと学生時代のとてを頼って調べてもらったんじや」

コナンは驚きと疑惑の視線に対して、博士はまったくいつものよ

うににこにこ微笑んでいた。

「どうしたの？」

哀がお盆を持って戻ってきた。

「新京東病院の職員録を博士が…」

哀も一瞬意外という顔をしたが、すぐに普通に戻った。

「ほんとに手に入れてくれたのね」

「ああ、厚生労働省の知り合いに頼んで探してもらったんじゃ」

コナンは紙をめくる。そして薬剤部と書かれたページを見た。

そこに、期待していた奈良井剛市の名前はなかった。逆に、予想だにしていなかった名前が記されていた。

（森田宗太郎？）

真実は重く醜く汚く

「森田宗太郎…」

コナンはつぶやくようにそう言った。

「どうということ?」

哀も意外な名前に驚く。

コナンは焦る心を抑えて、表紙の部分をめくった。

「昭和二十年4月現在…」

昭和二十年四月、新京東病院薬剤部には森田宗太郎と春江の二人が勤務していたのだ。

「ちゃんと昭和十七年分からあるぞ」
博士が少し自慢げに言う。

「あ、ああ」

コナンは紙をめくっていった。

「昭和十九年…同じだ」
さらにめくる。

「昭和十八年…」

昭和十八年四月現在の名簿、そこには森田宗太郎と種子田春江の名があつた。

「おい、たしか十周年記念誌の発行日は昭和十八年十月一日だったな」

哀はスキャンしたデータをプリントした紙をめくった。

「ええ、そうよ。そして二人が結婚したのは…」

同じくプリントした戸籍の写しを見る。

「昭和十八年五月三日」

「春江さんの旧姓は種子田だな?」

「そうよ」

「こ、これは!」

日曜日の午後三時、妃法律事務所にも近いショッピングセンターの屋内ベンチ。

買い物客で八割がたの席が埋まっている。

コナンは着慣れたブレザーだったが、哀は目にも鮮やかなブルーのセーラー服に深紅のリボンが映えている。

「しかしなあ、お前、その格好、かなり目立ってるぞ」

「そうかしら？」

「一体どうしたんだよ、地味な格好しかしていなかったお前が急に」「いいじゃない。私だって女の子なのよ」

哀はにこにこ笑っていた。

ふうとコナンは息をついた。

哀はさつさと本題に入った。

「ところで、貴方の推理、本当に妃先生に披露するの？」

「もちろん」

「子供のすることじゃない、分をわきまえなさい、とか言われるんじゃないかしら」

「かもな……だけど、三人の秘密をこのまま墓場まで持って行くことしてる妃先生の気持ちを思うとな……」

「でもね、本当に、小学一年生の子供のやることじゃないわよ」

「……お前、いつから、本当に小学一年生になったんだ？」

「実体はともかく、外見はどうにもならないでしょ」

「毛利小五郎が知っているのなら、妃英理だって知っているのさ、俺の正体を」

「それはそうかもしれないけど……」

「……わかるよ、お前の気持ちは。確かに、心に封印した秘密を、100%事情を知っているわけでもない他人に、今さらあれこれ詮索されるのは気分のいい物じゃないかもしれない。でもな……」

コナンは、言い終わらないうちに、哀の表情が厳しくなったこと

に気がついた。

「…本当にわかってる？ 私の気持ち」

「え？」

一瞬二人は、言葉失ったまま見つめ合った。

「コナンくん」

光彦だった。

「わあ、何、灰原さん、すてき！」

歩美が哀に駆け寄った。

哀はすかさずいつもの表情を取り戻した。

「続きは後で」

「あ、ああ」

コナンはそう答えるのが精一杯だった。

「え、何、どうしたの？」

歩美は、二人の微妙な表情にすっかり気づいていた。

「二人とも、どうしてここに？」

哀は歩美の質問には答えず、逆に質問する。

「僕たち、コナン君に呼ばれたんですけど？」

光彦が答えた。

「え？」

「ああ、そうだ、俺が呼んだ。これからちょっと付き合ってもらおう」

コナンもすっかり表情を整えていた。

「付き合っつてどこへですか？」

「お前らが知れたがつっていた事件の現場にだよ」

そんなことは聞かされていない哀。

「ちょ、ちよつと？」

「いい機会さ。俺と灰原がここ数日何をしていたか、そしてなぜお前達を遠ざけていたのか、それをこれから教えてやる」

じろりと光彦と歩美を見た。

「ただし、二人は黙って話を聞くだけだぞ。まあ、言わなくてもすぐにわかるだろうがな」

今一つピンとこない歩美に対して、光彦はうんとうなずいた。
「わかりました」

「あらまあ、四人で来たの？」

事務所通用口で出迎えた英理の第一声はそれだった。

「うん、どうしても話を聞きたいって言うから連れてきちゃった」

コナンは子供モードでにこやかに言う。

「そう…ところで、灰原さん、ずいぶん気合いの入った服装ね。何かいいことでも？」

「今まで地味すぎるって言われてたので、思い切って」

「そう…女の決意を見せるには、そのくらいやらないとね」
ぎくつとする哀。

「あら、凶星？ ふふ…」

英理は楽しそうに笑って、コナンをちらりと見た。

「さ、上がってちょうだい」

英理の言葉が理解できない光彦と歩美であったが、コナンの言葉に素直に従って黙っていた。

応接室の扉には警視庁の立ち入り禁止のテープが未だに貼られている。四人は英理の執務室に案内された。執務室には秘書の栗山緑が待機していた。

「さ、掛けてちょうだい」

ソファにコナンと哀、光彦と歩美がそれぞれ並んで座る。

「栗山さん」

「はい」

「この子たちにジュースを…そうそう、この間頂いた、温州みかんジュースを」

コナンが立ち上がった。

「あ、いえ、お茶にしてください」

「え？」

「僕たちは子供だけど、今日の話は大人の話なんだ」

英理は真面目な表情でコナンを見た。

「そう…わかったわ。じゃあお茶を淹れてくれる？」

「あ、はい」

緑は不思議そうな顔をして出ていった。

英理も腰掛けると、仕事モードの顔になった。

「それでコナンくん、今日私に話したい大人の話ってなあに？」

「今回の事件、僕たちなりに調べたんだ」

「森田高光さんから聞いたわよ。昨日、家に行っただんですって？」

コナンはゆっくりとうなずいた。

緑がお盆を持って戻ってきた。そして五人の前にお茶を置いた。

コナンは茶碗を手にとって一口飲んだ。

「三年前の事件、そして今回の事件、そもそもは五十年前、満州であつた出来事が原因なんだ。昭和十八年五月、新京東病院の薬剤部に勤務していた森田宗太郎さんと種子田春江さんは結婚した。そして高光、千里の二人の子供をもうけた。昭和二十年八月、ソ連軍が日ソ不可侵条約を無視して満州に侵攻、一家は大連に逃れた。ここからはあくまで僕の想像だけど、おそらく夫の宗太郎さんは戦闘で怪我をしてしまったんだ。日本に帰ることができないほどの重傷だった。そこで宗太郎さんは、一緒に避難してきた薬問屋のセールスマン、奈良井剛市さんに、自分の名前、森田宗太郎を名乗って一家を日本に連れ帰ってほしいと頼んだ。年格好が同じで独身だった奈良井さんは、森田宗太郎を名乗り、一家を連れて帰国の船に乗った。やっこの思いで日本に帰ってきてみると、森田さんの実家は空襲で焼失し、父親以下親族一同ごとく亡くなっていた。つまり、森田さんの顔を知っている人は皆死んでしまっていたんだ。満州に残してきた森田さんは、もう助からないと思えるような重傷だったから、二人は森田さんは死んだものと思っていた。そこで以前から春江さんと親しく付き合っていたであろう奈良井さんは、以後

森田宗太郎と名乗って生きていくことを決意し、春江さんもそれを受け入れた。二人は郊外に土地を買い、以後米の専業農家として堅実な人生を送った。ところが、本当の森田宗太郎さんは生きていたんだ。何年か遅れて日本に戻ってきた彼は、一家四人が農家として堅実な人生を送っている事を知る。名乗り出ることはできなかった。奈良井剛市の名で生きていくしかなかったんだろう。本当の奈良井さんが堅実な人生を送ったの対して、本当の森田さんの人生は荒れていた。昭和四十七年には余罪五十件以上という空き巣の罪で捕まっている。服役した後の本当の森田さんの人生についてはわからないけれど、七十歳を過ぎて、死期が近いことを悟った彼は、森田家を訪ねた。本当の奈良井さんが招いたのかもしれない。そこで、長年入れ替わっていた二人が話をしているうちに、何らかのはずみで口論となり、本当の森田さんは包丁で怪我をしてしまった。このままでは二人が入れ替わっていたという事実が明るみに出てしまう。本当の森田さんにとって、自分の子供である高光さんや千里さんに、本当の父親が空き巣の常習犯だったと知られることはどうしても避けない。もちろん本当の奈良井さんとして、自分が二人の父親ではなかったと知られるのは避けない。そこで冷静になった二人は、空き巣とその空き巣に過剰防衛で怪我を負わせた者、というシナリオを作って、二人共に罰せられることで秘密を守ろうとしたんだ。だから本当の森田さんは、病院でそのシナリオに沿った供述をした。一方の本当の奈良井さんは、必死だったので覚えていないという曖昧な供述をすることで、過剰防衛による障害容疑を被るつもりだったところ、本当の森田さんは容疑が急変して亡くなってしまった。しかも、本当の森田さんが怪我をした包丁からは、奈良井剛市、つまり本当の森田さんが握っていたことを示す指紋が検出されていた。公判が始まった場合、本当の奈良井さんにとって、有利な状況証拠があるにもかかわらず、あえて過剰防衛による障害致死の罪を被るような態度を取り続ければ、ひょんなことから二人の関係が明るみに出ないとも限らない。本当の森田さんの死後、詳しい事情を本当

の奈良井さんから打ち明けられた妃先生は、正当防衛による無罪を勝ち取るほうが、二人の關係に疑念を抱かれなくてすむのだと、本当の奈良井さんを説得した。結果、裁判は妃先生の狙い通り、正当防衛による無罪判決が出て、そのまま確定した」

コナンはそこで一息ついて、お茶を飲んだ。

目を閉じてじっと聞いている英理。

ぽかんとしている歩美。コナンをじっと見つめる光彦。

「春江さんは、本来の夫である、本当の森田さんとの約束を破った本当の奈良井さんのことが許せなかった。彼女はおそらくこう思ったんだ。連勝記録を伸ばしていた女弁護士に口車に乗せられて、約束を破ったのだと。そして妃先生に対する深い怨みを抱いた。その後三年は大きな問題もなく過ぎ、本当の奈良井さんは森田宗太郎として病気で亡くなった。春江さんもまたガンにかかっており、もはや余命いくばくもないことを知る。強いモルヒネ錠が処方されていたから、ガンの痛みは相当のものだったはずだ。彼女はガンの痛みから逃れるため、またかねて抱いていた妃先生への怨みを晴らすべく、妃先生に疑いがかかるようにして自殺したんだ。それも農家なら比較的容易に手に入るであろう農薬は使わず、満州から密かに持ち帰っていた青酸カリを使って」

コナンは言い終わって、一息つくとまたお茶を飲んだ。

英理はゆっくりと目を開けた。

「素晴らしい推理だわ。でも、仮にコナンくんが推理したことが事実だとしても、春江さんの自殺を証明することにはならないわね」

「はい、そうです」

「つまり、貴方の推理を警察、検察に披露したところで、私への処分が変わる可能性はまったくないのよ」

「わかっています。奈良井剛市さん、森田宗太郎さん、春江さん、この三人が守り抜いた秘密は、僕も、灰原も、このまま墓場まで持っていくます」

英理は、ふう、と一つ息を吐いた。

「甘いわね……いえ、優しすぎる、とでも言うのかしら。現実だね、もつとどろどろとして醜く汚いものなのよ」

英理はお茶を一口飲んだ。

「森田宗太郎と名乗っていた人物が実は別人であったこと、奈良井剛市と名乗っていた人物が本当の森田宗太郎だということ、それは貴方の言うとおり。でもね、森田宗太郎さんの本当の名前は武市明。奈良井剛市という名前は、新京から逃れるさいにソ連軍に撃たれて死亡した武市さんの同僚の名前。本当の森田さんが武市さんに身代わりになってもらったのは、病気で怪我でもない、彼がソ連軍に追われていたからよ。兵舎から金を盗もうとしてソ連兵に見つかり、兵士数人を殺して逃げたから。本当の森田さんは、病院勤務時代から薬を横流しするなど手癖が悪かった。結婚後そのことを知った春江さんの相談に乗っていたのが武市明さんというわけ。ソ連兵に顔を見られていた本当の森田さんは、もはや逃れられないと覚悟した。そこで、家族だけは無事に日本に帰すために、武市さんに身代わりを依頼した。武市さんは、殺人まで犯してしまった本当の森田さんが、自首することを条件に依頼を受諾したのよ。本当の森田さんはすでに亡くなっていた奈良井剛市さんの名を名乗ってソ連軍に自首した。だから、武市さんも春江さんも、本当の森田さんは死んだものと思っていたの。ところが本当の森田さんは、なぜか殺されずにシベリアに送られた。このへんの詳しい経緯はわからないけれど、とにかく彼はシベリア抑留を生き抜いて、奈良井剛市として生きて日本に帰ってきた。その後の彼は、もっぱら空き巣を繰り返した。一度捕まって服役した後も、彼はふたたび空き巣を繰り返した。そして年を取って足腰の弱ってきた彼は、警戒の手薄な農家を狙うようになった。そう、森田邸に侵入したのは偶然だったのよ。そして武市さんに見つかった。二人は、お互いに相手のことがすぐにわかったそうよ。本当の森田さんは、武市さんから子供たちの成長ぶり、6人の孫がいることなどを聞かされる。自分の人生を恥じた彼は、発作的に包丁で割腹自殺しようとした。だから包丁には、奈良

井剛市が持っていた、という指紋が残ったの……後はだいたいコナンの推理したとおり。春江さんが私に怨みを抱いた理由は、彼女と会ったときにその視線でわかったわ。私が自分の無敗記録を伸ばすために色香で夫をたぶらかした、とでも思っただんでしょ」

真実は、コナンの想像よりも重く、醜く、汚いものだった。

蘭を裏切ることになっても

コナンは腕を組み、考えていた。

『殺人まで犯してしまった本当の森田さんが自首することを条件に依頼を受諾したのよ。本当の森田さんは、すでに亡くなっていた奈良井剛市さんの名を名乗ってソ連軍に自首した』

言葉で言ってしまうえばたったこれだけの事に、いったいどれほどの人の想いが凝縮されているのだろう。

「本当の森田さんがソ連軍に自首すること、それが身代わりの条件だったってこと、春江さんは知っていたの？」

コナンは素直に疑問を口にした。

英理の鋭い視線が返ってくる。

「コナンくん、私たち弁護士の仕事は、必ずしも真実を暴き出すことではないのよ。法律の範囲内で依頼人の利益を最大限に確保すること。それは探偵も似たようなものじゃなくって？」

英理の口調は静かだった。しかし、だからこそ逆に、そこには途方もない重みがある。

「ごめんなさい……」

しゅんとなるコナンを見て、英理は微笑みを取り戻した。

「確かに、春江さんの自殺が立証されないと私に対する殺人の容疑は晴れない。でもね、その程度のことを恐れるようでは、最初から弁護士の資格なんかないのよ」

そう言つと、英理は立ち上がった。そして、机の引き出しから分厚い封筒を取り出した。

「あなた達が私のために一生懸命調べてくれたこと、それには感謝しているわ。これは本当よ。でもね、真実を知ろうとする心の欲求が強ければ強いほど、それをどこかで抑えこむ、もっと強い意志も必要なの。これは、社会が存在しなければ一秒たりとも生きてはいられない人間の、定めというものよ」

英理はコナンに封筒を差し出した。

「これはあなた達へのお礼。人からいただいた図書券だけど、皆で分けてね」

「あ、ありがとう…」

英理は穏やかに微笑んでいた。

妃法律事務所からの帰途、話の内容の四分の一も理解できなかった歩美は黙りこんだまま。足取りも重そうだった。光彦もまた、ひたすら何かを考えている。

「おい、光彦」

前を歩いていたコナンが振り向いて言った。

「え、何です？」

「これを」

英理から貰った封筒を手渡す。

「こ、これ」

「お前と歩美で分けてくれ。今日付き合ってくれたお礼だ」

「ちょ、ちよつと、これ、この厚さからすると、一万円や二万円じやありませんよ」

「じゃ、また明日」

コナンは小走りに交差点の横断歩道を渡って行った。哀はあわててコナンの後を追う。

信号が点滅を始め、光彦と歩美はうす暗い歩道にぽつんととり残された。

「な、何なんでしょうね」

「光彦くん…」

歩美が光彦の腕を抱きしめた。

「あ、歩美ちゃん？」

「もう、お父さんたら、呼び出しといていないんだから」

蘭はショッピングセンターのテラスで小五郎を捜していた。

と、コナンがやってきた。

「あ、コナ…」

その後ろから、ブルーのセーラー服に赤いリボンの哀が現れた。

蘭は思わず柱の陰に隠れた。

（ち、ちよっと、何で私が隠れなきゃいけないのよ）

コナンと哀は蘭の隠れた柱から一テーブル離れた場所に座った。

「どうしたんの？ 反省でもしているの？ 工藤くん」

（く、工藤？）

驚愕の蘭。

「反省というか…俺もまだまだなあって、そう思ったただだよ」

哀の顔をじっと見るコナン。

「な、何？」

「悪かったな、変なことに付き合わせちまって」

「それを言うなら円谷くんと吉田さんでしょ。どうしてあの二人を？」

「そりゃ…あいつらに、この一件は興味本位で首を突っ込むような事件じゃなかったんだって教えたかったのさ。それと…」

「それと？」

「いや、何でもない」

哀はふうと息を一つ吐いた。

「私は、結構楽しかったわよ」

「そうか？」

「ええ」

コナンの視線は強かった。

「ど、どうしたの、さっきから」

「お前、事務所へ行く前に、『本当にわかってるの？ 私の気持ち』」

って言ってたよな」

哀ははつとした。

「あ、ああ、あの事？ …… 気にしないで」

「昨日、そして今日、お前がその着慣れない服に込めた女の決意ってのは何なんだ？」

哀は言葉に詰まった。

「何て言うのかな、その、はっきりさせておきたいんだ… 俺も本当の気持ちを言う。だから、お前も本当の気持ちを言ってみてほしい」

「… 自分の言ってることの意味、わかってる？」

「もちろん」

哀は目をつぶり、そして開いた。

「工藤くん、貴方は、私にもチャンスがあると言った。でも、それが私を死なせないためだけの方便だったとしたら、こんなに、こんなに残酷なことはないのよ、わかってる？」

「そうだな…」

「私だってわかっていたわ… 貴方には相思相愛の毛利蘭さんがいるというのに」

蘭は絶句した。

コナンは真面目な顔だった。

「相思相愛？ 本当にそうなのかな」

「え？」

蘭もぎくりとした。

「何だかさ、周りはそう思いこんでいるみたいだけど、俺は、本当に蘭のことが好きだったんだろうか、って思うんだ、この頃…」

コナンの視線は遠くに飛んだ。

「… いつの頃からかな… 同級生と話がかみ合わなくなったのは… そう、小学校二・三年の頃からかな… 何しろその頃の俺は、コナン・ドイル全集やら横溝正史全集、江戸川乱歩全集とかさ、とにかく親父の本を読みあさる毎日だったんだ。芸能人だのテレビアニメだのゲームだの、他の連中の話なんかまったく興味がなくて… 気が付いた

ら、友達と言えるのは蘭しかいなかったんだ。確かに蘭は俺の話を聞いてくれた、でもそれは、俺の話に興味があって聞いていたんじゃない。蘭だって、本当はもっと他の友達みたいな話をしたかったはずだ。俺もそれはわかっていたさ。でも、蘭は黙って俺の話を聞いてくれるから、俺は蘭に甘えていたんだ。情けないことに、今頃になってわかったことだが、俺は、言いたいことを言っていたように思えてその実、これは蘭には難しすぎる、とか、あいつにこんなことを言っても理解できないだろう、とか、知らず知らずに自分の言ってることをコントロールしてたんだ。コントロールしなくてもよかったのは親父と博士くらいのもさ。俺がこの格好になるまで、それはもう当たり前のことで、全然苦にもならなかった。というか、コントロールの習慣そのものを認識していなかった。だが、歩美や光彦、元太たちに出会って、俺はそのコントロールの存在ってやつを、いやというほど思い知らされた」

体の震えが止まらない蘭。

「そして」

コナンは視線を引き戻して、哀の眼にピントを合わせた。

「お前に出会って、俺は生まれて初めて、同い年、しかも女の子、コントロールをまったくしなくてもいい話し相手を見つけたんだ。お前は、俺が何を話しても的確に答えてくれる、いや、期待した以上の返答が返ってくる。そしてお前の話は、俺の知らない、時には圧倒されるようなレベルの高い話だ。そんな話をしてくれるのは身近には親父か博士くらいしかいない。快感なんだ。話していてこんなに楽しい相手は他にいない」

哀は乾いた口を開いた。

「貴方、本当に、自分が言っていることの意味、わかってる？」

「もちろん」

「その先を口にすれば、それは…貴方の言葉を信じて待っている、蘭さんを裏切ることになるのよ」

「そうだな…確かにそうだ。だが、三ヶ月前くらいから言っ

よ。待つてくれなんて、一言も。それどころか、最近じゃ苦痛でしかたないんだ、蘭に電話するのは…何で馬鹿正直に俺のことなんか待つてるんだって。ひどいよな…本当にひどい言い方だよ…だけど、どうしようもない本当のことなんだ」

哀は思わず天を仰いだ。

「…つらいわね、お互い」

「何が正当防衛よ、あの人は最初から狙って彼を殺そうとしたのよ」「え？」

あまりにも唐突な言葉。哀はびっくりしてコナンに視線を戻した。「お前にも話したろ。春江さんが言っていた言葉だ。おかしいとは思わねえか？」

「な、何？ いきなり」

「この言葉を聞いていたから、俺は、奈良井さんが怪我をしたのは、森田さんと口論の最中にどちらかが激高した結果の事故だと、そう思っていた。だが実際は、奈良井さんが自殺をはかったんだよ。森田さんはそれを押し止めるのに必死になったはずだ。そんな状況なのに、どうして『狙って彼を殺そうとしたのよ』なんて言葉が出てくるんだ？」

「たしかにそうだけど、それが…」

「前半の正当防衛という部分と、後半の殺そうとしたという部分、これは言ってる対象が違うんだよ。後半はおそらく、本当の森田さんがソ連軍に自首したときのことを言ってるんだ」

「どういうこと？」

「武市さんも春江さんのことを愛していたんだ。しかし、本当の森田さんに彼女を奪われてしまう。ところが本当の森田さんは、手癖の悪い男だった。春江さんもそれを結婚後に知って悩んでいる。だから武市さんは、本当の森田さんがソ連軍に追われていることを利用して彼を排除しようとした…いや、もしかしたら武市さんはソ連軍に通報したのかもしれない。これから兵舎に侵入する奴がいる、と」

「そんな…」

「自首が身代わりの条件だということを、武市さんは春江さんに言っていないかったんだろ。おそらくこう言っただ。自分は罪を償うために自首するから、身代わりになって家族だけは日本に連れて帰してほしい、そう森田に頼まれた、と」

「春江さんは、その真実を五十年も後になって初めて知らされた、というわけね」

「そういうことだ」

哀は惘然とした表情だった。

「ふ…この話に何の意味がある、てな顔だな」

「そうよ。脈絡がないじゃない」

「人を本当に愛するつてのは、それほどの覚悟がいることなんだ。たとえ他人を死に追いやつてでも」

瞬間、哀の意識は飛んでいた。驚愕なのか感動なのか、それさえもわからない彼方へ。

「戦後の森田一家の写真を見ただろ…幸せそうだった…高光さんの様子を見てもそれはわかる。一家は、本当に幸せだったんだよ。武市さんは、その幸せを守ることに人生の全てを費やしたんだ…死に追いやった本当の森田さんへの慚愧の思いを、自らその名を名乗ることで、一人背中に負ってな…」

哀はじつとコナンの次の言葉を待っている。

「武市さんは、春江さんを心から愛していた…だからこそできたことなんだ」

哀は下を向いてばそつと何か言った。

「ん？」

「本当に、いいの？」

哀はきつと顔を上げた。

「蘭さんを裏切ることになつても」

哀の思い詰めた表情をよそに、コナンはまるで落ち着き払っていた。

「正直なことを言う。そこまでの覚悟はできていないんだ、俺は…
だけどな、俺は…」

「待って！ その先の言葉を言っただけだ。彼女にも言ったことはないんだよ」

「あ、ああ」

「覚悟ができていないって正直に言ってくれたこと、今の私はそれだけで充分」

「…その意味を教えてくださいな」

「だって、私も覚悟できてないもの。他人の悲しみを知ったうえで、自分の幸せを追求するということの覚悟を」

見つめ合う二人。

「時間がかかりそうだな」

「そうね、お互いに」

「もつとも、その間にまた心変わりしちまうかもしれないがな」

「それもお互い様よ」

蘭は硬直したように立ちすくんでいた。涙が溢れて止まらなかった。

「歩美ちゃん、いったいどうしたんですか？」

米花駅前のベンチに光彦と歩美は座った。すでに日はとっぷりと暮れ、二人は街灯の白い光に照らされていた。

歩美は、しょんぼりとうつぶしている。

「気分でも悪いんですか？」

「うつん、怖い」

「怖い？」

「コナンくん…私は、コナンくんは天才だと思ってた。ものすごく頭のいい…」

「ええ、そうですよ。彼はまさに天才です」

「違っの」

「え？」

歩美は顔を上げた。

「コナンくん、コナンくんは大人なのよ」

「え？」

「今日のコナンくん、あの話、あれは、小学一年生にできることじゃないもん！」

「え、う…ま、まあそうかもしれませんが…」

「私、私…コナンくんがどこか遠いところに行っちゃった、って思ったの。目の前にいるのに」

光彦はしばらく考えていた。そしてにつこり笑った。

「いいじゃないですか」

「え？」

「コナンくんの正体は何であつたとしても」

「光彦くん？」

「僕は、コナンくんの友達ですから。たとえば、彼が別の星からやって来た宇宙人だったとしても」

「灰原さんは？」

「もちろん、灰原さんもです」

そんな光彦が、ものすごく頼もしく見えた。

「光彦くん…」

見つめられて照れてくる光彦。

「や、やだなあ…そそそんなに深刻に考えることありませんよ…それとも、このままコナンくんと灰原さんと絶交しますか？」

「何で？ 何で絶交しなきゃいけないの？」

「絶交したくないんだったら、気にすることなんかないじゃありませんか。二人の正体なんて」

「う、うん…」

「少なくともあの二人は悪人じゃない。それは歩美ちゃんだってわかるでしょ？」

「そうよ。二人とも私や光彦くんや元太くんを、いつだって助けに来てくれるもん」

「そういうことですよ」

「うん、そうだよ。ありがとう、光彦くん」

明るさを取り戻した歩美。

「いやあ、そんな…ははは…」

しかし、歩美に向けた笑顔の裏で、光彦の頭脳はフル回転していた。

（まずは写真…確か学校の図書室に…）

それぞれの成長

英理は事務所の明かりを消し、通用口から出できた。

鍵をかけ、すぐ階上の自宅へ引き上げようと一歩踏み出したとき、とぼとぼとやってくる人影に気がついた。

「お母さん……」

蘭だった。声を聞くまで娘だと気がつかなかったのは、廊下が暗かったからだけではない。

「蘭、ちよつと、どうしたの？」

目のまわりは泣きはらして腫れあがっており、涙が流れたままぬぐってもしないひどい顔。全身からは悲痛なオーラが放散されていた。

「とにかく、あがりなさい」

手を引いて半ば無理矢理自宅に連れ込み、とにかく居間のソファに座らせた。その間、蘭は何も言わなかった。

英理はタオルを湯に浸してしぼり、蘭に差し出した。

「ひどい顔よ。とにかく顔を拭きなさい」

「……ありがとう」

口から抜け出たのは、まるつきり生気のない声。しかし、ぐしぐしと顔をぬぐう手の動きは生々しかった。

「それで、いったい何があったの？」

このような状態の人間を相手にする場合、こちらは徹底的に冷静でなければならぬ。そこは弁護士たる者の勝手知ったところだった。

「私……私……」

続く言葉は口から消え出て、よく聞き取れない。

「安心しなさい、蘭。何があったのかは知らないけれど、私はあなたの味方だから」

とりあえずそうは言ってみたものの、この落ち込みようはただこ

とではない。

「…新一に…」

「新一くん？」

こくりと首を動かす。

「新一くんがどうかしたの？」

「ふられたの」

ぽつり、と言った。

「う…」

また涙があふれ出す。ゆるゆるとタオルで目を覆う。

「どうして、ふられたなんてわかるの？ 彼にそう言われたの？」

その程度の事態だったことに、英理は心からほっとした。

「好きな子ができたって…」

ぐすぐす泣く蘭。

ため息が出そうなところを堪える英理。思い当たることは一つしかなく、その推測は当たっているだろう。

「蘭、あなた、コナンくんと哀ちゃんの会話でも聞いたんでしょ」

全身でぎくつとする蘭。

「ど、どうして…まさか、まさかお母さんも知ってたの？ コナンの正体！」

「そうね。私はあの人から聞かされたんだけど」

「お父さん？」

「ええ」

「ひどい…ひどいわ。二人して私をだましてたなんて！」

「別にだましてたわけじゃないわよ。コナンくんがあなたに黙っているのに、私が横から教えるわけにはいかないでしょ」

「何で？ 何でなの？ お父さんもお母さんも知ってるのに、どうして新一は私に教えてくれないの？」

「うぬぼれるのもいいかげんにしなさい！」

突然の厳しい言葉に、蘭の顔は凍りついた。

「蘭、あなた、新一くんの何なの？」

「な、何って… 幼なじみよ」

「それだけ？」

「そ、それだけって…」

「じゃあ単刀直入に尋ねるわ。あなた、新一くんを愛してる？」

「あ愛してるって… 別に… そんな…」

「その程度のことしか言えないのなら、新一くんのことはずっぱりあきらめなさい」

「ひ、ひどい、ひどいわ、いきなり…」

「新一くんはね、ある犯罪組織に殺されたことになってるの。だから、生きていることが発覚したら、また命を狙われるのよ。それで彼は正体を隠しているの。周囲の人間に危害が及ばないようにね… だから、彼には今、幼なじみの女の子とおままごとしている余裕なんてないの」

「おままごと？ ひどい！ いくらお母さんでもひどすぎるわ、その言い方！」

「だってそうじゃない。愛してるって即答できないんですもの」

「そ、それは…」

ふうとため息が出してしまった。

「あなた子供のときから、新一くんに対して文句ばかり付けてたわね。新一がホームズのことばかり話すう、とか、新一がお洋服に気が付いてくれない、とか… いつもいつも、新一くんに不平不満ばかり…」

「だって、本当のことだもん」

「新一くんが、どうしてあなたの趣味に合わせなければならないの？」

「え…」

「新一くんだって、自分と趣味が合う人ときあいたいわよ。あなた自身がそうであるように」

蘭の脳裏に、コナンの言葉が響き渡った。

『お前に出会って、俺は生まれて初めて、同い年、しかも女の子、

コントロールをまったくしなくてもいい話し相手を見つけたんだ。
お前は、俺が何を話しても的確に答えてくれる、いや、期待した以上の返答が返ってくる…そしてお前の話は、俺の知らない、時には圧倒されるようなレベルの高い話だ。そんな話をしてくれるのは身近には親父か博士くらいしかいない…快感なんだ。話していてこんなに楽しい相手は他にはいない」

「そ、そんな…」

悲嘆がどこかに飛んでしまった蘭の表情を見て、英理は、大丈夫だ、と思った。

「どうやら、わかってきたようね」

英理は姿勢を正した。

「今日、コナンさんと哀ちゃんがここへ来たのよ」

「えっ？」

「私が巻き込まれた例の事件、自分達で調べたって言ってね」

「やっぱり首突っ込んだのね」

「私は、亡くなった女性、その家族のことについて、知っている秘密をこのまま墓場まで持って行かなければならない。たとえ殺人の疑いをかけられようと。その事に気を遣ってくれたのよ。無駄と知っていながら調べずにはいられなかったんでしよう…私が負った重荷を同じように背負ってまで…うれしかったわ、そんな二人の気持ち」

英理の言葉の意味はわかってても、意図が読み取れなかった。

「あなたにも同じことをしてほしいなんて、夢にも思わないわよ。

いい、これはコナンくんだからできること。そして哀ちゃんだから、そんな彼と同じ重荷を共有することができるの」

「わ、私だってコナンくんと一緒に調べてくれって言えよ！」

「あなた、彼がそう言いたくなるような存在なの？」

「え…」

「言われることを待っているだけなら、誰でもできることなの。さつきも言ったように、あなたはうぬぼれているのよ。新一くんは、

どうしてあなたを特別扱いしなければならないの？」

「だって…それは…」

「今までは、特別に扱ってくれていたかもしれない。子供のおかげで、とそうだったわね。でも、コナンくんは、あなたの知っている新一くんから一步も二歩も、いいえ、百歩も二百歩も、大きく成長しているのよ。そして、心を開いて素直に話せるパートナーとも出会った。蘭、あなたは子供のときから、新一くんから与えられることしか知らない。しかも、それにすら不平不満ばかり言ってるじゃない。子供の時から全然成長してないあなたを、新一くんが特別扱いする理由なんてどこにもないのよ、もうすでに」

「いったい、私にどうしろって言うの？」

立ち上がって叫ぶ蘭。

「自分で考えなさい」

「それがわからないから聞いてるんじゃない！」

「他人に教えられなければ何もできない…その時点ですでに、あなたに勝ち目はないわね。あの灰原哀ちゃんには」

哀には勝てない、その事実を言葉で突きつけられて、蘭はただ立ちつくすしかなかった。

「蘭、冷たいことを言っているようだけど、これは私があなたの親だから、あなたのためを思って言うのよ。いいこと、もしもあなたに勝ち目があると万全の自信を持って断言できるなら、哀ちゃんに真正面から宣戦布告なさい。私はあなた達の正体を知っているからね。逆に、髪の毛一本ほどでも不安があるのなら、おとなしく撤退しなさい。そうでないと新一くんの迷惑よ」

コナンは哀と一緒に阿笠邸まで歩いてきた。

「じゃ、また明日」

コナンは片手を上げて立ち去っていった。いつもと同じような仕

草で。哀としてはもうちょっと演出のほしいところだが、
(彼らしいのよね)

などと無理矢理納得するのであった。

哀は、今日の事は一生忘れないと心に誓いながら、コナンが見えなくなった後、神妙な顔を作って玄関へ向かった。

さて、博士に今日の出来事を何て話そうか…

「おい、灰原」

「きゃ！」

背後にコナンがいた。

「くく工藤くん、かか帰ったんじゃ…」

「ああ、悪い。今晚泊めてくれ」

「えええ？」

「蘭が部活で帰れないんだとさ。おっちゃんも何か警視庁で用があるとかで」

コナンは携帯電話をポケットにしまった。

「ど、どうしたのよ、その携帯」

「ああ、おっちゃんから預かってきたんだ。緊急の連絡があるかもつて。持ってて正解だったよ」

哀は乱れた呼吸を整えた。

「そ、そう…居候もなかなか大変ね」

「悪いな」

「ま、まあ、そういうことなら…って博士に言いなさいよ」

「ん？ 何うるたえてるんだ？」

「べ別に…その代わり、食事作るの手伝ってよ」

「ああ、もちろん」

月曜日は雨だった。

コナンは朝早く起きていったん事務所に行き、着替えてから学校

へ向かった。

哀は、これまでよりずっと明るい、黄色の服を着ていた。それでも他の女の子に比べたら全然地味なほうであったが、クラス全員、誰一人として哀の変化に気が付かない者はいなかった。コナンは自分だけがその理由を知っていると思っていた。ところが、

「灰原さんは昨日ね、まっ青なセーラー服着てたの。真っ赤なりボン付けて。かつこよかったわよ」

などと、歩美が女の子の間を解説して回っているのだった。コナンは思わず哀を見たが、哀は手のひらを見せるだけであった。

そしてこの朝、クラスではもうひとつ意外なことが起きていた。

元太が学校を休んでいたのだ。理由は降っている雨に関係があった。飛行機が欠航しているために帰れないというのである。彼はなんと沖縄にいた。コナンたちはもちろん、クラスの誰一人として、彼が沖縄に行ったことなど知らなかった。ただ一人光彦を除いて。

昼休み、その光彦は給食を急いで食べると図書室へ向かった。

図書室は数人の女子生徒が静かに本を読んでいるだけで、外の雨の音がよく聞こえるほど静かだった。

学校の歴史コーナーにある各年度ごとのアルバム。

「これだ」

光彦は小声でつぶやいた。

一冊抜き取りめくっていく。そして一枚の写真を発見した。

光彦の視線は写真に吸い込まれ、顔はみるみる厳しく険しくなった。

「やっぱり」

そのアルバムを持ってカウンターに行くと、女性司書教諭は貸出票の整理をしていた。

「あら、光彦くん」

光彦は図書室の常連である。

「あの、このアルバムは禁退出ですけど、一枚コピーを取りたいんです。すぐそのコンビニでコピー取ってきますから昼休み中だけ

でも貸してもらえないでしょうか」

「そうねえ…一枚だけなの？」

「はい」

「どこ？」

光彦は栞を挟んだページをめくった。

「ここです」

「昔のクラス写真ね…どうするの、こんなもの」

「それは利用者の秘密です」

光彦は堂々と言った。

「ふふ…いいわ。一枚だけなら」

司書教諭は事務室のコピー機でコピーを取ってくれた。

「普通の本じゃないし、特別大サービス」

「ありがとうございます」

妃英理の自宅があるマンションの玄関ホールに小五郎がやってきた。慣れた手つきで呼び鈴を押す。

『はい』

「ああ、俺だ」

ロックが解除されて、小五郎は中に入った。

英理は複雑な微笑みで夫を出迎えた。

「あなた、やることがえげつないわよ」

「蘭は？」

「もうすっかり落ち込んで、学校もお休み。とりあえず、学校には風邪で休みますって電話入れておいたけど」

「そうか」

「コナンさんと哀ちゃんが行く場所を知ってて、そこへ蘭を呼び出したんでしょう？」

小五郎は直接その問いには答えなかった。

「人間、現実を知るつても必要なことだ」

「でもね、実の娘なんだから、もう少しソフトな手もあったと思うけど？」

「俺はがっかりしてるんだ。蘭も今少し成長してると思ったんだがな」

「しかたないわよ。比較する相手が悪すぎるわ」

「宮野志保が掃除屋にマークされているのは紛れもない事実。工藤新一もいつ再びマークされるかもしれん…はつきり言って危険極まりない連中だ。自分の娘はそんな連中とは無関係であってほしいと思うよ。蘭は耐えられるだけの器量を持ち合わせていないんだから」

「そうね…」

「まあ、そんな器量を持つてる奴のほうが特別。工藤新一と宮野志保は特別中の特別だ…化け物級のな」

「蘭は結局、新一くんを普通のレベルでしか把握できないのね」

「俺は、正直期待してたんだがな」

「しかたないわよ。私はね、むしろほっとしてるくらい」

「そうだな…俺もこれで良かったと思ってるよ…で、蘭は今どうしてる？」

「まだ寝てるわ。かなりこたえているわよ」

「そうか…ところで例の件、先方も承諾したぞ」

「あらそう。残り物には満足しないんじゃないかと思ったんだけど」

「先方は必死なのさ。それが毛利姓の重さってやつだ」

「当人もそうなの？」

「さあ、まだ写真すら見てねえが」

「まったく、いいかげんねえ」

「そんなもん、俺に判断できるかよ。全ては蘭次第だ」

「ふふ…いろいろ考えてるのね、あなたも」

「当たり前だろ、親なんだから」

放課後、コナン、哀、光彦、歩美の四人はいつものように揃って校門を出た。雨がまだ、ぱらぱらと降っていた。

「しかし元太やつ、何だつて沖縄なんかに行つてたんだ？」

コナンがまっさきに、おそらくは四人共通であろう疑問を口にした。

ふふふと光彦が笑った。

「実は、昨日の夜遅く電話があつたんですよ、元太くんから。クラスの皆には秘密、つてことで今まで黙ってましたけどね」

「え？ それで？」

「彼はアメリカ軍の基地に行つてたんです」

「アメリカ軍？ 何でまた？」

「アメリカンフットボールの練習を見に行つたんだそうです」

哀がふむと考える仕草をした。

「そういえば、今来日してる彼のおじさん、アメフトのコーチって言つてたわね。だけど、そんなことでわざわざ沖縄に行くなんて、ただごとじゃないわね」

コナンもうなずいた。

「ああ。アメフトのチームなら大学だけでも近辺にいくらでもあるし、米軍のチームつてことなら横田や横須賀にだってあるはずだ」

光彦もうむとうなずいた。

「元太くんのおじさん、元太くんにアメリカンフットボールの英才教育をしようとしてるんじゃないでしょうか？」

「だけどうう、そのおじさんはアメリカに住んでるって聞いたぞ。日本へ帰ってくるつもりなのか？」

光彦が声をひそめた

「実はここだけの話ですが、そのおじさん、元太くんをアメリカに連れていくつもりなんです」

「ええー」

素直に、驚きに驚く歩美。

「ふうん」

これは哀。

「へえ」

これはコナン。

「元太がそう言ったのか？」

「何でも、おじさんに、アメリカに行きたくないかと何度も聞かれたそうです」

哀はなるほどうなずいた。

「そういうことなら間違いなさそうね」

「ああ、間違いない。しかし、あの元太の体格から言うと、確かにいいアイデアかもしれない」

「そうね。こういうところがアメリカのすごいところよ。日本みたいに中学なり高校で偶然才能を発揮するまで待つてなんかいないの。才能のありそうな子は小学生でも幼稚園児でもどんどん英才教育するのよ。それも科学的に正しい方法でね」

「ふ、さすがに経験者は……」

と言いかけて、コナンがあわてて口づぐんだ。

その様子を見てくすと哀は笑う。

「え？ 何ですかコナンくん」

「ああ、いや、何でもない」

歩美は、そんなコナンと哀の微妙な親近感に、しっかりと気がついていていた。

哀は粘り着くような視線に気が付いた。

「な、何？ 吉田さん」

「私、私、今日から灰原さんのこと哀ちゃんと呼ぶ。いいでしょ」
「え？ ええ、もちろんかまわないけど」

「じゃあ、哀ちゃんも、私のこと歩美って呼んで」

「わ、わかったわ歩美ちゃん」

哀はこの唐突な申し出の意味をはかりかねていた。

歩美はうんと自分で自分にならずいた。そしてコナンを見た。哀

を見た。

「コナンくん、哀ちゃん、私たち、友達だよね」

歩美の強い決意の言葉に、コナンと哀は顔を見合わせた。

光彦は事情を知っていたので、

（がんばれ、歩美ちゃん）

と心の中でエールを送っていた。

「これからずっと、ずっと、友達だよね」

コナンも哀も今ひとつ釈然としなかったが、昨日の妃法律事務所での経験が言わしめていることだと理解した。

「もちろん友達だよ、これからずっと。なあ？」

そう言ってコナンが哀に軽く視線を送ると、

「ええ、もちろん」

哀もごく自然に答えるのだった。

歩美はぱつと明るくなった。

「ほんとに、ほんとだね」

「ええ、ほんとよ」

「よかった！」

しかし、一人光彦は明るい顔をしていなかった。

（今の『…これからずっと。なあ？』『ええ』って…この二人の関係はやっぱり！）

「ん、どうした光彦？」

「え、ああ、いえ、何でもありません」

光彦は落ち着いた顔を作って見せてから、新しい話題を持ち出した。

「ところで、言い出すのが遅れてしまいましたか…」

光彦はランドセルから三枚の封筒を取り出した。

「昨日妃先生からいただいた図書券、十万円分ありました」

「十万円！」

素直に驚く歩美。

「僕と歩美ちゃんだけでいただくわけにはいきません。そこで、四

等分して二万五千円ずつ。これでどうですか？」

ふむとうなづくコナン。

「まあ、いいだろう。でも一人二万円だ。元太にも分けてやろうぜ。たまたまいなかったけどな。それでどうだ？」

哀と歩美もうなずいた。

「わかりました。では」

三枚の封筒から五千円分抜き取る。

「どうぞ。元太くんには僕が責任を持って二万円分渡します」

それぞれ封筒を受け取る三人。

しかし受け取る歩美の顔が曇った。

「どうした？ 歩美ちゃん」

「ねえコナンくん？」

「ん？」

「元太くん、本当にアメリカへ行っちゃうの？」

「そうだな…別に今すぐってことはないだろう」

哀は軽く顎の下に手をやった。

「そうね。まだ一年生だし、それに行く先が外国ともなると、小学校卒業後、ってあたりじゃないかしら？」

「ま、そんなところだろう」

コナンもうなずいた。この推測が大きく外れるとは、このとき、一秒たりとも考えていなかった。もちろん哀も。

「ただいま」

米花町の閑静な高級住宅街の一角、光彦は家に帰ってきた。

「おかえりなさい」

奥で母の声。

光彦はランドセルを持ったまま居間へ行った。

と、そこに父が浴衣姿でくつろいでいた。

「あれ、お父さん、どうしたんですか？」

「おお、おかえり光彦。今日はちよつと会議の都合で早く帰れたんだよ。明日朝一の飛行機で札幌へ行かなくちゃいけないんでね」

光彦はふと思いついた。

「お父さん、コピー機を貸してください」

光彦の父は仕事上家にコピー機を置いており、光彦がコピーを必要とする場合は事前に父親に一言断ってから使っても良いという約束だった。

「ん？ ああ、かまわんよ」

光彦は居間に隣接する父親の部屋に入った。父親も立ち上がって光彦の後を追った。

「何をコピーするんだ？」

「これです」

光彦が差し出したのは、拡大コピーで大きく引き延ばされた写真の一部。それは光彦が三人と別れた後、コンビニのコピー機で作成したものだった。ただ、最終的に作成したものがあと数枚いることを忘れていたのだ。同じものを三枚コピーするだけなら父親にも不審がられないだろう、という判断だった。

父親の目が一瞬細く険しくなったことに光彦は気が付かなかった。

「これは、コナンくんかい？」

「ええ、そうです」

「メガネかけてないな」

「ああ、その日はたまたま忘れたんですよ」

「ふうん」

父親はそのまま光彦から受け取った紙をセットした。

「何枚いる？」

「三枚です」

「わかった」

コピーが三枚出てくる。

「ほら」

「ありがとうございます」

光彦はそれを受け取ると、にこにこしながら二階へ上がっていった。

父親は部屋を出た。と、母親も台所から出てきた。

「あら、光彦は？」

「ん？ ああ、二階に上がっていったが…」

父親の真剣な顔。

「どうかなさいました、あなた？」

阿笠邸、博士はのんびりとアフタヌーンティを楽しんでいた。

電話が鳴った。

「はい、阿笠ですが…おお、円谷さん、いつもお世話になって…は？」

博士の顔が一変、真剣なものになった。

「光彦くんが、新一の…」

「ええ、間違いありません。あれは工藤新一くんの小学校のときの写真ですよ」

「ふむ…すると彼も気が付いた、ということじゃな」

「おそらく…どうしたものでしょうか、博士」

博士の顔から緊張感は消えた。

「光彦くんのことです、遅かれ早かれ気が付くとは思っていました。私たちの予想より光彦くんの成長は早かったと、そういうことです。むしろ喜ぶべきことではありませんかな？」

「ええ、それはそうなんですが、ただ、コナンくんや博士にご迷惑が…」

「ああ、それなら大丈夫。光彦くんは賢い子です。めったやたらに他人に口走るような子ではありません。それはもう、この阿笠博士が誰よりも一番良く知っています」

『ですが、今日、同じ写真を三枚コピーしていました。誰かに配るのではないかと心配で』

「おそらく、切り抜いて今のコナンさんの写真と比較でもするんでしょう。心配はいりませんよ」

『はあ…』

「ご心配なく。彼が私に何か相談してきたら必ずご連絡しますので」
『ええ…わかりました。私たちは博士を信頼しています。これから光彦のことをどうかよろしくお願いいたします』

「ええ、お任せください。私も光彦くんのような優秀な子に出会えて幸せです」

『ありがとうございます。では、失礼いたします』

電話は静かに切れた。

博士もゆっくりと受話器を置いた。

「元太くんが続いて光彦くんもか…やれやれ、皆うれしいほうに期待を裏切ってくれるわい」

博士は楽しそうに紅茶を飲み干した。

あんたの負けかもしれない

「博士、悪いけど、今夜も泊めてくれないか」

学校から阿笠邸に直行したコナンは、居間でくつろいでいた博士にそう言った。

「ん？ わしは全然かまわんが、毛利くんはまだ家に戻れんのか？」

「ああ、おっちゃんは何だか昨日からずっと警察の仕事に関わってるみたいだし、蘭は妃先生のところ泊まるそうだ」

「ほう…蘭くん何かあったのかのう？」

「それが良くわからないんだけど、子供が詮索することじゃないって、おっちゃんが…」

「その言い方は何やら意味ありげじゃな」

「まあ、おっちゃんが詮索するなって言っただから…」

「工藤くん、手伝って！」

台所から哀が呼んだ。

「お、おう」

コナンはランドセルを置くと、台所へ急いだ。

博士は、台所のほうをじっと見ていた。

夕食後、コナンは庭に出て、小五郎の携帯を使って英理の自宅に電話した。

『はい、もしもし』

「あ、妃先生、コナンです」

『あらコナンくん、どうしたの？』

英理の声は明るかった。コナンからの電話で焦っている様子もない。しかし相手は百戦錬磨の弁護士。額面通りに受け取ることはできない。

「その、蘭ねえちゃんに何かあったんですか？」

『え？ ああ、大丈夫よ心配いらないわ。ちよっと学校でいやなこ

とがあつてね、それでね』

「いやな事?」

『大丈夫よ。二・三日したら帰るから』

「蘭ねえちゃんに代わってもらえませんか?」

『ごめんね、今電話に出られないの』

「え?」

『ごめんねコナンくん。今は詮索しないでちょうだい…でも大丈夫よ。体はどことも何ともないから』

こう言われては、コナンとしてもそれ以上追及することはできなかった。

「わかりました。それじゃ、おやすみなさい」

『ええ、おやすみなさい』

電話は切れた。

「蘭によりしく伝えてくれって、言つたほうが良かったな」

九州沖縄地方は今日も大荒れの天候だと天気予報は伝えていた。こちら米花町の空も昨日に引き続きどんより曇っていた。

下校時刻、元太を除く四人はいつものように一緒に校門を出た。

「今日も元太くん来なかったね」

歩美が心配そうに言った。

「でも、沖縄の天気も回復しつつあるそうですし、今夜中には帰ってきますよ」

光彦は明るく言った。

コナンは授業中もずっと考えていた。英理のマンションを訪ねるべきだろうか。哀は、コナンが考えている内容はわかつているものの、かける言葉が見つからない。

すると四人の目の前に、この近所では滅多に見かけない、一台の黒塗り高級乗用車がゆっくり停車した。

「まさか誘拐！」

光彦が口走った。

「まさか」

違うイントネーションでコナンがつぶやく。

と、後部座席から降り立ったのは、制服姿の鈴木園子であった。

「ちょうどよかった。コナンくん、ちょっとつきあってもらうわよ。さ、乗って」

「え、僕？」

「そうよ」

蘭のからみだということは明らかだった。

コナンが乗り込もうとすると、まるで当然のように歩美と光彦も続いた。

「ちよつと、コナンくんだけに用事があるの」

「ええ？」

歩美が不満の声をあげる。

「そういうことらしいから、二人とも、遠慮しなさい」

哀が声をかけると、光彦も歩美もしぶしぶ車から離れた。

「じゃあ灰原、後で電話するから」

コナンが車内から言つと、

「ええ、わかったわ」

哀は余裕の表情で答えた。園子はそんな哀をムツとした表情で見つめた。

そして園子が乗り込むと、車はあつと言つ間に発車して去つていった。

「な、何だったんでしょね」

光彦と歩美は啞然と見送った。周囲にいた他の生徒たちが不安げにひそひそ話している。哀はこれから起きるであろうことを予想して、ふう、とため息をついた。

「誘拐犯がいるって本当か？」

「おおい、大丈夫か！」

「誰か車に乗ってない？」

校庭にいた教師数人が走ってやってきた。誰かが知らせたのだから。

「大丈夫です、先生。江戸川くんが、知り合いのお姉さんの車に乗っていっただけですから」

哀が可愛げに言う。

一年国語担当の女性教師が腰を落とした。

「灰原さん、それ間違いない？」

「はい。お姉さんの名前も知ってます。鈴木園子さんです」

うん、と光彦もうなずいた。

「そうです。僕たちの良く知ってる人ですから間違いありません。ねえ、歩美ちゃん」

「うん」

三人の様子を見て、教師たちはほつとした。

「それじゃ、本当に誘拐じゃないのね」

光彦はふふつと笑った。

「鈴木財閥の園子令嬢が、誘拐なんかしませんよ」

「鈴木財閥？」

教師たちは顔を見合わせた。

後部座席に座るコナン。隣に座る園子の機嫌はあまりよろしくない。

「園子ねえちゃん、僕に用事って何？」

「蘭が学校休んでるわね。昨日も今日も」

「え、あ、そう」

コナンの反応に園子は驚いた。

「ちよつとあんた、知らないの？」

「たぶんそうだろうとは思ってたけど……僕、博士の家に泊まってた

から。おじさんの指示で」

「で、おじさんから理由は聞いてないの？」

「子供の詮索することじゃないって言われたから……」

「それで詮索をやめたの？　いつものあんたらしくないじゃない」

「何があつたの、学校で？」

「学校？　違うわよ。あの子、新一くんにふられたのよ」

「コナンはびつくりしたが、かるうじて外見の平静さを保った。

「それ、どういうこと？」

「日曜日の夜に電話があつたの。新一が別の子を好きになった云々つて。もう、泣きじゃくつててよく聞き取れなかったけど、とにかく、そういうことらしいわ」

「夜つて何時頃？」

「八時すぎよ」

（八時？　…つてことは俺と灰原がショッピングセンターで話した後だ…まさかあの場に蘭が…まさかそんな！）

しかしコナンはもう一つ、当面の疑問を解決しなければならなかった。

「だけど僕、新一兄ちゃんからは何も聞いてないよ」

そんなコナンの言葉など聞いていないかのように、園子はポケットからすつと写真を取り出した。

「眼鏡を取つて」

「え？」

「いいから取りなさい」

園子は眼鏡を取り上げた。

「あ、ちょ、ちょっと」

写真とコナンの顔を見比べる。

「似てる…いいえ、同じ人よ」

無駄なことだが、ひととおりの演技はしなければならぬ。

「ちよつと、眼鏡返して」

素早く眼鏡を奪い返すコナン。大きく見開かれていた園子の目。

すうつと細くなった。

「コナンくん、あなた、新一くんね」

「へ？ 何言ってるの？ 園子ねえちゃん」

「ごまかさないで。蘭だつてとつくの昔に気がついてるのよ」

「や、やだなあ… 蘭ねえちゃんは勘違いしてるんだよ」

そんな言葉は想定の内。

「いいわ。あんたがあくまで隠しとおす覚悟なら、それはそれでいいわよ。あんたにもいろいろ事情はあるだろうしね。でも、これだけは忘れないで。いい、蘭は、あんたのことひたすら信じて待っているのよ。だから… わかつてるでしょ、新一くん！」

「待つてるだけじゃだめなんじゃない？」

コナンの声は低く重かった。

「ちよつと、それどういうことよ」

「自分の幸せは自分の手で掴み取るものなんだ。誰も与えてはくれないよ」

キツとコナンをにらむ園子。コナンの胸元を掴む。

「あんたねえ、そのどこが小学一年生のセリフなのよ！」

につこり子供モードのコナン。

「… って左文字が言ってたよ」

コナンが見せたあまりの落差に、思わず手の力がゆるむ園子。

「… と、ところであんた、哀ちゃんが好きなの？」

「大好きだよ。友達だもん」

園子の手を逃れ、しっかり子供モードで答えるコナン。

「そうじゃなくて！」

コナンは、そうだ思い出した、という露骨な演技をしてみせた。

「ねえ、園子ねえちゃん、園子ねえちゃんを好きだつて言ってた若王子さんって人、覚えてる？」

「わかおうじ？」

「テレビ局で声を掛けて来た人で、ほら、喫茶店で待ち合わせしてたじゃない」

「覚えてない。その人が何？」

「その人が今、園子ねえちゃんを好きだって言ったら、園子ねえちゃんはどうする？」

「どうするって…そりゃ顔を見て…」

「相手が好きだって言っても、園子ねえちゃんも好きになるわけじゃないでしょ」

「当然じゃない」

コナンの目が細くなった。

「新一兄ちゃんだって同じだと思うよ」

くわっと睨む園子。

「それどういうこと？ あんたまさか、蘭はただのお友達だった、って言うんじゃないでしょうね」

「だ、だから、僕は新一兄ちゃんじゃないんだってば」

「じゃあ新一くんに伝えてくれる？ あんたと新一くんは不思議な連絡手段があるみたいだから。いい、このとおりに伝えるのよ。今すぐ帰ってきなさい。蘭はあんたにふられたと思いこんで、自殺するかもしれないわよって。わかった？」

「無駄だと思うよ」

「何で！」

「言ったでしょ、自分の幸せは自分の手で掴み取るものなんだって。それに、蘭ねえちゃんはそのことで自殺なんかしないよ」

「さてはあんた、確信犯ね」

「かくしんはんって何？」

とぼけるコナンを園子は無視した。

「灰原哀って子を好きになったから、蘭のことは捨てるって言うのね。さんざん待っていてくれって言い続けてのは、どこの誰なのよ！」

コナンはうつむいた。

「園子ねえちゃん…」

それは低く悲しげな声だった。

「何よ」

「人が生きていくってことは、どこかで必ず他の誰かに悲しみをもたらしてる…受験だってそうでしょ。合格した人がいれば、不合格の人もいるんだ」

「だから何!」

「人を愛するってことも同じだよ。もし新一兄ちゃんが蘭ねえちゃんを選んだとしたら、今度は別の女の人が泣くことになるんだよ」

「それが、あの灰原って子なわけ?」

顔を上げるコナン。

「人を本当に愛するってことは、そういうことなんだ。子供のおままごととは違う」

「おままごとって…あんたまさか、自分と蘭の関係がおままごとだった、なんて言うんじゃないでしょうね」

「園子ねえちゃんの知ってる新一兄ちゃんは、昔の新一兄ちゃんだよ。今はもう違う新一兄ちゃんになってるんだよ、きつと」

「へえ、蘭も私も知らないようなことを、よく知ってるわね、小学一年生のあんたが」

コナンは園子から視線をはずした。

「蘭ねえちゃんだって気がついてるよ」

「どういうこと?」

「気がついてても、怖いから認めたくないだけなんだ」

「勝手なこと言わないで! そもそも待っててくれて言い続けたのはあんたじゃない! あれは全部嘘だったの?」

コナンは園子に顔を向けた。悲しみを湛えた、厳しい顔だった。

「その罪は一生負わなければならない。それだけの覚悟が無ければ、人を愛する資格なんてない。それが人間なんだ」

園子ははっとした。コナンの言葉に驚いたのではない。コナンが見せた不動の覚悟に、心打たれた自分自身に驚いたのだった。

「…あんた、本気なのね」

「僕はいつも本気だよ」

コナンは子供モードに戻っている。

園子はしばしコナンの顔を見つめ、まいったというように頭を振った。

「そう、わかった」

自分に言い聞かせるように言い切った。

「悪かったわね、変なことに付き合わせて…で、どこに送ればいいの？」

園子があっさり撤退したことに、コナンはほっとした。園子の口から蘭に何が伝わるかはわからないが、蘭があの日との哀との会話を聞いてしまっている以上、もはや後戻りは許されない。

「それじゃ、とりあえず博士の家に」

コナンは完全に子供モードだった。

園子は神妙な面持ちで前の席に身を乗り出した。

「米花町二丁目へ行ってくれる？ 22番地の阿笠邸よ」

「かしこまりました、お嬢様」

コナンは窓の外の、流れる景色を見ていた。口元にはかすかに微笑みすらたたえているかのように。

園子は、驚きと半ば羨望も混じったような奇妙な表情でコナンを見ていた。

（蘭、これはもう、あんたの負けかもしれないわよ）

届かなかった想い

蘭はベッドの上でじつと、薄暗い天井を見ていた。

カーテンの隙間からの光がだんだん弱くなってくる。外はもう夕方なのだ。何時間時計を見ていないのだろう。

ドアが開いて、小五郎が入ってきた。しかし蘭は反応しなかった。枕元にはきれいに食べられた食器の乗ったお盆。

「おお、飯はちゃんと食ってるみたいだな」

小五郎は明かりを付けた。ぱっと部屋が明るくなった。

蘭はゆるゆると首を動かして、小五郎を見た。

「お父さん…お父さんは知ってたのね。最初から、全部」

「ん？ コナンのことか…阿笠博士から頼まれてな」

「お母さんも知ってた」

「そりゃあ、俺が話したからな。あの子は誰、って聞かれたから」

「どうして、私には黙ってたの？」

「俺はコナンの意志に関係なく知った。だから知っていても知らないふりをしていたんだ。お前に知らせるかどうかはコナンの判断だろう」

「…結局私は、最初から完全に蚊帳の外だった、ってことね」

「英理から聞いたと思うが、新一が生きていることは秘密にしなければならぬ。俺が今日まで、いかにして秘密を守ってきたか、身近で見ていたお前にはわかるだろう、そういうことだ」

「私だって、秘密くらい守れるわよ」

「それがうぬぼれたと言うんだ。お前は自分の身の程というものを知らない」

「私はそんなに馬鹿だと言うの？」

「蘭…新一の、いや、コナンが今いる世界は、お前にはついていけない領域にあるんだよ」

「どうしてそんなことがわかるの！」

「簡単な例で言おう。お前には、コナンの行動を助けるだけの知識と経験があるのか？」

「そ、それは…」

「いいか、世の中には百メートルを10秒以下で走れるやつもいれば、2m以上のバーを飛び越えられる者もいる。漢字を何万字も書けるやつもいれば、何十桁の暗算をこなせるやつもいる。野球の選手はテニスが下手でも飯は食えるし、将棋の棋士は囲碁が弱くても何も問題はない…つまり、お前がコナンの足手まといにしかならぬ存在であつたとしても、お前には、まったく別の領域でお前の才能を活かせる場というものがあるんだ。必ずな」

「あ、足手まといって…ひどい！」

「何がひどい。ならお前は、今すぐ内閣総理大臣の秘書を務められるか？ 足手まといになるだけだろう。同じことだ」

「そんな極端な例を持ち出さないで」

「人はよく自分に才能がないと言って嘆くが、それは間違いだ。単に自分の才能を活かせる場を発見していないだけだ。それはなぜか、努力の方向が間違っているからだ。人間、まずやるべきことは、自分の能力を活かせる場を見つけることなんだ。活かすことができない場に固執すること、これこそ人生最大の不幸だ」

「私が新一に固執するのは間違いだって言うの？」

「その通り。残念ながら」

「どうして？ 私はただ新一を好きなだけよ。新一だって私を…私を好きだった…そのはずよ。あの日、トロピカルランドで別れるまでは」

「ほう、好きだと言いつたか」

「そうよ。いけないの？」

「お前の好きっていうものの中身は、新一に何かしてほしいうってだけだろう」

「違う。私だって新一のために何かしてあげたい」

「そばにいたいだけじゃない、そう言いたいんだな」

「もちろん！」

「お前は新一のために命も賭けられる。コクーンの時もそう、ツイ
ンタワールビルの時もそうだったな」

「そうよそうよ、そのとおりよ」

「たしかに、そいつは誰にでもできることじゃない。だから、お前
は自分に自信を持っていいんだ。だがな、それでもお前の新一への
感情は、所詮子供の時のまま…もう大人のコナンには届かないんだ
…ふふ…まったく奇妙な話だな」

「私はまだ高校生だもん、その、恋愛とか、そういうものに、子供
っぽいところがあるのは当然でしょ！」

「だが、コナンは大人だ。それも、そこらの本当の大人など足下にも
及ばないほどにな。残念ながらからお前が割り込む余地はないんだよ」

「その相手が哀ちゃんだって、言うのね」

「そうだ」

蘭はがばつと布団を被った。

「知ってたわよ、そんなこと…コナンくん、哀ちゃんともものすごく
真剣な顔して事件の話をしてた…たぶん私なんか理解できないよう
な難しい話よ…あれがコナンくん、新一が本当に話したかったこと
なんだって…そんなこと、そんなことすぐにわかったわよ。その相
手が私には無理だったことも…」

「そういうことだ。わかっているのなら、自分の道を誤ったりはし
ないな…少し安心したよ。さすが、俺の娘だ」

小五郎は明かりを消し、お盆を持って静かに部屋を出ていった。

その頃元太は、ちょうど店じまいが終わって、これから夕食、と
いうところの小嶋商店に帰ってきた。

「ただいま」

「おお、おかえり。大変だったなあ」

元太同様大柄な父親。

元太は彼には珍しい神妙な顔をしている。

「なんだ、その顔は？」

父は最初笑いを漏らしたが、元太の様子を見てすぐに引つ込めた。居間に父と母そして一番上の兄と一つ年下の妹、そして元太、一家全員が集まっていた。元太は家族を前にきちんと正座して座った。「電話で言ってた、家族に大事な話ってなんだい？」

母親が尋ねる。

「お前が改まった話をするなんて、何かあったのか？」

兄が不思議そうな顔をする。

元太は一つ息を吸い、吐くと、切り出した。

「父ちゃん、母ちゃん、俺、アメリカへ行きたいんだ」

兄と妹は大いに驚いたが、父と母は驚く様子もなく聞いていた。

「アメフトをやるんだな」

父は念を押すように尋ねる。

「ああ……じゃなくて、はい、そうです。だから、いや、ですから……」

元太は大きな体を窮屈そうに曲げて頭を下げた。

「父ちゃん、母ちゃん、俺をアメリカに留学させてください。お願いします」

兄はあっけに取られた。

「おじさんに誘われたのか？」

元太は顔を上げた。

「そうだけど、これは俺が自分で決めたんだ」

「だけど、お前、まだ小学一年生だぜ、まさか今からなんて」

「早ければ早いほどいいっておじさんが言ってた。俺も一日も早くアメリカへ行つて、スーパーボウルを目指すんだ」

「おいおい……」

半ば本気にしない兄に対し、父はうむとうなずいた。

「元太、後悔しないな」

「当たり前だ」

父と母はお互いを見て、うなずきあった。

そして父は元太を見て言った。

「そうか…なら行つてこい。そのかわり、やるからには世界一を指せ」

兄は大いに驚いた。

「と、父さん、だつて、そ、そもそもそんな金、うちには…」

「大丈夫だよ」

母親が優しい表情で元太を見ながらそう言った。

「阿笠博士の推薦で、奨学金がもらえることになってるんだよ」

「奨学金？」

妹が不安そうに立ち上がった。

「お兄ちゃん遠くへ行っちゃうの？」

母はそつと妹の肩に手を置いた。

「大丈夫。所詮同じ地球の上だからね。それに、一年に一回くらいは帰つてこられるだろ」

「正月は無理だけど夏には帰れるつて、おじさん言つてた」

「で、いつ出発するんだ？」

父親は具体的なことを話し出した。

「ええと、横浜港三月三十一日午前十時三十分、さんらいず丸だ」

兄は驚いた。

「横浜港つて、お前、船で行くのか？」

翌日、久しぶりに晴れて気持ちのいい朝。

コナンは今日も阿笠邸から登校である。

通学路、コナンと哀は並んで歩いていた。

「ねえ、ちよつと気になつてるんだけど」

哀が唐突に切り出した。

「ん？ 何を？」

「彼女のお見舞い、行かなくていいの？」

哀は普通の声で普通に言った。昨日、園子に連れられて見舞いに行ったと思いこんでいたのだが、帰宅後、そうでなかったことだけ聞かされていた。

「おっちゃんも妃先生も、今はそつとしておいてくれって言っから
…やめとくよ」

コナンも普通の声で答えた。

「そう…」

コナンは哀を見た。

哀はその視線に気が付いた。

「何？」

コナンはふふつと笑った。

「お前は聞きたいだろうし、俺は話したい。昨日からずっと」

「え？」

「昨日、園子と俺が何を話したか」

「そうね。聞きたいわ」

一呼吸間を置いて、コナンはぽつりと言った。

「聞かれていたんだ、蘭に」

哀には一瞬何のことだか理解できなかった。

「日曜日の夜八時すぎ、蘭から園子に電話がかかってきたそうだと泣きながら、新一にふられた、と」

あまりの事態に、驚愕の哀。

「それって、まさか！」

「そうだ。妃先生の事務所からの帰り、俺たちの会話を聞いてたんだよ、蘭は」

哀は、まるで平静に話すコナンの顔を凝視した。

「…落ち着いてるわね」

「焦ってどうなる？」

哀にとって、コナンの反応のほう驚きだった。

「いつかはわかることだよ」

コナンはそう言った。

「それでいいの？ 工藤くん？」

「ああ、いいんだ」

「…強いよね」

「そうか？」

「そうよ」

コナンは微笑んでいた。心の動揺は本当にないようだった。

「俺は、お前に出会えてよかったって思ってるからな」

「そ、そう」

哀はあわてて下を向いていた。

「どうした？」

哀はぱつと顔をあげた。その顔は真っ赤だった。

「こんな顔してるの、男の子には見られたくないものなの！」

「コナンくん」

光彦だった。

哀はあわてて首を振った。

「どうしました灰原さん」

「別に」

すっかりいつもの顔に戻ってる哀。

「おはよう、哀ちゃん！」

歩美は今日も元気いっぱいである。

「おはよう」

哀もにこやかに答える。

あきれるコナン。

（やっぱ可愛い女…）

四人が校門の前に差しかったとき、元太が前を歩いていた。

「元太くん！」

光彦が呼んだ。

くるりと振り向いた元太は、四人が知っているいつもの元太では

なかった。

「おはよう」

声にも何やら重みを感じられる。

「ど、どうしたんだ、元太？」

コナンは軽いうるたえを言葉に出してしまった。

「悪かったな、飛行機の事故で学校休んじまってよ」

「いやあ、あれは事故じゃありませんよ。不可抗力ですよ」

「ふかこうりよく？」

歩美はいつものように素直な質問。

「そうだぞ、光彦、ふかこうりよくって何だ？」

少しいつもの調子が出てきた元太。

「ああ、不可抗力というのはですね…つまりその、その人にはどうすることもできない事象を言うんです」

ふふつとコナンと哀は笑った。

「おい光彦、それじゃ事象ってのが余計に難しいぞ」

「うん。じしうって何？」

案の定歩美が尋ねた。

「ま、事象は置いといて…不可抗力とは、人にはどうすることもできない力ってこと。たとえば今回飛行機が飛べなかったのは嵐のせいだよ。嵐なんて小嶋くんにはどうすることもできないじゃない」

「なるほど、さすが哀ちゃん」

「おお、俺にもよくわかったぞ」

光彦はうむとうなずいた。

「なるほど…事象という言葉は正確を期しすぎた、ということですね」

一人納得する光彦に、コナンと哀は軽い疑惑の視線を向けた。

「ところで元太くん、沖縄はどうでしたか？」

話の切り替えが早い光彦の質問に、元太の顔は神妙になった。

「お、おう、その話は、昼休みに発表する。それまで待ってくれ」
顔を見合わせる四人。

昼下がり、妃英理のマンションでは、ようやく起きてきた蘭と英理が向かい合って紅茶を飲んでいた。

「お母さん、仕事はいいの？」

「事件のおかげでしばらく暇になりそうだし…あなたとこうやってゆっくり話すいい機会よ」

「ごめんなさい」

「いいのよ。たまには母親を頼りなさい」

「うん…」

「少しは気持ちの整理がついた？」

「全然…でも、いつまでも落ち込んでてもしょうがないし」

「そうよ。しっかりしなさい。長い人生いろいろなことがあるわよ」
チャイムが鳴った。

「あら、誰かしら」

インターホンに向かう英理。

「はい」

『こんにちは。園子です。蘭はいますか？』

「あら園子ちゃん。ちょっと待ってて」

寝室のベッドの上に欄と園子は並んで座った。

「どうしたの？ こんな時間に」

「早引けよ、早引け。親友が落ち込んでるときに、じっと授業なんか聞いてられないでしょ」

「ごめんね」

「いいのよ。気にしないで。はい、これ。英語と数学のノートのコピー」

「ありがとう」

「でもよかった。想像してたより元気そうじゃん」

「そうでもないよ…」

園子は蘭を真剣な表情で見た。

「ところで蘭、あんたの言ってたとおりだったわ」

「え？」

「コナンくんよ。あの子、ほんとに新一くんだったのよ。理屈は知らないけど」

「うん…」

「でね、昨日、あの子に聞いてみたの。本当はどうなんだって？」

「新一かどうかって？」

「違うわよ。あんたをふったわけよ」

蘭は驚いた。

「ちよつと、ほんとにそんなことしたの？」

「ええ。でもね…」

園子の顔は曇った。

蘭は自嘲するようにふつと笑った

「のらりくらりとかわされたんでしょ」

園子は首を横に二回振った。

「待っててくれて言い続けてたのはあんたじゃない、あれは全部嘘だったのって言ったら、そしたらあの子、何て言ったと思う？」

いきなり核心をついた言葉に、蘭は思わず息をのんだ。

「その罪は一生負わなければならぬ。それだけの覚悟が無ければ、人を愛する資格なんてない。それが人間なんだ…ってそう言ったのよ」

蘭はその言葉をかみしめるように、頭の中で反芻した。それは紛れもなくコナンの、そして新一の言葉だ。

「そう…」

悲しいというよりも寂しいという顔だった。

「つまらん言い訳したら、ぶん殴ってやろうと思ってたのよ…だけど、あの子、急に大人になってた…私、反論できなくなっ…」

少し笑顔をつくる園子。

「ほら、私は、あんたと新一くんのこと小学生の頃から知ってるし、ずっと相思相愛だと思ってたの…なのに…なのにね、あの子をひどい奴だっと思えなかったんだ…」

「子供のおままごとだったのよ」

「蘭…」

「私は今でも新一を好き、それは本当。でも、新一には…コナンくんには届かなかった…」

たとえ他の全てが偽りでも

給食後の昼休み、少年探偵団の五人は校舎屋上にいた。

「みんなと別れるのは辛いけど、俺はアメリカへ行くことにした」

元太がそう宣言した。

「決心したんですね」

光彦は深くうなずいた。

ここまでの急展開は予想外だったコナン。

「元太、今日この場でそんなことを言うことは、まさか、すぐにでも行くってことか？」

ぎよっとする歩美。

「横浜港三月三十一日午前十時三十分、さんらいず丸だ」

これにはさすがに驚くコナン、哀、光彦の三人。

「ちよっと、それってまさか、船で行くってこと？」

目が丸くなっている哀。

「そうだ」

「しかし、また何で船なんだ？」

コナンも思わず声が上ずる。

「向こうの新学期は九月なんだ。だからそれに間に合えばいいってな」

「そりゃそうかもしれないけど」

「だけど、もう半年もありませんよ」

光彦の言葉にさらにぎくつとする歩美。

「俺もみんなと別れるのは辛いけど、けどな、プロになってスーパーボウルに出るんだ。人生の目標ってやつができたんだ」

元太は胸を張った。

歩美はもう泣き出しそうだった。

「元太くん、ほんとに行っちゃうの？ アメリカに」

「ああ」

「そんな…」

歩美は言葉が続かなかった。しかし、光彦は驚いてもいなければ、悲しんでもいなかった。

「歩美ちゃん、元太くんは、人生の目標に向かって旅立つんです。だから、めでたいことじゃないですか」

コナンも驚きから現実への対処に頭を切り換えた。

「そうだな…それに、まだ今日明日ってわけじゃないんだし、今からそんな顔してたら、元太だって辛いぞ」

歩美ははっとした。そして泣きそうなところを我慢した。

「ところで小嶋くん、どうしてアメフトの選手を目指すことにしたの？」

哀には確認しなければならなかったことがあった。

「お、おう…それはだな、かつこいいからだよ」

「かつこいいって？」

「でかい男がさ、思いつ切りぶつかり合って、一個のボールを前に持っていく…すげえ迫力なんだぜ」

「でも、それならラグビーのほうが迫力あると思うけど？ アメフ

トみたいにプレーが切れないし」

「お、おい灰原？」

哀の意図を掴みかねるコナン。

しかし、元太は悠然と言った。

「直感だ。それも強烈な直感だ」

「直感？」

「ああ。これが俺のやるべきことだってな」

「それだけ？」

真剣に問う哀。

「おじさん言ってたぞ。人間の大きさは直感を信じられるかどうかだってな。俺もそう思う」

「そう…でも、お父さんお母さん、よく許してくれたわね」

「おお、それは博士だよ。博士が…ええと…何とか金ってやつをく

れたんだ。だからお金の心配はないし、博士が認めるなら間違いないって父ちゃんも言ってた」

「何とか金って、それ、もしかして奨学金のこと？」

「おお、それだ、それ」

「ふうん」

哀はかなり真剣に何事か考え込んでいた。コナンも途中から険しい表情に変わっていた。

今日も引き続き阿笠邸に泊まることになったコナン。哀と二人で帰ってくると、博士は居間のパソコンに向かって何やらデータベースにアクセスしていた。

「おお、おかえり」

コナンと哀はランドセルを椅子の上に置くと、お互いに見合った。そして、うんとうなずいた。

「博士、話がある」

コナンが口火を切った。

「ん？ 何じゃ？」

博士が振り向くと、二人とも恐ろしく真剣な表情だった。

「どうしたんじゃ？ 二人とも。そんな顔して」

「元太がアメリカに行くことになった」

「ああ、知つとるぞ。トミーから聞いた」

「トミー？」

「元太のおじさんじゃよ」

「知り合いだったのか」

「まあな」

「どういう知り合い？」

哀も完全に大人モードだ。

「ど、どういうって…」

「博士、世話になっててこういう質問するのは失礼かもしれねえけど、博士はいつたい何者なんだ？」

眼光鋭く迫るコナン。

「何者って、わしゃあ一介の発明家じゃよ」

「俺たちの戸籍はどうした？」

「戸籍？」

「ああ、そうさ。江戸川コナンと灰原哀の戸籍だ。そんなもの、どうやって作ったんだよ」

ふむ、と博士は微笑んだ。

「まあ、お前たちが気が付かんはずもないか」

「それともう一つ。小嶋くんだけじゃない。円谷くんも吉田さんも、彼らの両親とどういう関係なの？」

哀の言葉に、博士は感心したようにうなずいた。

「ほう、そこまで気がついたとったか」

「当然だぜ。だいたい、ツインタワービル事件の後にしたってそうさ。あんな危険な目に会えば、普通の親なら、もう阿笠博士の家に引っ越さなければ、って言うぜ。それ以前からでもずっと思ってたんだ。三人の両親はあまりにも寛容にすぎるってな」

博士は穏やかに微笑んでいた。

「ここはひとつ、わしを信じてはくれんか」

予期せぬ言葉に、二人は絶句した。

「確かに、お前たちの言うとおり、わしはお前たち二人だけじゃない、元太くん、光彦くん、歩美くんの三人にもある関わりを持っておる。じゃがその関わりの中身について、今は何も言えん」

「俺たちが薬でこんな体になったのは偶然のできごと……もしかして、それすらも違うんじゃないか？」

予想だにしなかったコナンの言葉に、哀はぎょつとした。

「偶然でないとしたら、どうなんじゃ？」

哀の驚きと不安をよそに、コナンは思わぬことを言った。

「光彦」

「ん？」

「あいつ、明らかに小学一年生の頭脳じゃない。俺たちのように年上の経験があるようには見えないけど、それだからこそ余計に、あいつの分析力、知識の豊富さは尋常じゃねえ」

「ふむ、確かにのう」

博士はあごに手をやってしばし考えた。そして、二人に優しくな視線を向けた。

「今は言えないことじゃが、いつか話すこともあるじやろう。理由もその時にわかる。その時まで、このわしを信じていてはくれんか」
コナンと哀はお互い見合った。そしてコナンが口を開いた。

「俺たちも、博士が俺たちを犯罪に巻き込むような悪人じゃないってことはわかってる。俺と、特に灰原、二人の防波堤になってくれているってこともな。今ここで、博士から全ての秘密が聞けるとは思ってない。でも、これだけは知りたい。俺たち五人は、何か、実験の駒なのか？」

「駒だなんてとんでもない。わしはお前たちの輝かしい未来への手伝いをしておるだけじゃ。わしには子供がおらん。じゃからわしはお前たちに、わしの想いというものを伝えたい、伝えていってほしい、そう思っっておるだけじゃよ」

「博士の想い？」

「そうじゃ。次の世代により素晴らしい未来を、とな。人間は一人一人がリレーの選手なんじゃよ。歴史というバトンを前の世代から渡される。渡されたバトンは少しでもより良いものにして、次の世代に渡さなければならぬ。その連続なんじゃ。わしは、わしが受け継いだこのバトンをお前たちに手渡したい、そう思っっておるんじやよ」

コナンが泊まっている二階の部屋、といってもベッドと机しかない部屋。

食事の後、コナンと哀はベッドに並んで座っていた。机の上には

ポット。

コナンはポットからカップにコーヒーを注いだ。

「もう一杯どうだ？」

「もうわ」

コナンは哀のカップにもコーヒーを注いだ。

「ふふ…あなたって、本当にコーヒーが好きなのね」

「おっちゃんの家に行ったときはなかなか飲めなかったから、だから、今は幸せだよ。ささやかだけど」

二人でコーヒーを飲む。

カップを口から離れたコナンは、哀を横目に見た。

「博士のこと、どう思う？」

「そうね…その前に、一つあなたに質問」

「ん？」

「私たち二人が小さくなったのも偶然ではない…そんなことがあり得るのかしら」

「俺がトロピカルランドでジンに薬を飲まされた…あれは本当に偶然だったかもしれない。だがお前は…薬を飲んだ、そこまではお前の意思だったとしても、その先は、俺が知っている範囲で考えても偶然ではないと思う」

「どういうこと？」

「お前がいた研究所、茨城県つくば市にあっただよな」

「ええ。でも、市の中心部からは離れた、四方を田畑や山林に囲まれた田舎だったけど」

「お前はその研究所内で薬を飲み、拘束を逃れた。その後、直線距離で60キロ以上離れたここまでやってきた。そのときの経緯を覚えてるか？」

哀は少し考えてから、

「よく覚えてないわ…」

ぽつと言った。

「不思議だとは思わないか？」

「え？」

「そもそも、どうやって研究所を抜け出したんだ？ 警備はかなり厳重だったんだろ？ 仮に、研究所の敷地からはうまく逃れられたとしても、お前は大人の服を身にまとっていたはずだ。だぼだぼの格好で小さな女の子がよたよた歩いてたら、通りがかった大人が声かけてくるんじゃないか？ あの田中さんみたいに」

はっとする哀。顔はみるみる青ざめていく。

「研究所から、一番近い駅までだって十キロはある。その間どうやって移動したんだ？ バスにでも乗ったのか？」

全身震える哀。

「実を言つとな、俺自身にも不審な点はあるんだ。お前が転校してきた日、俺はお前に、研究所が炎上したという新聞記事を見せられてる。当然、研究所の場所も目に入った。今から考えれば不思議でしかたない。俺はなぜ、60キロもの移動に疑問を抱かなかったのか」

「ありえない…覚えてないなんて、そんなこと、ありえない！」

言葉も震えていた。

「お前、俺の家を二度訪れたって言ってたよな。その時は当然、研究所の車、だろ？」

小さくうなづく。

「つまり、同じように車で運ばれたのさ。その日も」

ぎくつと体が動いた。

「小さくなったお前が工藤新一の家に向かう、そして阿笠博士に助けられる…全てはシナリオに書かれていたことだったんだ」

認めたくない事実、哀は震える顔をかすかに横に振った。

「それじゃ、私たちの出会いは…」

「ああ、最初から全て仕組まれたことだったんだ」

コナンは落着いていた。微笑も忘れなかった。

「心配するな。偶然であろうとなかろうと、俺はお前に出会えてよかったと思ってる」

視線も定まらない哀。

「工藤くん、私…私、怖いわ」

「怖い？」

「もしかしたら記憶、そればかりか思考まで誰かに操作されているんじゃないかって、そう思うと…私…私はいったい…」

コナンは震える哀の両肩を持った。

「え？」

そしてそのまま自分の体に引き寄せた。

「あ、ちょちょっと」

「静かに」

コナンは哀の背中に手を回し抱きしめた。そして、耳元でささやくように言った。

「考え出したらきりがないさ…けどな、俺がお前に出会えて良かったと思ってること、お前を好きだ、愛してるってこと、こいつだけは絶対に誰かの仕業じゃない、俺の本当の気持ちだ」

コナンの腕にぎゅっと力が入る。

哀は目をつむった。

「ありがとう、工藤くん」

「…それだけか？」

堰を切ったように、その言葉は出た。

「愛してる。あなたを」

心臓はどきどきしていたが、心はすうっと落ち着いてきた。

「その気持ちも他人の仕業だと思うか？」

哀は首を小さく横に振った。

「私の気持ちよ。これだけは絶対」

瞬間、心と体を一条の閃光が貫いた。

そうだ。だから、たとえ他の全てが偽りでも私は生きていけるのだ、と。

コナンは体を離れた。

哀もゆっくり目を開ける。目の前に、コナンのやさしい顔があった。

「俺たちってミステリアスだな」

哀の心から、恐怖は嘘のように消え去っていた。

「それもいいんじゃない？ 自分の人生が平穏なものだって予感、ないんでしょ？」

「ああ、全然」

ふふつと笑いの漏れる二人。

だが、すぐにコナンの表情は怪訝なものに変わった。

「怖いってのはどうしたんだ？」

「博士に全てを教えてもらうときまで、棚に上げとくわ」
哀は明るく微笑んでいた。

アンカーでなくても

警視庁、刑事部長の四角い顔は、穏やかではなかった。

「これではマスコミが騒ぎ出さないか？」

「妃英理にちよっかいを出すマスコミがあるとは思いません」

直立不動の松本が言い切った。

「ふむ」

刑事部長はゆっくりと立ち上がると、窓から法務省の赤煉瓦庁舎を見下ろした。

「東京地検は未だに何とも言ってこない。この件を警察に押しつける気だ」

松本のほうへ顔を向けた。

「ならば、警察の事情で決めてもよからう」

刑事部長は席に戻ると、決裁印をぐいっと押した。

目暮は自分の椅子にどかっと座った。

「白鳥くん」

「はい」

「君も来てくれ」

「何でしょう？」

「来ればわかる」

会議室には、美和子に高木、そして鑑識のトメさんがいた。

その奇妙な顔ぶれに白鳥は首をひねった。

目暮はカセットプレーヤーをテーブルの上に置いた。

「君たちが集まってもらったのは他でもない。妃法律事務所の件だ」

「方針が決まったんですね？」

高木が尋ねた。捜査は、上のほうの判断待ち、という理由で止まったままだった。

「捜査は打ち切りと決まった」

目暮の言葉に、白鳥はもう一度首をひねった。

「送検もしないんですか？」

「そうだ」

「どういうことです？」

目暮はカセットを取り出した。

「これからこのテープを聴いてもらう。聴けばわかることだが、他言は一切無用」

再生ボタンを押す。

『それでコナンくん、今日私に話したい大人の話ってなあに？』

『今回の事件、僕たちなりに調べたんだ』

『コナンちゃんと灰原さんね。森田高光さんから聞いたわよ。昨日家に行ったんですってね』

「コナンくんが？」

高木がつぶやく。

「しっ」

美和子は口到人差し指を立てた。

『三年前の事件、そして今回の事件、そもそもは六十年前の満州であつた出来事が原因なんだ。昭和十八年五月、新京東病院の薬剤部に勤務していた森田宗太郎さんと種子田春江さんは結婚した。そして高光、千里の二人の子供をもうけた……』

コナンの良く通る声に聞き入る面々。

『……つまり、貴方の推理を警察、検察に披露したところで、私への処分が変わる可能性はまったくないのよ』

『わかっています。奈良井剛市さん、森田宗太郎さん、春江さん、この三人が守り抜いた秘密は、僕も、ここにいる灰原も、このまま墓場まで持っていけます』

目暮以外、驚きの表情を隠さない一同。

『甘いわね……いえ、優しすぎる、とでも言うのかしら。現実は何、もっとどろどろとして醜く汚いものなのよ……森田宗太郎と名乗って

いた人物が実は別人であったこと、奈良井剛市と名乗っていた人物が本当の森田宗太郎だということ、それは貴方の言うとおり。でもね、森田宗太郎さんの本当の名前は武市明。奈良井剛市という名前は、新井から逃れるさいにソ連軍に撃たれて死亡した武市さんの同僚の名前。本当の森田さんが武市さんに身代わりになってもらったのは、病気でも怪我でもない、彼がソ連軍に追われていたからよ…」

英理の言葉に神妙な面持ちの一同。

「…後はだいたいコナンさんの推理したとおり。春江さんが私に恨みを抱いた理由は、彼女と会ったときにその視線でわかったわ。私が自分の無敗記録を伸ばすために色香で夫をたぶらかした、とでも思ってたんでしょう」

目暮は停止ボタンを押した。

「これが事件の真相だったんだ」

白鳥はうむとうなずいた。

「なるほど…」

「しかし、我々も森田高光さんに事情聴取しましたが、身代わりのことなんて…」

高木がつぶやくように言う。

「完全ではなかったにせよ、あそこまで推理するなんて、コナンくんと哀ちゃんって…」

美和子も真剣な表情。

目暮はじろりと一同を見た。

「このテープの内容については、警察の公式な書類には一切記載されていない」

「どういうことですか？」

高木が腰を上げた。

「高光さんと千里さんに、自分の父親だと思っていた人物は実は身代わりの他人で、本当の父親は空き巣の常習犯だったと教えるつもりかね？」

白鳥が冷静に言った。

「あ、ああ、なるほど…それでコナンくんは秘密を墓場まで持っていくと…」

「そういうことだ」

目暮が立ち上がった。

「では…」

「待ってください、警部！」

高木も立ち上がった。

「ん？ 何だね」

「コナンくと哀ちゃん、一体何者なんですか…コナンくんは本当に工藤…」

「高木くん！」

目暮は高木の声を遮った。

「一七歳の人間が七歳児に逆戻りした…もしもそんなことが世間に漏れたら、いったい何が起きるかね？」

神妙な面持ちになる白鳥。驚く高木。

「そういうことだ。警察の仕事とは何か、もう一度教科書をよく読んでみるんだな」

目暮警部はカセットを持って会議室を出ていった。

トメさんは穏やかに微笑んでいた。

「では、私はこれで」

そう言って出ていった。

高木は美和子を見た。

「何？ 高木くん」

「いえ…松本管理官の言葉の意味が良くわかりました」

「そう。一つ賢くなったわね、お互い」

美和子は微笑んだ。

（まずいな…）

白鳥はまったく別のことを考えていた。

「忘れ物はないか？」

小五郎が尋ねた。

「うん。大丈夫だよ」

コナンはにこやかに答えた。

「よし」

小五郎はバンの後部ハッチを閉めた。

毛利探偵事務所。コナンが約十ヶ月間暮らした家。

あの日以来蘭とは会っていない。今日も蘭は姿を見せなかった。

「これをお前に返しておく」

小五郎は一通の封筒を差し出した。

受け取って中を見ると、額面一千万円の小切手が入っていた。変装した母、由希子が、小五郎に養育費だと言って渡した小切手だ。

「おじさん、これ！」

「お前もまだまだ何かと入り用だろう」

「でも、おじさん……」

「心配するな。俺は、中古とはいえ家一軒、キャッシュで買える男なんだぞ」

「だ、けど」

「もし、お前が俺に恩義を感じているのなら、お前が成人したとき、今度はお前が、別の誰かを助けてやればいい」

コナンはうんと深くうなずいた。

「わかったよ、おじさん……長い間、本当にありがとうございました」
コナンは深々と頭を下げた。

「ああ。俺も楽しかったよ。自分に息子ができたみたいで……さ、行くぞ」

「うん」

阿笠邸に着くと、博士と哀が門のところ待っていた。

2月、風はまだ冷たい。

「わざわざ外で待っててくれなくてもよかったのに」

コナンがそう言うと、博士がにやりと笑った。

「いやな、哀くんが…」

「同居人が正式に引越してくるんですもの、このくらいわね」

哀は平静な表情で言った。それだけ言うと、くるりと後ろを向いてしまった。

「さ、おじさん、こっちです」

さつさと玄関に入っていつてしまう。

小五郎はふふつと笑った。

「おお、コナン、お前もなかなかやるじゃないか」

「はあ？」

「彼女、君が来るのをそわそわしながら待っておったんじゃ」

「別に、荷物を運んできただけなのに」

「まあまあ、とにかく運んでしまいましょ」

小五郎が後部ハッチを開けた。

コナンの荷物と言っても、着替えと身の回りの小物、段ボール二個の本くらいのもだった。それを二階の部屋に博士と小五郎で十分もかからずに上げてしまった。

小五郎はすぐに車に戻った。

「じゃあな、コナン。さよならとは言わん。またな」

「おじさん、上がってちよつと…」

「ああ、この後ちよつと重要な用事があつてな、慌ただしくてすまんが、俺はこれで」

博士がコナンの肩に手を置いた。

「コナンくんのお仕事はお任せください」

「ええ、よろしく願います、博士。では」

小五郎は軽く頭を下げると車を発車させた。

車が見えなくなるまで、コナンは深々と頭を下げていた。

「さ、中に入ろうか」

博士が優しく言った。

「うん」

居間に入ると、哀が台車を押して来たところだった。パソコンが乗っている。

「用意しておいたわよ」

「おお、サンキュー。いやあ、欲しかったんだ俺専用のパソコン」
しかし白いパソコン本体は飾り気もなく。まことに無骨なものだった。

「メーカーは…赤星金属？ 何か聞いたことないメーカーだな」

「ああ、これはケースのメーカーよ」

「ってことはこれ、いわゆる自作PCってやつ？」

「そうよ。メーカー品じゃ性能が全然遅れてるし、部品の交換が面倒でしょ」

「いやあ、まあ、俺としてはウェブとメールくらいで…後は…」

「だめよ。パソコンっていうのは、性能が気になるくらい使いこなさなきゃ」

「そうかあ？」

「大丈夫。私が教えてあげるから」

「いや、基本的なことは…」

「とりあえずパソコンのセッティングくらい自分でやりなさい。女の子にーから十までやってもらうんじゃ、男の矜持が許さないですよ」

「別に、そんなことで矜持云々なんて…」

コナンは哀に引っ張られるようにしてエレベーターに乗った。

そして、正式にコナンのものとなった部屋に入った。

「パソコン本体は机の上に置く？」

「そうだな…」

机の上にパソコンを上げるのは小学生には無理というもの。

「上にあったほうが便利だけど、博士呼ばないと」

「ふふ…あなたにしては観察が足りないわね」

哀が台車の取っ手にあるボタンを押すと、台車はぐぐぐと持ち上がった。

見ると、床との間で縦長の風船のようなものが膨らんでいた。

「へえ、これは…」

あつと言う間に机と同じ高さになったので、パソコンを二人ですりずり移動させた。

「こいつはすげえや。どういう仕組みなんだ？」

コナンは風船状の物体を触った。

「こちこちに固いな…これは一体？」

「秘密」

哀はさらりと言った。

「え？」

「この仕組み、世の中に出したらものすごく役に立つと思うでしょ」

「ああ、こいつはすごいよ」

「でも、出すわけにはいかないの」

「どうして？」

「現在の物理学では説明できないから」

「ど、どういうことだ？」

「博士の発明品には結構あるのよ」

「お、おい…」

「そう、阿笠博士という人は、既知の科学では説明できない物を作る人なのよ」

「そんなばかな」

「本当よ。キック力増強シューズなんて物を使ってて、今まで気が付かなかったの？」

コナンはぞつとした。

「い、言われてみれば…」

「ようするに、阿笠博士という人は、私たちの想像をはるかに超えた人なの」

コナンはうーむと考え込んだ。

くすつと哀は笑った。

「どうする？ 同居はやめとく？」

「いや、そんなとんでもない人物の側にいると、この先、いろいろ面白いことがあるそうだ」

「ふふ… おいおいわかると思うわ。この家にある数々の超科学技術がね。それもさりげないところに」

コナンは椅子に座った。

「だんだんわかってきた気がする」

コナンは不敵に笑っていた。

「え？」

「俺たちはやっぱり実験の対象なんだ」

「どういうこと？」

「人類が発展させてきた既存の科学とはまったく違う、高度な文化の技術がどこかに保存されているんだよ。宇宙人の置きみやげなのか、超古代文明の遺産なのか、そいつはわからないが、それを解禁しても大丈夫かどうか試してるんだ」

「博士がすなわち宇宙人だった、なんてこともあり得るわよ」

「ああ、そういうことだってあり得る」

「怖くないの？」

「怖がってどうする？ 今さら。ここまで深くかわってしまった後で」

「そうね」

哀はそう言っで窓辺に移動し、窓の外を見た。

「私は、そういう解禁しても大丈夫な人間を育ててるんだと思うけど？」

「ああ、もちろんそういうこともあるだろうな」

「円谷くんも歩美ちゃんも、その対象ってわけね」

「もちろん。元太は元太でまた何か別の目的があってアメリカに送るのさ」

「この先、どういう未来が待っているのかしらね」

「俺たちはゴールを見ることができないのかもしれない」

「え？」

哀は振り返ってコナンを見た。

「博士が言ってただろう？ 人間は一人一人がリレーの選手なんだって。つまり、俺たちがアンカーでなくても何も不思議ではないのさ」

ふふと哀が笑った。

「そうね。SFなんかじゃ、何百年と先祖代々受け継がれてきた秘密の、まさにアンカーが主人公ってことは良くあるけど、そこに至るリレーの途中の人たちだって、主人公と同じように生きた人間だったんだものね」

「そういうこと。ま、そのうちゴールを予測できるくらいにはなれるだろう。博士が手元に置いておいてくれるんだから」

コナンは哀をじっと見た。

「退屈しない人生になりそうだな」

「小学一年生がおじんくさいこと言わないの」

「おじんくさい？ そうかな？」

「そうよ。人生の話もいいけど、当面の仕事仕事」

「ああ、そうだった」

「じゃ、これ」

哀はOSのディスクを差し出した。

「え？」

「インストールよ。だって、ハードディスクはまだフォーマットもしてないもの」

哀はにまっと笑った。

コナンはやれやれと思った。

あなたに出会えて本当に良かった

三月。桜の花が満開を迎える頃、横浜港に停泊していた豪華旅客船が出航の準備を進めていた。棧橋の掲示板に「さんらいず丸」の文字と「桑港」の大きな文字。

「これ、何て読むの？」

黄色のワンピース、おしゃれな歩美が「桑港」を指差す。

「ああ、これは、そうこうって読むんだ」

下ろしたてのブレザーを着たコナンが答えた。前のブレザーはもう着られなくなっていた。

「そうこう？」

「くわこう、じゃないんですか？」

光彦が尋ねた。

「ああ、そう読む人もいるが間違いだ。湯桶読みになるだろ」

光彦は感心したようにうなずいた。

「なるほど。ということは、桑の字の音は『ソウ』なんですな。一つ勉強になりました」

「ねえねえ、ゆとうよみて何？」

歩美が真剣な顔で質問。

「漢字の読み方に音と訓というのがあった。たとえば米花町の『カ』の字、この字には『はな』という読みもあるだろう？ この『カ』の読み方が音で、『はな』が訓だ。ふたつの漢字で出来る言葉の場合、音なら音、訓なら訓だけで読むことが一応正しいとされている。で、さっきの『そうこう』だけど、これは『ソウ』も『コウ』も音。光彦が言った『くわこう』だと『くわ』が訓になる。湯桶読みというのは『ゆ』が訓で『トウ』が音だから、『くわこう』みたいな読み方を注意する時に使うのさ」

歩美はうーんと考えていた。

ピンクのフリル付きワンピースを着た哀がくすつと笑った。コナ

ンもしまったと思った。

しかし、歩美の次の質問は、コナンと哀の意表をつくものだった。
「その、音と訓ってどうやって区別するの？」

「え…ええと、それはだな…ま、まあ、漢字をもっと勉強していけば自然にわかるようになるよ」

「コナンくと光彦くんはどうしてわかるの？」

光彦は胸を張った。

「僕の場合はですね、ロンドンにいるとき、ほら、周りが英語ばかりじゃないですか。だから、日本語も大事にしないと、ってことで一ヶ月くらい集中して毎日漢字の勉強したんです」

コナンは焦っていた。

「あ、ええと、俺、漢字が好きなんだよ。ほら、俺って漢字一杯知ってるだろ」

歩美は今ひとつ納得していない様子だったが、ちゃんと当初の疑問を覚えていた。

「それじゃ、そういうの意味は？」

「サンフランシスコのこと。中国語でサンファンシーサーコーって書くと、最初のサンが桑の字になるの。これに港町であることを示す港という字を付け加えて、桑港。昔はこう書いて略してたのよ。それを、日本では『そういう』と読んでいたってわけ」

哀が答えた。

「サンフランシスコって元太くんの行くところ？」

「そうよ」

「じゃあ何でサンフランシスコって書かないの？ 地図にもカタカナで書いてあったよ」

「今回元太くんの乗る船は、昔の世界一周旅行船を再現した船ですからね。それで、そういう細かい演出をしてるんですよ」

光彦が得意げに答えた。

「えんしゅつつて…」

歩美の言葉にコナンと光彦は身構えた。

「映画とかドラマでやってるやつでしょ」

「あ、ああ、そうだ」

「つまり、見せ方の工夫、だよな」

歩美はにっこり笑った。

ほっとするコナン。

「おお、お前たち、ひさしぶり」

小五郎だった。後ろに英理と、そして蘭がいた。

「蘭ねえちゃん…」

「コナンくん、久しぶり」

蘭はにこやかに言った。

「う、うん…蘭ねえちゃんたちも元太の見送り？」

「ええ」

哀はコナンを見ていたが、コナンは少なくとも表面上は落ち着いていた。

「ハロー、みなさん」

元太のおじさんだった。元太の親戚らしく大柄で恰幅のある明るい人物。背広が窮屈そうだった。

そのおじさんに付き添われて、ブレザー姿の元太が緊張した面持ちで立っていた。

コナンはぱつとそちらを向いてしまう。

「あ…」

蘭の顔から微笑みが消える。

「元太くん…」

歩美も元太の姿を見て、急にさびしそうになった。

元太は大げさににやりと笑った。

「お、おう、心配するな。向こうに行ったら、電子メール覚えて写真入りのメールを送るからよ。それに、船の上からも電話する」

「待ってますよ、元太くん」

光彦が右手を差し出した。

「ああ」

元太も右手を差し出して握手した。

「そしてな」

元太は歩美の手を左手で取った。そして光彦の手に重ねた。

「光彦、歩美のことはお前に任せた」

思わず顔を見合わせて、赤くなる光彦と照れる歩美。

コナンは微笑みながら元太に近寄った。

「元太、元気でな」

「おう。コナンも、灰原にもっとやさしくしてやれよ」

コナンはふふつと笑った。

「ああ、わかつてるさ」

哀もすつと歩み出た。

「小嶋くん、元気でね。夢が叶うこと、祈ってるわ」

「そういや灰原、お前転校してきた日に、俺の隣に座らずにコナンの隣に座ったじゃねえか。あれ、どうしてだったんだ？」

一秒たりとも予想していなかった質問に、哀も一瞬答えに詰まったが、すぐにふつと笑った。

「小嶋くんと同じ」

「え？ 俺と？」

「そう。直感よ。それも強烈な直感」

にやつと元太は笑った。

「そうか。お前の直感は正しかったと思うぜ」

「ええ、ありがとう」

「ゲンタ、そろそろ行きます」

時計を見ていたおじさんが促すように言った。

「お、おう」

おじさんと元太がタラップのほうへ歩いていった。そしておじさんは係員に乗船券を見せた。

元太はもう一度みんなを振り返った。

「じゃあな。行ってくる」

元太の両親と兄弟が前に出た。

「気を付けてね」

母親が元太の手を握った。

「ああ、大丈夫だよ、母ちゃん」

「世界一になってこい、元太」

父親が力強く言った。

「ああ、必ず！」

元太も力強くうなずいた。

「おにいちゃん！」

妹は泣いていた。

「泣くな。俺はお前が誇れる男になって帰ってくる。そのために出かけるんだ」

「ゲンタ！」

おじさんがタラップの上から呼んだ。

「お、おう」

元太はタラップを駆け上った。

そしてタラップは外された。

哀は笑顔で船を見上げていた。

「飛行機とは全然違うわね」

隣に立っていたコナンも船を見上げた。

「ん？ 何が？」

「何ていうのかしら、旅立ちの友を送るということの風情というか感動というか……」

「教育的効果を狙ってるんだよ。飛行機であつさり行くよりも船で時間をかけていくことにな。その証拠に、おじさんまで一緒に乗ってるだろ」

「小嶋くんだけじゃなくて、私たちにもよ」

「そうだな。こんなこと、今時そうそう体験できるものじゃないかな」

話す二人の後ろに蘭がいた。船を見上げるコナンを、そっと見ていた。

「お、元太だ」

甲板の上から紙テープを投げる元太。他の乗客も次々と投げる。歩美はぱつと駆けだして元太の投げた紙テープを拾った。

「歩美ちゃん！」

光彦も駆け出す。

「がんばってね、元太くん！」

歩美は叫んだ。

元太に聞こえていたかどうかはわからない。元太も大きく手を振っていた。

「行こう」

コナンは哀の手を取った。

「え？ あ、ちょっと」

コナンも駆け出して、栈橋の縁まで行った。引つ張られて哀も続く。

「がんばれよ、元太！」

コナンも大声で叫んだ。

「小嶋くん、元気でね！」

哀も大声で叫んでいた。
やがて船は動き出した。

「元太くん！」

歩美は泣いていた。

「さようなら！」

光彦も叫んでいた。

元太も何事か叫びながら大きく手を振っていた。
船はゆつくりと、しかし確実に遠ざかっていく。やがて元太の姿もわからなくなった。

ぐずぐず泣いている歩美の肩を、光彦はそっと抱いた。

「歩美ちゃん、元太くんは夢を追って希望に燃えて旅立ったんです。さ、泣かないで」

「うん、うん… 光彦くん」

歩美は光彦にすがりつくようにして泣いた。

光彦は真っ赤になりながらもじっと立っていた。

「行っちゃったな」

コナンは小さなシルエットとなった船を見ていた。

「ええ」

コナンは哀の手を握ったままだった。

蘭は遠くからそんな二人の後ろ姿を見ていた。

哀はちらつと蘭の姿を視線の端に捉えた。それからコナンの横顔を見た。

コナンはじつと船を見ている。哀の手には、コナンの手の微妙な力加減の変化が伝わってくる。それでも、決して後ろを振り返ろうとはしなかった。

蘭は静かに微笑んだ。

（さよなら、新一…）

四月、二人が二年生となる始業式の日。

コナンと哀は阿笠邸の玄関に並んだ。

「よし、撮るぞ」

三脚のカメラを覗く博士。

そして切られるシャッター。

二人はいつもより少し早く家を出た。雲一つない快晴。通学路沿いの桜の木も、今まさに満開であった。

「今日から二年生か」

「早いものね」

「それは俺たちが一九歳だからだよ。歩美や光彦たちには長い一年だったはずだ」

「そうね…でも、いろいろあったわ」

「そうだな…去年の今頃からじゃ、想像もできなかった」

二人は、しばしそれぞれの思いにふけりながら黙って歩いた。

「ねえ」

「ん？」

「クラス分けだけど」

「たぶん同じクラスさ。四人とも」

「あなたもそう思う？」

「ああ。クラス分けつてのは恣意的だからな。だいたい、お前が1

・Bに入ってきたことからして、偶然であるわけがないだろ」

「そうよね」

ふふつと哀は笑った。

「私たちは、所詮博士の手のひらの上の孫悟空」

「それもいいさ。博士が俺たちに手渡そうとしているバトンの中身、大いに興味があるからな」

哀は大真面目な顔でコナンの顔をのぞきこんだ。

「一つ、聞いてもいい？」

「何だ？」

「私、子供の頃の思い出なんて、一日中化学の勉強をしていたな、つてことしかないの。だから、今は毎日がものすごくかけがえのない大切なものに思えるの」

「…そうか」

「けどあなたは、私からすれば普通の子供の生活を体験してきたわけで、今は二度目になるわけでしょ？」

「まあ、そういうことになるな」

「退屈だとか、人生を損した、とか思っていないの？」

「つまり、お前の目には、俺が全然そう思っていないように見える、つてことだな？」

「もし、気分を悪くしたのならごめんなさい」

「気分が悪いなんてことはないさ。俺は江戸川コナンなんだ。工藤新一じゃない。だから、最初のうちはともかく、今は、退屈なんて

感じてゐる暇なんかない。まして、人生を損じたなんて、考えたこともない」

きっぱりと言い切るコナン。

「何よりも、お前に出会えたからな」

哀は、コナンの視線を逃れるかのようにぱつと駆け出した。

「え、あ……」

三メートルほど先で立ち止まった。

「私も……」

くるりと振り返る。

「私も、あなたに出会えて本当に良かった」

（おわり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6462d/>

小学生日誌一年生編

2010年10月8日13時28分発行